

ハイスクールDxD 大罪 七不思議のバルバトス

零乃龍夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冥界の上級悪魔の一人

カイト・バルバトス

彼は元72柱の8位。

バルバトス家次期当主にして

後に『傲慢の王』と呼ばれる彼と繋がる物語

・クロスオーバー（随時増える）

魔法少女リリカルなのは

結城友奈は勇者である

戦姫絶唱シンフォギア

ストライク・ザ・ブラッド

ソードアート・オンライン

東方Project

・作者の趣味と暴走あり

・なるべく原作沿い（原作沿いとは言っていない

・説明下手（駄文

・でも一部（かなり）の設定改変あり

・無駄に長い設定（設定厨

※誠に勝手ながら「」の時に名前を付けていたのですが、なしの方向で行こうと思いません。

※一部の話、特に「この回必要なくね？」って話は消させていただきます。誠に勝手ながらすみません！

目次

本編開始

プロローグ

戦闘校舎のフェニックス

はじまりと憂鬱

会談と対面

特訓前の下準備

開始の合図はハンマーで

予想外な自体

反省と説明

それぞれの風景

それぞれの風景

それぞれの風景

『女王』と『僧侶』

160

144

124

106

90

70

39

18

1

194

それぞれの風景 『王』と『兵士』

176

特訓の終わり、変化と不穏

レーティングゲーム、開始

赤と青の龍

赤い龍の剣

悪鬼の龍

赤と紅の誓い

赤龍と鳳凰

326

308

287

271

251

233

218

本編開始

プロローグ

駒王町……そこは裏の世界では悪魔が領地とし、現在元72柱56位のグレモリー家次期当主のリアス・グレモリーを領主とし、同じく所有物である駒王学園で拠点に管理されている町。

そしてその夜、その町の廃虚となった協会近くの森に一つの影が動く。

見た目は16歳近く、身長は170いくかいかないか位の身長に見た目細めの体型、髪は夜でも透き通るように見える黒髪。

顔はまだ幼さがありながら凜とした表情、無表情が似合う童顔。

そして青く、いやさらに濃い蒼い輝きを放つ瞳はとても幻想的で異様な雰囲気を漂わせている。

カイト・バルバトス

彼は元72柱の8位で上級悪魔。

純血悪魔の父と天使の母の間から生まれ、

悪魔の中では『異物の悪魔（イレギュラー）』と嫌うものもいる。

「・・・何処だっけ？ 墮天使とはぐれ神父が問題起こした所って」

彼の目の前にはボロボロで所々に穴が開いてる協会。

つい先日、ここで墮天使とはぐれエクソシスト達がここで儀式を行い、それを上級悪魔のリアス・グレモリーと眷属達が現れ、墮天使とはぐれエクソシストを倒し、その後とある集団が領主の目を盗み行動している事を報告を受けて彼は来ている。

歩いて行くうちにカイトは協会の入口近くに着いた。

その辺りで一つの影を見つける。

「カイト、ようやく来たか」

「・・・シグナム。ごめん少し遅れた」

「いや、時間は丁度だから問題ない。それより奴らは報告通り地下の部屋で儀式を行っている。何せ墮天使とはぐれ神父が倒された事で無人になった今、警戒が手薄なこのタイミングを狙っての行いだらう」

その姿はピンクのポニーテールに凜とした顔立ち。

髪と同じ色をした西洋の騎士甲冑を見に纏い、右手には少し機械的な感じのする刀のような剣を握っている。

その他に特徴的なのは女性にしては高い身長に加えてそれに合わせて服越しでわかる大きな膨らみのある胸がとても魅力的で男なら思わず目をうばわれるような程美しい女性なのがわかる。

「・・・ふーん・・・とりあえず今回はその儀式の阻止、それとそこにいる連中を殺せばいいんだよね？」

「そうだ、今はグレモリーとシトリーの娘が色々と忙しく動けないそうだ。よつてこの件はこちらに任せられたのだ」

「・・・まあ、どうでもいいや。早く終わらせて帰りたい・・・」

「ああ・・・ああっそうだ。それと主から伝言が一つあるぞ」

「・・・ん？」

「今日の夕食はクリームシチューだから作って待っているだそうだ「10分」・・・ん？」

「・・・目標までの移動。敵の殲滅。その後の確認と調査を合わせて10分。いい？」

「フツ了解だ」

そうやって彼らは廃虚の協会に入り、地下に続く階段を使い目標の場所へと向かう。

「・・・此処？」

「そうだ。ご丁寧に結界が貼ってあるが・・・問題ないだろ？」

「・・・こんなのは結界なんて言わない」

「そう言うな・・・今日は『神器』を使うのか？」

「・・・相手による」

地下を歩き続けてようやくやく扉のある場所までたどり着いた。
奥には数十人の気配があり、その中心には大きな魔力を漂わせている。

「……………『鉄血』」

カイトは自身の右手の親指を噛み血を流す。
そこから流れる血が段々黒く、大きな塊になり――

「……………『黒爪（クロツメ）』」

――右手には彼の体格に合わない程大きな真つ黒な鉄の塊のまるでメイスのような鈍
器物……『黒爪』が現れた。

「……なんか思っていたよりも数がある？」

「そのようだ、どうする？」

「……もちろん……殺すだけだよ」

「まあ、それしかないな」

そうやって黒爪を構える。

女性の方も剣を構え、戦闘準備を取る。

「行くぞ」

「……うん」

その合図と共に女性は扉を切る。

扉は呆気なく壊れ、その空間が姿を現す。

「だ、誰だ！ぐアアアアツ!？」

男が吠えたのと同時にカイトは動く。

黒爪を振り回し、はぐれエクソシストを次々と吹き飛ばし、潰し、なぎ倒していく。

「まさか悪魔か!?クソツ!直ぐに儀式を完成させろ!それさえ出来ればガアアアツ!?!？」

「ヒイツ!？」

「た、助けツ!？」

はぐれエクソシスト達は悲鳴を挙げながら一人、また一人と倒されていく。倒されまいと悪魔が嫌う光の剣や悪魔祓いの弾が入った銃で応戦する。

「……遅いな」

カイトの速さについていけずに地に倒れる。

次々と倒していく中で突如赤い光が空間の中で輝く。

「よ、よし完成だ！後は」

「……させないよ」

カイトは黒爪を魔術師が困む魔法陣に向かって投げる。

「ガアアアアッ！」

衝撃によって魔術師達は吹っ飛ぶも魔法陣の輝きは消えない。

「ハハッ！もう召喚魔法は起動した！これで貴様ら悪魔は終わりだ」

「……」

「今から召喚されるのは過去に歴史に名を刻んだえい「うるさい」グエエエエッ！」

叫ぶ男を黙らせるため黒爪で潰す。

「・・・アレ・・・使うか」

そう言つて持つている黒爪を地面に突き刺す。

「ガフツ・・・ハハツ今更何やつてももう・・・」

ガチャンツ

突如耳に入る音

その音はまるで鍵で何かを開けたり、閉じたりする時の音と全く似ている。その音を認知したと同時に二つの現象が起きる。

一つ目はカイトの手にいつの間にか持っていた銀色の剣。

その形は少し剣にしては変形していて刃の部分は白銀色の輝きのある刃に持ち手の部分は白と黒と灰色で出来た持ち手の下の部分にはチェーンで繋がったキーホルダーが付いている。

そして二つ目は、先程まで光っていた魔法陣が急に輝きを失い、まるで何も無かったかのようになった。

「な、何故だ!?! 貴様は何者だ! その手に持つてるのは何なのだ!?!」

男が叫ぶ、カイトは声が聞こえる方を向き再び血を垂らし黒く変形させながら男に歩みを進める。

「……別にアンタには関係ないでしょ?」

「なツ……ガッ!」

はぐれ魔術師を足で踏みつけ、身動きを取れなくさせる。そして……黒く変形していた物は絡み付くように右腕を隠すほどの巨大な黒い砲身が現れる。

「……アンタがどう思おうと俺には関係ない」

砲身をはぐれ魔術師に向ける。

砲身は腕から青い……蒼い線が砲身の先集まり光り始め、その光は集うように輝きを増し――

「……アンタが敵だつて事に……変わりはないんだから」

――その言葉と共に蒼い閃光と銃声だけが残る。

「カイト。こちらの方は終わった……。そっちもどうやら終わったようだな」
「……うん、お疲れ」

剣に付いた血を払いながらシグナムはカイトの方に向かうが、姿が見える辺りで少し呆れと険しさが混ざったような顔でカイトを見る。

「……また血まみれだな。帰る前に無くしておけ、その姿で主にあつてはダメだぞ」
「……分かつてる。教会内にある水溜りで流しておく」

「いや、そんな所でしなくとも……シトリーの所に行つて洗い流させて貰えばいい
だろ」

「……そこまで行くのに勿体無い。早く帰つてーのご飯が食べたい」
「……はああ、まあいい私は此処で待つてる。早く行つてこい」

カイトは協会の一室に向かいシグナムは協会の椅子に座る。

「あいつは本当に凄いな……眷属を、主を救い、それだけでなく我々を救ったあいつは……本当に感謝しきれない。だからこそ、我らは主とアイツを……カイトを、支えなければ」

グツグツと煮える音。

優しい香りと部屋を漂わせる湯気が食欲を沸き立たせる空間を作り上げている。

「ふんふんふんふん♪……っん……良し、いい感じやー！」

所変わって駒王町から少し離れた町の家。家と言っても元武家屋敷の家で純和風建築でかなり広大な面積をもった大邸宅である。

そんな家の居間にある調理場で一人、女性が料理をしている。

セミシヨートの少し暗めの茶色の髪の見た目10代前半位に見える女性。

シャツの上にエプロンを付けてシチューの鍋を混ぜながら鼻歌を歌い、味見などしながら料理をしている。

「うーん、そろそろ皆帰ってくる頃なんやけどなあ・・・」

そう言いながら今度は包丁を使い野菜類を切る。トントントンとリズムのある音を鳴らしながら食材を切っていく。

・・・とそこでガチャッとドアを開けて入ってくる音が響く。少したってから一人の女性が部屋に現れる。

「はやてちゃん。カイト達が終わったって。今から帰るそうですよ」

「そうなん？こつちも出来たしそろそろ準備せんとなあ。シャマル、ちよつと手伝って貰ってもええ？」

「わかりました！」

入ってきた女性は同じショートボブの金髪・・・シヤマルは着ていた白衣を脱ぎ、料理をしている女性・・・はやての方へ向かう

「じゃああの棚の皿を並べて貰ってもええ？」

「はい！あ、ーちゃん達も来るそうですよ！今日は早く終わったって。」

皿を出して、居間のテーブルに並べる。

「そうやと思って今日は多く作つといたんよ。カイトも喜ぶなあ〜」

ガチャ

「あつ来た！シヤマル、シチュー見といて貰える？ええ、絶対変な事したらあかんよ」
「えつちよつとはやてちゃん!?変な事つて何!?えええー!?!」

ドアの開く音を聞いた途端、料理を作ったはやては玄関のある方を向き、今度は嬉し

そんな顔をしながら調理場にシャマルを置いた状態で廊下に行くドアを開きに玄関に向かう。

廊下の曲がり角で玄関で靴を脱ぐ彼がいた。

自分の王で、自分が大好きな彼が……

「おかえりなさい、カイト♪」

「……うん、ただいま。はやて」

カイト・バルバトス

彼は特殊な力を持つ。

バルバトスは古来、力天使とも主天使ともいわれる程天使に近い存在とされている。

動物の言葉を理解できるなどの能力を有し、また過去と未来をよく知り、友情を回復する力を持つともいう。

現在は冥界ではそれなりに権力を持ち、様々な貴族の家と友好な関係を築き、自分の領地では絶滅危惧種の保護や農業などを営み、貧困地域の援助なども行っている。

差別意識は無く「来るもの拒まず、去るもの拒まず」と言った自由主義で身内に手を出す輩には容赦しない。

これだけの地位を持つのは同時に純粋な力を持っているからである。悪魔の中でも最大の身体能力と純粋な魔法力を有し、カイトの父が『黒拳力（ストレンジス）』と呼ばれる程に冥界の中でも力の象徴としている。

だが、カイトはそれだけではない。

カイトはバルバトスの力を持ちながら母の天使の力を有している。

そして、もう一つ。

それは『聖書の神』が作り出したセイクリッド・ギアと呼ばれる神器達とは違い。本来この世に存在しない神器。

後に『大罪神器（シン・セイクリッド・ギア）』と呼ばれる神器の一つ。傲慢を司る神器『支配の鍵剣（インペル・キープレード）』を宿している。

この神器を手に大切なものを守るカイトは後に呼ばれるであろう『傲慢の王（スペルヴィア・バルバトスレクス）』の名と自分の存在、大罪神器。

そして他の大罪神器を持つ同じ者と転生者の存在の意味を知ることになる。

戦闘校舎のフェニックス

はじまりと憂鬱

夢、何度も見る夢

それはカイトが時々見る夢

その夢はいつも暗闇から始まる。

今まではこんな暗闇じゃ無かったがいつしかこのような暗闇から始まっていた。

いや、どちらかと言えば何も無い『無』の空間と言えはいいだろう。

本当は何かある空間のはずなのだが夢と言うのもあってこのような曖昧な空間になっっているのだろう。

―やあ、お目覚めかい？―

声が聞こえる。

実際にカイトは聞こえないが頭の中に文字と声に似た『何か』が聞こえている。

―早速だけど……君は死んだんだ―

―でも【君の死はもつと先】だったんだよ―

―本当に困ったな……

カイトはいつものように勝手に話し始めるその声にも何も言わずに聞く。

何せカイトは毎回見る夢の中でいくら口を動かしても声が出ない為諦めているからだ。

体も動かそうにも動けない、ただ立っているだけ。

—だから新しい人生を得られるんだ—

—でも君は大きな罪があるんだよね—

—『傲慢の罪』………—

—いや………—

—君は罪を『———』方が正しいかな？—

傲慢の罪………そんな記憶はない。

いや、そもそもカイトは『以前の記憶が思い出せない』のに分かるはずがない。

だから後半はかなりノイズ音が多く途中で何を言っているのか分からなくても彼には余り気にしない。

毎回同じ内容な為、気にならなくなったのだ。

—この罪は消せそうにないんだよね………—

―だからその罪を力に変えようと思うんだ―

―この罪は君に『何か』を与えるけど―

―この罪は君の事を蝕むかもしれない―

カイトの前に三つの台が現れる。

その台にはそれぞれ赤と青と緑の丸い光の玉が置かれている。

―力は君に勇気を与え―

―力は君に破壊を与え―

―理は君に真理を与え―

―理は君に破滅を与え―

―守は君に仲間を与え―

―守は君に臆病を与え―

そこでようやく体が動く。

いつものようにここで選ばされる。

―さて……この中から欲しいモノを一つ、差し出すモノをひとつ選んでね―

―さあ、迷わずにただ手にすればいい……―

―君は何を望み?―

―その為に……―

―君は何を差し出す?―

カイト「……………」

毎回選んだ。

毎回選び続けた。

他に選択は考えたことは無い。

……………さあ—

……………君の望みはなんだい？—

目が覚める。

大きな柔らかなベッドの上にいる感覚が伝わる。

カイトの意識が覚醒し、顔のみを横に向けて横にある時計で時刻を確認する。

朝の6時。

普段のカイトは7時まで寝ていたが今日は1時間早く起きた

（・・・今から二度寝したら起きれないな）

そう思いカイトは体を起こそうとする。

「・・・ん？」

が起きれない。

腕に強く何かに掴まれた感触を感じる。

「すう・・・うんっ・・・すう・・・」

隣では一人の女性……はやてがカイトの腕を抱き枕にするように眠りについて
いる。

「……………寝よ……………」ボソツ

そのままカイトは隣に眠る自分の『女王』、八神はやての方を向きながら再度眠りにつ
いた。

時刻は12時

カイトとはやては遅い朝食を丁度食べ終えた所。

今の机には二人しかいなく、テレビに流れるニュースの音しかない。

「はあく……………さて今日も一日頑張らんなあ」

「……他の皆は？」

「学生組はいつも通り学校で、他は書類仕事と肉体労働……あとは一件討伐依頼が来たからそつちに向かつてると思うで」

はやては食器を洗いながら話す。

カイトは洗った食器を拭いて、吹いた皿の上に新しく乗せる。

「……そう言えば今日の午後だよね？例のアレ……」

「うん？……ああ、そうや。夕方前辺りに駒王学園つてグレイフィアさんが言うてたよ」
「……確か、グレモリー家とフェニックス家のレイティングゲームに対してリアス・グレモリーと眷属達の特訓だっけ？」

カイトがそう訪ねるとはやては頷いて答える。

「グレイフィアさんがなあ……どうも両家の親同士が話を進めたらしいんよ……
フェニックス家の方は問題ないんやけど、グレモリー家の方がなあ……」

食器を洗い終え、カイトは座布団に座りその対面ではやてがお茶を入れ、カイトに渡す。

「リアスさんが婚約を嫌がるから、それならレイティングゲームで決めようってな
な……………」

「……………何それ？」

「いや私もそれどうなん？つと思ったんやけど、お酒の場での会話とは言え、かなり親
同士では良い話と思ったんよ。ほら、グレモリー家ってバアル家とちよつと揉め事ある
やろ？」

「…………えーと、『滅びの力』の事？」

「正解♪」

カイトがお茶を飲みながら答えると、はやては指鳴らしをしながらそう言った

「正確にはバアル家と他上級悪魔家の老人達かな「本来あるべきはずのバアル家に、その
力を返済せよ！」……………」

「…………まだあいつらそんな事言ってるんだ……………」

カイトはお茶を飲み干しながら溜息をつく。

「…………返済って……………ようは返せって事？仮にリアスが嫁入りしたとして子供がで

きた時にその子供が『滅びの力』を宿すとは限らないの?」

「それでも可能性があるからなあ……でももし嫁入りしたらリアスさん、絶対に住みづらいやろう? バアル家の人所か周りも嫌味や嫌がらせがあるだろうって」

「そう思ったグレモリー家はこう言っちゃったんよ……」もう家のリアスは他の悪魔の家と結婚が決まっている。だからそちらに嫁入りすることは出来ない」ってな。でもここでまた問題が起きてなあ……」

今度ははやてが溜息を吐きながらカイトの茶碗を受け取り、お茶を入れる

「バアル家だけならええんやけど問題は他の家も求婚の話があつてなあ、口裏合わせられる家が少なくて……何処も彼処も『滅びの力』を求めてるんよ。結局どうするか悩んでいたグレモリー家は他家の中でそれなりに仲のあり、求婚もしていないフェニックス家と会って……」

「……で、最初に戻ると?」

「そういう事や。ライザーさんならフェニックス家の三男で割と自由が効くし、それに実績もある。加えてフェニックス家自体も『フェニックスの涙』で経済的にも急成長しとる。グレモリー家にとって誤魔化すにはうってつけの相手ってわけや……はいお茶」

「……ありがとう」

と言いながらはやては入れ直したお茶をカイトに渡す。

「ライザーさんは状況を知つとるから了承したんやけど、リアスさんは嫌々の一点張りつて所やなあ……」

「……だからレーティングゲーム……ん？」

受け取ったお茶をまた飲みながらカイトは呟くようにはやてに言う。

「どうしたん？」

「……ねえ、まさかだけどリアス・グレモリーは自分の立場は理解しているの？」

「いや、流石に知つてると思うで。幾ら魔王の妹で周りが甘々やけど……それでも上級悪魔として、自分の置かれてる状況や立場は少なからず分かつとると思うんよ」

「……それでも尚……か……」

そう呟くカイトははやてを見ると、はやては自身の手についてるモノを見て俯きながら呟くように言う

「恋愛ぐらいは普通にしてみたい気持ちは分かるな……私達も……本来ならど

うなつてたか分からんし．．．今でも本当は．．．．．」

「．．．はやて」

はやての手をカイト自身の手を添えるように重ねる。

その手に反応してはやては先程の暗い表情から少し苦笑いをしながら頬をかく。

「あはは．．．いやゝでも．．．今はこうして一緒にいられるんやから、私は幸せやで」

「．．．．．うん」

そう互いに微笑みながら見つめ合う

「．．．．．さて！それじゃあ支度しようなあ」

「．．．うん」

「……あつそうだ、何でそのいぎこぎに俺達に話が来たの？はつきり言うて関係ないよね？」

「そうなんやけどなあ……レーティングゲームするにも実力の差が歴然なんよ。せめてゲームになってリアスさんにも顔を立て流ようにしないとあかんのよ」

「……えーと、一方的にならなければいいの？」

「簡単に言えばそうやな」

「……でも、それこそ別に俺達じゃなくてもよ」

「過去に一度ライザーを八百長なしで倒す所かポコポコの完全勝利をしたのは誰や？」

「……」

はやての言葉に無言で視線を逸らすカイト。

それとは別にはやては話を続ける。

「それとな……この話、どうやら関係なさそうじゃないんよなあ……」

「……？」

「なんか、リアスさん達の特訓の相手を私らにする時、グレモリー家に推した奴らがおるらしいんよ」

「……ああく……アイツら？」

「わかつとるみたいやな……まあ、いつものように私らを嫌うご老人と純血主義の家、それとバアル家や」

今度はカイトとはやてが同時に溜息を吐く。

顔には「めんどくさい」と書かれているかの表情をしている。

「……バアル家はともかく、残り二つは嫌がらせか」

「せや、大方、リアスさんが勝てなかつた場合、『私らの失態』にする気なんやろ。言い分ならいくらでも作れるし……そうやから一眼にも無関係とは言えんそうなんよ。あつ因みにバアル家からは婚約騒動を止めて欲しいそうや、まあ理由としては恐らくフェニックス家に取りられたくないって所やろ」

「……何かもつと色々めんどくさい話になつてるね……」

「……お願いやからそれ言わんでえ。悲しくなるから」

肩を落とすようにはやては言う

「……準備出来た？」

「出来たで……って言うてもそんな荷物いらんから時間掛からんかつたな」

「・・・そもそも話すだけだしね」

「そう言うても何が起こるかわからんからなあ・・・『着いた時には一触即発!』つてなつとるかもしれんし」

そんな会話をしながらカイトとはやては準備を進めた。

—————

はやてとカイトはそれぞれ準備を済ませ、玄関に向かう。

玄関前に着くとそれと同時にドアが開いていくつかの影が現れる。

「結城 友奈! ただいま帰って来ましたー!!」

「同じく立花 響もー!」

「イエエエエー！」

ドアを勢いよく開けて現れたのは赤色の髪と明るい茶色の髪と少女達二人が元気よく帰宅した。

「・・・友奈、響」

「お帰りな〜って事は『学生組』は皆帰ってくるんやな」

そう現れた二人・・・結城 友奈と立花 響にそう言うときさらに後ろからもう二つの影が現れる。

「ただいま。ってカイト？」

「すみません。少しお邪魔します」

「・・・古城・・・それに姫終」

「古城もおかえり。・・・あつ、雪菜ちゃん！久しぶりや」

「はい、お久しぶりですはやてさん。元気そうで何よりです」

次に現れたのは銀髪の青年と黒髪の少女……・・・・・ 古城と姫終 雪菜が友奈と響の後ろから顔を出す。

「……つてか、お前らどっかに行くのか？」

「……今からはやて達と一緒に駒王学園に行ってくる」

「駒王学園……つて？」

「駒王町にある私立の学校ですよ。確か悪魔の、グレモリー家が所有している場所ですよ……・・・・・ 何で先輩は悪魔なのに知らないんですか？」

「い、いやほら。俺は悪魔になつたばかりだからさ」

雪菜の言葉に詰まらせながら頬を掻きながら古城は苦笑いする。

「今日は中学も高校はもう終わったん？」

「はい！それでこのあと、四人で近くのショッピングモールに遊びに行こう！つて思ってたんですけど……・・・・・」

「私と友奈ちゃんが財布を忘れちゃつてへへ……・・・」

そう言つて頭を掻きながら苦笑いする響と友奈。

それを見てカイトはため息を吐く。

「・・・それで一旦帰ってきたんだ・・・古城は？」

「俺はこいつらについて行かないきや、姫終と一緒に遊べねえからな・・・あつそうだ。俺今からそつちについて行くか？お前入れば姫終も自由行動しても問題ないだろ？」

「えっ・・・先輩行かないんですか？」

「ええ〜！古城くんも行こうよー！今日こそゲーセンのUFOキャッチャーで勝つ!!」

「あつ私もー！その後カラオケ行きましょうカラオケ！」

「いや、流石に周りに女子しかない中に俺一人なのは・・・」

古城は詰め寄る3人にたじろぐがここではやてが割り込んで口を開く。

「あく・・・来ない方がええよ？退屈になるやろうし」

「おいおい、いくら俺でも多少退屈でも我慢できるぞ？」

「・・・上級悪魔、純血、婚約・・・」

古城がはやての言葉とカイトの不穏なセリフに「あつ・・・」と察した声を出し、響、友奈、雪菜の3人も察したかのような顔をする。

「そんなに今回の大変なんですか？」

「・・・はつきり言つてめんどくさい」

「ほんま早く帰りたいんやけど、今日は夜に用事が入るしなあ・・・あつ、せやから今日の夕食は皆自由に食べてなあ」

そう行つて手をヒラヒラしながら家を出るため靴を履くカイトとはやて

「は〜い！あつそれじゃあ夜うどん屋で皆で食べるに一票！」

「私はお好み焼き屋に一票！雪菜ちゃんは!？」

「え？ええ〜つと・・・せ、先輩どうしますか？」

「いやいやいや、そこで俺に振るなよ・・・つかうどんとお好み焼きつて・・・とりあえず二人でジャンケンしてくれ・・・」

そのような会話が流れる中、靴を履いてカイトとはやてはドアに手をかけて

「・・・じゃあ行ってくる」

「行ってくるな」

「あつはい！カイトさん、はやてさん。お気を付けて！」

「いつてらつしやうい！」

「気を付けてけよ。後・・・カイトは暴れんじゃねえぞ？」

「・・・それ、先輩が言うんですか？」

四人に見送られながらドアを閉めて駒王町に向かう。

会談と対面

「全員揃ったわね」

駒王学園

小中高大一貫の元女子校であり、現在は共学校である此処は、表向きは普通の進学校ではあるが、その裏では学園トップのほとんどが悪魔関係者で占められている。もちろん普通の人間の生徒も在籍しているが学校に悪魔がいるなど誰も知らない。

そして現在、この学園の旧校舎にある一室に今日も悪魔達が集まっている。

リアス・グレモリー

上級悪魔グレモリー家の次期当主であり、日本に滞在する際に此処駒王町を領土として与えられ、管理している。

そんな彼女は今居る旧校舎の一室、リアスが駒王学園にいる際に立ち上げたオカルト研究部。その部室では自身の眷属とグレモリー家のメイドが集まっている。

自身の眷属である『女王』姫島 朱乃、『騎士』木場 祐斗、『戦車』塔城 小猫、『僧侶』アーシア・アルジェント、そして『兵士』兵藤 一誠。更に『二人』、騎士と戦車で

ある……桐生 藍華と元浜 辰巳がいる。

「お嬢様、私がお話ししましょうか？」

リアス部長にそう言っで入ろうとするグレモリー家のメイドであるグレイファイアの言葉に手でいらないと振っていなした。

「実はね……」

リアス部長が口を開いた瞬間に部室の床の魔方陣が現れた。その魔法陣の光は普段見ていた真紅色のグレモリーの魔法陣ではなく、炎のようなオレンジがかった赤い色をした魔法陣だった。

「フェニックスの魔法陣……」

そう呟いた祐斗は警戒しながら口にした。

彼の漏らした言葉に何人か疑問を抱いていると、魔方陣から人影が出てきた。

魔方陣からは炎が巻き起こって室内に熱気が起きる。

「ふう．．．人間界は久しぶりだ」

そこに現れたのは赤いスーツを着崩した二十代前半くらいのポケットに手を突っ込んだホストのように見える男だ。

「会いに来たぜ．．．愛しのリアス」

そう言ってニヤけた顔をしながらリアス部長を見る男．．．ライザー・フェニックスはそう口にした。

「誰だコイツ．．．?」

「おい一誠。いくら分からないとはいえ、どう見ても俺達より身分の上そんな人にコイ

ツ呼びはダメだろ」

一誠の言葉にツツコミを入れる辰巳の後にグレイファイアが説明をする。

「この方はライザー・フェニックス様。純潔の上級悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家のご三男であらせられます。そして、グレモリー家次期当主の婿殿」

「グレモリー家の次期当主って……まさかツ!？」

「即ち、リアスお嬢様のご婚約者であらせられます」

「こ、婚約う?!?!？」

リアス部長の婚約者のライザー・フェニックスという上級悪魔がやって来てから部屋内はなんとも言えない空気になってしまった。

「いやあ、リアスの女王が淹れてくれたお茶は美味しいものだな」
「痛み入りますわ」

ライザーの言葉にニコニコとした笑みで答えるが一誠達は普段の彼女を見ている為、彼女のその機嫌の悪さを察した。

そしてさつきからライザーは肩や手や髪、太股とお構いなしに触っているがリアスはそれを嫌がっているが止める素振りは全くない。

だがそれはいつまでも続かず遂にリアスが動く。

「いい加減にしてちょうだい」

流石に怒ったリアスは立ち上がりながらライザーを睨む。

「ライザー、以前にも言ったはずよ。私はあなたと結婚なんてしないわ」

「それは以前にも聞いたさ。だがリアス、君のお家事情はそんな我儘が通用しない程切羽詰まっていると思うんだが？」

「家を潰すつもりは無いわ……！婿養子だって迎え入るつもりよ、でもそれは私がいいと思った者と結婚するわ。大体、人間界の大学までは自由になっているはずよ」

「もちろんその話は聞いているし、その通りだ。大学に行ってもいいし、下僕も好きにしたらいい。だが、婚約の話は違う。ただでさえ、先の戦争で純血悪魔が大勢亡くなった。そしてその純血を絶やさない為、上級悪魔の御家同士が結ぶのはこれからの悪魔情勢を思えば当然だ。純血の上級悪魔。その新生児が貴重なことを君だって知らないわけじゃないだろう？」

リアスは睨み続けるがライザーお構い無しに話を続ける。

「……まあ俺もそこいらへんは「俺は全く興味はない」がそれでも世間の目つてのもあるんだ。そう言ったことを考慮して、君のお父様とサーゼクス様も未来を考えてこの縁談を決めたんだろ？それに安心しろ。結婚とはいっても形だけだ、その後は好きにすればいい」

とライザーは優雅に紅茶を飲みながら言い返す。

それを見てさつきよりも睨みが増した目でライザーを見る。

「父も兄も一族の者も、みんな急ぎすぎるのよ。もう二度と言わないわ、ライザー……貴方とは例え形だけだとしても結婚しない。」

そう言うのと溜息を吐きながら飲み干した紅茶を置き、目を細めながら立ち上がる。

「あのなりアス……俺もなあ、フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。名前に泥をかけられるわけにもいかないんだ。俺もお前みたいな我儘な女なんざ本当なら願い下げだが、我慢しているんだぞ」

「……ツ貴方ね！今散々私の体を触ってきた癖に我慢って……！」

「あ？ああ、その方がお前も眷属も理解しやすいと思っただけだから。それにだ、リアス……」

リアスとライザーは睨み合いが続くが直ぐにライザーがリアスの眷属を振り向いて、また部室を見て更に睨んだ顔をする。

「そもそも、こんな狭くてボロい人間の建物なんかに来たくなかったのにわざわざ出向いてやってるんだ。それに俺は人間界があまり好きじゃない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐えがたいんだよ．．．！」

ライザーの周囲に炎が広がり、その影響で部室全体に火の粉が舞っている。

リアスの眷属達は驚きながらも身構える。

何故ならこの炎は自分達に向けられた炎だと感覚で分かったからだ。

「俺は、君の下僕を全員焼き尽くしても．．．君を冥界に連れ帰るぞリアス」

「．．．．．」

リアスも無言のまま紅色のオーラを薄くではあるが漂わせている。

まさに、一触即発の状態。

流石にグレイフィアが止めに入ろうとする。

「お二人共、その辺に．．．．．」

けどそれはある一言で全てが消えた。

「……………インペル・マジエスター」

その言葉で周囲に舞つてた炎とライザーとリアスから漂わせた魔力が一瞬にして消えた。

「「「「「ツ!?!」」」」」」

「あらあら……………」

「何ツ!?!」

「この魔力……………まさかツ!?!」

「……………丁度よい所に来て頂きましたね」

ライザーとリアス部長はそれぞれ言葉を発しながら驚愕し、リアスの眷属達は目を見

開きながら驚く。

朱乃さんは普段の口調と変わらないがそれでも驚いた態度である事が分かる。
全員が声の発した方を振り向く。

そこには・・・

「・・・・・・・・何やってんの？」

「・・・・・・・・何で来て早々、凄い事になってます？」

そこに居たのは一誠達と同じ年位に見える、黒髪に青と言うより蒼い色の目の男と暗い茶髪で青い目の女性がいた。

「……まあ、とりあえずお二人共少し頭を冷やして、もう少し穩便に話を進めてくださいよ。……はああ、こんなことになる事が分かつてたとはいえ、流石に自分の眷属の前であんな力を無闇やたら出したらいけないって分かつてますよね？」

少し関西訛りの口調が部屋に広がる。

カイトとはやてが現れて一度場を収め為、はやてが溜息と呆れ顔をしながら2人に注意をする。リアスは苦虫を噛んだような顔をしながらはやての話を聞き、ライザーはカイトを睨みながら再度入った紅茶を飲む。リアスとライザーの2人が座っている対面にはやてとカイトが座っている状態で、朱乃以外のリアスの眷属達は少し部屋の端で待機しており、朱乃はリアスの隣で立っている状態だ。

「まさか、貴様がここに来るとはな……」

「……来たくなかったけど」

「ふん……減らず口の多い野郎だ」

「ちよつとライザーさん？聞いてます？」

はやてが笑顔を……目と雰囲気的に全然笑ってない笑顔ライザーに向ける。それを見てライザーは焦りの顔を見せる

「き、聞いている聞いている！少しやりすぎたなうん、そうだろリアス！」

「え!?ちよつとそこで私に振らないでよ！」

「……お前ら実は仲良いの？」

「良くない!!」

「はああ……頭痛くなるわ〜」

そんなやりとりが行われている中、リアスの眷属達は困惑している。ライザー・フェニックスの訪問、結婚話、一触即発に今度は見知らない男女が現れたのだから無理もない。

彼らの会話を会話を聞きながら一誠が小声で祐斗に訪ねる。

「なあ木場、あの人は？」

「ごめんイツセーくん僕にも分からないんだ」

「そうか……ん？どうした、元浜？」

先程から現れたカイトとはやてをまるで睨むかの目で見ている辰巳に対して、一誠は問いかける。

「あついや何でもない……誰だろうつて思っただけだ気になる一誠」

「そうか……にしても部長とあのクソ野郎に説教しているつて事はあの人達も上級悪魔なのか？」

「多分ね、朱乃さんならわかるかもしれないけど……今は部長の隣にいるしね」
「そう言う祐斗の隣でアーシアは安堵するかのように息を吸って吐いている。」

「大丈夫ですか？アーシア先輩」

「は、はい。さつきはどうなるかと思いましたが……」

「辛かったらちゃんと言うんだぞ。アーシアが何かあったら心配だからな」

「はい、ありがとうございますイッサーさん！」

そんな彼らの話とは別にカイト達の方もそろそろ話しに進展する。

「それにしても何で2人が此処に？恐らく、兄が呼んだのは何となく分かるのだけど……それでもこの縁談の話には関係ないはずじゃ」

「……そこはグレイフィアさんが説明してくれるから。それに……関係が無かつたらこんな面倒な話に首を突っ込まないから普通」

そう言つてカイトはポケットから何かを取り出して口に入れる。

その言葉にライザーは苛立つ顔で言う。

「面倒なのはこつちのセリフだ！此奴がさつさと頭を縦に振ればすぐ終わる話なんだぞ！」

「貴方との結婚する位なら死ぬ方がマシだわ！」

「はいはいはい。その変にしてもらわれないんとそろそろ怒りますよー！とりあえず今からグレイフィアさんが説明してくれますから」

「……上級悪魔の会話じゃないな……朝ドラ……いや月9？」

「火に油を注いで燃やさんといてやカイト……フェニックスだけに……」

「くっ……フフフッ」

「貴様ら……！」プルプル

「……よろしいでしょうか？」

四人の会話に横入り……いや、軌道修正するようにグレイフィアが割って入る。話の進まない現状を打破する為に若干声が普段より低く、魔力を出して脅すかの様な感じと言う。

それを見て四人は真面目な顔に戻り（カイトは無表情、はやては切り替えて、リアスは冷や汗、ライザーは苛立ち）それを見て、改めてグレイフィアが話す。

「それでは……リアスお嬢様が反対することは、サーゼクス様並びにグレモリー家、フェニックス家の方々も重々承知でした。正直申し上げますと、これが最後の話し合いの場だったのです。」

これで決着がつかない場合のことを皆様方は予測し、最終手段を取り入れるという話だったのですが……」

そこで一旦区切り、グレイフィアがリアスの方を向く。

「お嬢様、ご自分の意志を通すのでしたら、ライザー様とレーティングゲームにて決着をつけるのはいかがでしょう？」

その言葉にリアスは目を見開いて驚く。

だがレーティングゲームを知らない数人のリアスの眷属が首を傾げる。

「レーティングゲーム？」

「誠くんは知らなかつね。レーティングゲームって言うのは悪魔達の娯楽の一つで、互いの眷属同士を戦い合わせて勝敗を競い合う、悪魔的にはスポーツ競技に近い感じのものなんだよ」

一誠は木場の言葉にへえと返しながら話を聞く。

「でもレーティングゲームは……」

「はい。お嬢さまもご存知の通りですが、公式なレーティングゲームは成熟した悪魔しか参加できません。しかし、非公式の純潔悪魔同士のゲームならば、半人前の悪魔でも参加できます。この場合、多くが……」

「身内同士、もしくは御家同士のいがみ合いね。……つまり、お父様方は私が拒否した時の事を考えて、最終的にゲームで今回の縁談を決めようって腹なのね？どこまで私の生き方をいじれば気が済むのかしら……」

「では、お嬢様。ゲームの方はどう致しますか？拒否しますか？」

「いいえ、まさか。こんな好機はないわ。いいわ、ゲームで決着をつけましょう、ライザー」

「ほう．．．そうか、受けちゃうのかりアス。まあ俺は構わないぞ。．．．たがなりアス、俺は既に成熟しているし、公式のゲームも何度かやっている。今のところ勝ち星の方が多し。それでもやるのか？」

「二言は無いわライザー。貴方を吹き飛ばしてあげる！」

「では、両者共に了承という事で．．．お二人のご意思は私、グレイファイアが確認致しました。ご両家の立会人として、私がこのゲームの指揮を執らせてもらいます。よろしいですね？」

「ああ」

「ええ」

二人はグレイファイアの言葉に返事する。

「分かりました。ご両家の皆さんには私からお伝えします」

「それで？何故こいつらが此処に？」

そう言つてライザーは顔でカイトとはやてを指す。

「御二方は今回のレーティングゲームを対等にする為に来ていただいたのですが……まずはお二人方は知らない者もいるのでご紹介を……」

「あつ大丈夫ですよグレイフィアさん。それは私らでやりますので、……それじゃあカイト」

「……うん」

はやてはカイトに相槌をうって立ち上がり、リアスの眷属の方を向く。

「……えーと……バルバトス本家次期当主、『王』のカイト・バルバトス……」

はやて「初めまして、『女王』の八神はやてと言います。バルバトス家って言うんは元72柱の第8位、爵位は公爵や。まあ、よろしくや」

そう言つて二人は簡単な挨拶をする。

それに反応するかのように、リアスが話す。

「今度は私達ね。私はリアス・グレモリー。元72柱の第56位で爵位は公爵よ。それで隣の彼女が私の『女王』よ」

「リアス・グレモリーの『女王』、姫島朱乃と申しますわ」

「そしてあつちにいるのが私の下僕達よ。皆、挨拶を」

「わかりました部長。自分は木場祐斗。リアス・グレモリー様の『騎士』をやっています」

「えーと・・・桐生藍華です。同じくリアス先輩の『騎士』やってます」

「塔城小猫です。リアス・グレモリーの『戦車』です」

「元浜辰巳です。リアス・グレモリーの『戦車』です・・・」

「あ、アジア・アルジェントと言います。り、リアス・グレモリーの『僧侶』です」

「あつ兵藤一誠です！リアス部長の『兵士』をやっています！」

とそれぞれが自己紹介を始める。

はやての方は懐かしそうな顔をし、カイトは首を傾げながら自己紹介を聞く。

「部長……あつそうや、此処つてオカルト研究部？つて部活の部室やつたな」

「……研究部？部室？」

はやて「中学の時にあつたやん？陸上部とか野球部とかサッカー部とか。それにしても学校の中はやっぱり懐かしいな……」

そう言つて部屋の周りを見るはやてに対して、リアスは疑問に思い問いかける。

「懐かしい……つて貴方達、学校とかは行つてないの？」

「……人間界は中卒だから。その後は色々あつて暇がないから高校に入つてない。……でも眷属の何人かは流石に学校に行かせている」

「今じゃあ机に座つて書類を書くの一杯一杯やから……実はなあ、今日の分を他の人に回して貰つたんよ」ニコツ

「え、えーと……ごめんさい」

「別にええよ〜ホンマ、有難いくらいや〜今日の分サボれるからなあ……まあその代わりにこの件が終わつたら机から動けなくなるんやけど……」ガタガタ

「・・・はやて・・・・・・・・・・」ポンツ

「それは・・・・・・・・・・」

「あく・・・・・・・・・・」

「あらあら・・・・・・・・・・」

「「」・・・・・・・・・・」

「ええくと・・・・・・・・・・どういふ状況なのでしょうか？・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっ何この空気？・・・・・・・・」

リアスとライザーの件が終わった後の事を想像したはやては体を震わせ、カイトは肩に手を置き慰める。

リアスとライザーは哀れみと申し訳なきそんな顔をし、朱乃は同じ女王の為か同情するよう言う。

一誠とアーシアは状況に全く着いて行けず、元浜、小猫、祐斗、藍華達には沈黙であ

る。

「んんっ！……まあ、これで互いの紹介はこの辺にしようや！」

「(あつ強引に話戻した……にしてもなんだろう、あのカイトつていう人。すげー違和感あるし、何か左手が痺れるんだよな……)」

はやてはこの沈黙を止めるよう、わざとらしい咳払いをしてそう言う。

次の話を進もうとはやてが言う前に、突如ライザーが静かにリアスに訪ねる。

「なありアス。一応確認だが、君の下僕はこれで全てかい？」

「そうよ」

「本気か？これじゃ、話にならないんじゃないか？人数差もそうだが、君の女王である『雷の巫女』ぐらいいしか俺のかわいい下僕に対抗できそうにないんじゃないか？」

「……私の下僕が弱いとでも？」

リアスの発言の回答に、ライザーら指をパチンツと鳴らす。

するとまたフェニックス家の魔法陣が出てきて、そこから合計15人の女の子が出て

きた。

「うおおおおおおお！」

「うへえ………」

一誠は隠さないくらいに興奮し、子猫に睨まれているが、辰巳は辰巳で見えない所で引いている顔をしている。

「俺の可愛い下僕達だ。駒にそれぞれ一つずつだが、それなりの経験と実力は持っている。今も俺もそうだが上の実力者に頼んで鍛錬も積ませている。そう簡単に……」

「……っってお、おいリアス……。この下僕君、俺を見て大号泣しているんだが………」

とライザーが自分の眷属を自慢使用と語っていたがそれを止めるかのように一誠が号泣していて、ライザーは困惑している。

「……その子の夢がハーレムなの。きっと、ライザーの下僕悪魔たちを見て感動したんだと思うわ」

「……は？」

「夢がハーレムって……また存外な夢やなあ」

「おい兵藤、落ち着け。こんな所で恥ずかしい真似をするなよ」

「うっ……だつて！……羨ましいんだよちくしょう！」

そう言うライザーの眷属達が一誠をゴミを見るかのような顔をする。

リアス眷属達も苦笑いをし、辰巳に至っては頭を抑えている。

カイトは理解できない顔で、はやては呆れ顔になる。

それを聞いたライザーは……ニヤリと口を歪ませこう言う。

「なるほどなあ……ならばあいつに俺とお前達が熱々などころを見せつけてやった
らどんな反応するのか……ユーベルーナ」

「はい、ライザー様」

そう言って呼ばれた魔法使いのような女性のユーベルーナはライザーに近づき熱
いデープキスをし始める。

それを見て一誠は口を大きく開きながら驚く。

「なツ!？」

「お前じゃこんなこと一生できないだよな。下級悪魔君」

「ふ、ぶさけんな!? てめえ、部長と結婚した後も他の女の子とイヤイチャしまくるんだろ?!! お前みたいな女つたらしと部長は不釣り合いだ!!」

「は? 貴様はその女つたらしの俺に憧れているんだろ? 大体、俺と下僕との関係をお前如き部外者で下級悪魔の奴にとやかく言われる筋合いはない」

「クツ・・・!」

「それにな人間界にはこんな言葉があるだろ? 確か・・・英雄色を好む。だつたか? いい言葉じゃないか。まあ、これも俺と下僕達のスキンシップとでも思え。お前だつて、リアスに可愛がつてもらっているんだろ? なら別に問題ないだろう?」

「何が英雄だよ! つうか部長のとてめえのを一緒にすんな! お前なんか、ただの種まき鳥野郎じゃねえか! 火と風を司るフェニックス? ハッ! まさに焼き鳥だぜ!」

その言葉に眷属の何人かが笑う。

リアスも一誠の不意打ちの言葉に肩を震わせながら笑いを堪えている。

「焼き鳥?!今コイツ焼き鳥つて言つたか?!こ、この下僕悪魔が!調子こきやがつて!上級悪魔に対して態度がなつてないぞ!リアス、下僕の教育はどうなつてんだ!?!」

リアスはそっぽを向いて無視する。

その態度にライザーは怒りを顔に出し、グレイファイア・・・及びカイトとはやては余り良い顔をしていない。

その理由の回答を一誠が出す。

「ゲームなんざ必要ねえ!俺がこの場で全員倒してやる!『赤龍帝の籠手(ブーステツド・ギア)』!」

《Boost!!》

一誠が左手に宿る『赤龍帝の籠手』を展開し戦闘姿勢に入る

「イツセー!?!」

「おい、よせ一誠ー！」

流石にしないと思っていたのか、突然の行動に驚くりアス。

他のリアスの眷属達も静止するよう声をかけるが一誠は無視してライザーに突っ込もうとする。

「あゝ………カイト」

「……うん」

その行動に流石に止めないと思ひ、はやてがカイトを呼び、それだけで理解したカイトは行動に移す。

「チツーミラ、やー………必要ない………」

ライザーが眷属に戦闘させようとする所でカイトが割って入り停止させる。

ライザーが止まったところを確認してカイトは次に一誠の方を見る。

一誠はその目を見た時また左手が痺れたがそんなのお構い無しに吠える。

「なっ、おいーそいどけよー！」

「・・・お前さ・・・自分が何してるのか分かってる？」

「うるせえ！いいからどきやがれ！」

一誠が左手の籠手でカイトを殴ろうとするとカイトはため息を吐いてめんどくさいと顔に出しながら一誠の拳を片手で受け止めて言い放つ。

「なっ!？」

「・・・じゃあわかりやすく言うけど・・・立場を弁えろ。【今代の赤龍帝】で【下級悪魔】の【リアス・グレモリーの兵士】

「ッ!？」

低く覇気のある声。それでいて冷めた目で言い放つカイトに一誠怯む。その威圧が伝わるのかリアスと他の眷属悪魔達も構えてしまう。

そこに横やりを入れるようにはやてが言う。

「部下の失態は上司の責任・・・今の行動ひとつとってもリアスさんにとってはマイナスになる・・・それでもまだ続けるん？」

「……俺には、そんな難しい話はわかんねえけど……けど！俺は部長の兵士だから……！」

「せやから立場を弁えといてな。それにここでしなくともレーティングゲームで思う存分に戦えるやから」

そう言われて一誠は反論せず黙り込み顔を俯く。

けど納得してない顔をしているがそこにリアスが立ち上がり一誠に言う。

「イツセー。やめなさい」

「部長……」

「ごめんなさい。私の下僕が迷惑をかけてしまったわ」

リアスは頭を少し下げてカイトとはやてに謝罪をする。

それを見て特に気にしてない風にはやてが言う。

「いいですよ大事になってないんですし。それよりも話の続きや……まあ今回私達が来たのはな、レーティングゲームまで私達がリアスさんとその眷属達を鍛えるっていう感じじゃ」

「鍛える？ 貴方達が特訓に付き合うってこと？」

「そうや。これでもレーティングゲームは負け無しなんよ、私ら」

「ツ！それは心強いわね。お願いするわ」

「はい、任してください。それじゃあグレイファイアさん。後の細かい事はお願いしますね」

そう言うってはやてはグレイファイアに続きを託す。

「わかりました。それでは今日から10日後に、レーティングゲームを行います。ライザー様には申し訳ございませんが今日はこの辺でお帰りになられても宜しいでしょうか？」

「そうだな。じゃあ10日後にまた会おうかりアス。．．．それとカイト・バルバトス」

「．．．ん？」

「少しはマシに鍛えろよ。これじゃあ話にならないからな。後は．．．まあいい。そ

れじゃあ、またレーティングゲームで会おう」

そう言ってライザーは魔法陣を展開しその場を立ち去る。

こうしてリアスの結婚騒動はレーティングゲームという形で決着をつける事となる。

特訓前の下準備

「ぜえ．．．．ぜえ．．．．」

一誠の途切れた息切れが声が聞こえる。

ライザーがオカルト研究部にやって来たその翌日に、リアス・グレモリーとその眷属達は特訓の為に山まで合宿に来ていた。

今日は平日で通常、授業を受けに学校に行くのだがそこはオカルト研究部の強化合宿ということを通して公欠扱いになっている。

夏休みや冬休み、春休みにやる普通の合宿なら兎も角、オカルト研究部に平日を返上してまで強化合宿をする必要があるのかどうかと考える者もいたがそこは魔力による干渉で誤魔化している。

そういった事もあり今は山の天辺を目指して登山をしている。

一誠と祐斗、子猫と辰巳は無駄にでかい荷物を背負って登っていて、一誠は息を切らしながら登って行き、祐斗は息を切らせずに登り、小猫は2人よりも一回り大きいサイズを、辰巳と小猫より少し小さめなりユツクを背負いながら一誠以外は顔色一つ変える

ことなく登り進める。

「ほら、イツセー早くしなさい！」

「……は、はい……」

一誠に向けて櫂を飛ばすリアス。それに対して一誠は覇気のない声で返すため、リアスは溜息を吐いた。

「まったくあの子だったら……ごめんなさい、あなた達も一緒に登山させてしまつて」
「別にええですよリアスさん。こんな事するの久しぶり何で寧ろ楽しいくらいです」

「……はやて、きつくない？」

「ふふっ、大丈夫やで」

リアスは今回、特訓の手伝いとして来たはやてとカイトに申し訳ない顔をするがはやては気にしてないと言いながら登り続ける。

カイトは無表情ではあるがはやてを気にしながら登る。

「そう、ありがとう。それにしても貴方達って私と同期のはずなのに何故レーティングゲームの経験があるのかしら？」

リアスは前回言っていた「レーティングゲームは負け無し」と言っていたがそもそもレーティングゲームは成熟した悪魔にしか出来ないものでまだ成熟していないカイト達に疑問に思い、リアスは問いかけた。

「え？あつ．．．あゝそれはなあ．．．」

「？」

はやての歯切りの悪い言葉に首を傾げるが割って入ったカイトが告げる。

「．．．それは俺が純血悪魔じゃないから、何かと突つかかる奴がいるからレーティングゲームする事が多い」

カイトの言葉にリアスは驚いた。

「純血じゃないってどういう事？だって貴方はバルバトスの．．．」

「．．．次期当主なのに純血悪魔じゃないのか．．．でしょ？」

「ええ。こう言つてはあれでしょうけど、貴方の家的にはいい顔しないでしょ」

「．．．うん。しなかつた．．．だからさせた」

「させたって何を．．．ああ、そういう事？」

リアスは途中で理解した顔を始めた。
それを見たカイトがそれに合わせて言う。

「……うん。納得しないから、レーティングゲームで俺達が勝って納得させた。……
それだけ」

「それだけってかなり凄いことよそれ。でもこれで理解したわ。それで負け無しなの
ね……」

「ハハハ……まあ、負けたら後戻りできない状況やったからなあ……私ら……」
はやてがあまり浮かない顔をしながらそう言った。

流石に察したのかリアスが申し訳ない顔で言う。

「……変に踏み入ってしまったってごめんなさい。貴方達にも事情があると言うのに」
「あくいいいえ、気にせんでください。それよりもほら！行きましようリアスさん！」
「そうね。……あつそれと私の事は呼び捨てで構わないわ。私も貴方達をカイトと
ハヤテって呼ぶから」

「そうなん？なら、よろしくな〜リアスちゃん♪」

「ちや、ちやん？」

ええやろええやろくつと近づいてくるはやてに動揺しながらも楽しそうな顔になるリアス。

それを見守る形で後ろを歩くカイトは再度後ろにいるリアスの眷属を見る。

「はあツ．．．はあツ．．．きつつ．．．！」

「ほら一誠！こんなんじやあライザー・フェニックスに勝てねえぞ！」

「わかつてるよ！」

「一誠君。あと少しだよ」

「．．．お先に」

「ほらほらもうちよつとなんだから頑張んなさいよ！」

「イツセーさくん！大丈夫ですか？」

「イツセーくん。もう少しですわよ」

一誠に対して皆がそれぞれ励ましの言葉を送る。

そんな彼らを．．．特に一誠を、先に上にいるカイトは観察するように観ながら呟いた。

「……………やっぱり俺は彼奴とかな……………」

その眩きと共にカイトは前を向いて進んで行く。

—————

何とか山を登りきつたりアス達とカイトとはやてはグレモリーの別荘に到着した。

そこは修行や鍛錬といったものからは明らかに程遠いと思うであろう豪勢で立派な屋敷だった。

屋敷に入り、リビングに荷物を置いた辺りで一誠がゼエゼエハアハアと息を切らしながらに床に倒れ込んだ。

先程の登山で途中、ペース配分を考えず山を駆け登ったためだ。

「おい、大丈夫か兵藤」

「……も、もうやばい……」

「何も考えずにペース上げるからそうなのよ」

「う、うつせえ……」

辰巳と藍華からヤジが飛ぶが疲れているため途切れ途切れで返している。

「部長、山菜を摘んできました。夜の食材にしましょう」

祐斗は登っている最中に取れた山菜をリアスに見せる。

そこにひよこつと現れたはやてが山菜を見て喜びながら袖を捲し上げる。

「おお！美味しそうや♪なら私が料理するから台所に置いと貰ってもええか？」

「そうですか？それじゃあお願いします」

「でもそれじゃあハヤテだけ忙しいでしょ？料理も魔力の修行に使おうと思ったのだけ
ど」

リアスの言葉にピクつと反応したカイトがリアスに聞いた。

「……もしかして、魔力を使って料理する気？」

「え？ええ、そのつもりだったけど……」

「……」

カイトが半目でリアスを見ているのにリアスは自分が何かしてしまったのかと困った顔をしながら考えるとはやてがカイトの両頬を引っ張り始めた。

「こらカイト」むにゅっ

「……にゅっ……いふあい。ふあに？ふあやて……」

「リアスちゃんが困つとるやる？大体、リアスちゃんは「私が参加しない」事を知らん
やから気を使つたんやる？」

「……ふおうなの？ふおめん……」

「私に、じゃないやる？」

そう言つて引つ張る手を離す。

少しカイトの両頬が赤くなっているがそれでもカイトの顔は無表情のまま頬を優しく擦る。

「ごめんな。カイト、食べ物になるとちよつとうるさくて・・・ほんま堪忍なあ」

「大丈夫よ。それよりも・・・参加しないって言うのは？ハヤテは『女王』なのだから朱乃か私辺りにするのだと思つただけだ」

「ああそれな。今回の特訓はな、見るのはカイトと他数人なんよ。・・・私は教える事はちよつと無理なんや」

「？それはどういう・・・」

そこでカイトが割り込んでリアスに予想外な事を言う。

「・・・はやての力は強すぎるから制御が難しい。この山だと下手したら全体まで届くから、それぞれ個別の特訓が出来なくなる」

「「えっ？」」

「はやての攻撃を直撃したらリアス・グレモリーと男の方の戦車以外、多分死ぬよ？」

「あらあら・・・」

「強すぎます」

「それ程までの威力になると最上級悪魔クラスの魔力がないとできないはず……」

カイトが言葉に一誠と辰巳と藍華、アーシアが目を丸くし、朱乃は顔こそ笑顔ではあるがかなり驚いた感じであるのが分かる。

子猫は驚きながら静かに言い、祐斗は驚きながら思考する。

「……それ本当?……こう言つてはあれだけど、ハヤテつて戦うよりも指揮をとるサポート系だと思つただけだ」

「……いや、はやてはパワー寄りのウィザードタイプ……言つとくけど、さつき言つたのははやての【全力じゃない】から。本気でやったら……町一個?」

「はあッ!」

リアスが本当かどうか訪ね、カイトが肯定……。それどころかもつと恐ろしい発現をした為、一誠が大きな声で驚愕し、それに合わせてリアスと眷属達が一斉にはやての方を向いて真偽を目で訪ね、その状況にはやては苦笑いしながら答える。

「あつはつは……。そうなんよ。私、余り細かい調整は補助がないと出来んのから、

こう言った事にあまり向かないんよ。普段はお構いなくドツカーンと打てるんやけどなあ……」

全員が一齐に黙りながら冷や汗をかく。

リアスと眷属達は言葉を聞いただけで、実際にはやてが戦う姿を見たことは無いし、ましてや山をぶっ飛ばすなんて想像も出来るわけがなく、到底無理だと思ったからである。

「……そんな事よりそろそろ準備して始めない？」

「そ、そうね。それじゃあ夕食の方はお願いするわ。皆、早く着替えて特訓の準備よ……」

「は、はい。部長……」

「……着替えが終わり次第次第、皆外に来て」

カイトの言葉に我に返ったリアスと眷属達は着替える為、女性陣は2階男性陣は1階の部屋に向かった。

それを確認したらカイトがはやての方を振り向き訪ねた。

「……はやて、連絡取れた？」

「うん。準備出来たからいつでも転移してくれやって」

「……わかった」

そのままカイトはそのまま外に、はやては台所に祐斗から貰った山菜を確認してから一緒に外に出る。

その途中着替えに行ったりリアスよ眷属の男子組は祐斗がホモホモしい発言をしめ一誠がキレたり、うるさいと辰巳に怒られたりもあり、10分後に全員着替え終わり外に向かう。

リアスと眷属達が着替え終え外に集まり、カイトとはやてはリアスの方に向き直つ

た。

「・・・全員来た？」

「ええ、これで全員よ。それでこの後の特訓はどう考えているの？」

「・・・ああ・・・基本的には個別で特訓にする」

「個別？」

そう言つて一人一人を見ながら淡々と説明する。

「・・・俺はお前ら全員の事を詳しく知っているわけじゃないし、全員は見きれない・・・だから」

そう言つてはやての方を向き「・・・おねがい」と言った。

それに対してはやては頷き、胸につけている剣十字のペンダントを握りしめ告げる

「それじゃあ、やろうか・・・シユベルトクロイツ」

はやてがそう言うとは何処からともなく現れた剣十字の付いた杖を手になっている。

「わっ!?何だあれ!？」

「あの胸のペンダントが杖に?もしかしてそれって」

「.それは後で.はやて」

「了解や。おいで、騎士達と眷属達」

はやての足元から魔法陣が展開する。

その色は白く、正三角形とその中で剣十字の紋章が回転している形。

そして目の前に同じく白い、しかしそれははやての足元の魔法陣より少し大きめの魔法陣が現れた。

そこから9人の人物が現れる。

その中でも5人の人間が胸に手を当て、片膝をついた、礼節のある姿勢で現れた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

一人目の喋った彼女はピンクのポニーテールに同じ色の布面積が多めの西洋の騎士甲冑を身にまとった凛とした女性。

手には鞘に収められた機械のような剣を携えている。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

次に言った彼女はショートボブの金髪に医者のような、または僧侶やRPGのクレリックで出てきそうな黄緑色の清楚な服。

左右の手の人差し指と薬指にはめられた指輪が光っている。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

次に現れたのは褐色肌の筋骨隆々な男で服装は格闘家のようなノースリーブの丈の長い青い服で腕と脚に銀色の甲冑に包まれており、頭の上に獣の耳と後ろ腰辺りから犬の尻尾のようなものがチラチラと見える。

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

今度は赤い魔法陣からお下げの三つ編みツインテールの赤毛と兎の顔が着いた帽子

を被った少女。

髪と同じ色の赤い、または紅に近いドレスを着て、手に持っているのは明らかに服に合わないようなこちらも機械チックな鈍器、ハンマーのようなものを持っている。

「我ら、夜天の主の下に、夜天の雲の騎士ヴォルケンリッターと元夜天の魔導書の管理プログラムにして夜天の主のユニゾンデバイス。ラインフォース・アインス。今ここに御身の前に馳せ参じました。何なりとご命令を」

最後に中心の暗い紫がかった魔法陣からストレートの長い銀髪の癖毛が出ているような髪型の女性。

半袖の丈の長い服の全体的に黒がメインの服装を着て。

背中から二対四の銀色の翼を羽ばたかせている。

それらを見たリアス達は各々驚いた反応している（一誠のみ女性陣の綺麗さににやけている）中、残りの4人が動き出した、影の大きさからは全員、「高校生くらい」の子に見える。

「やつほくカイト！おつ待たせ〜！」

手を振る人物は紫に近い黒いアホ毛のある長い髪に赤い瞳、全身が紫のライトアーマーの女の子。腰には細めの剣が携えている。服装とかを含めなければ普通の人と違っているのが、耳が少し尖っているがそれ以外は普通の少女に見える。

「ただいま来ましたカイト、はやて。お待たせしてすみません」

次に現れたのはセミシヨートの茶色の髪に水色の瞳、黒と赤のドレスに近い服を裾を持ち上げ挨拶する。こちらは清楚でカイトと同じ無表情ながらも可愛らしい女の子で、誰が見ても美少女だ。

「うむ、私の登場だ！頭を垂れよ!!」

次にまるで貴族のような言い方をする人物は髪は髪の根元は白く先が黒く、瞳はエメラルドグリーン目の目。服は全身が黒がメインの長袖の服に下は短めのスカートを履いている。こちらも文句無し的美少女。そして何よりも印象的なのは、はやてと少し、いやかなり似ており、双子なのかと思うくらいである。

「来たわよ。・・・ってアンタ達、その恥ずかしいのいい加減それやめなさい。ディアーチエモ」

最後に片膝をつく5人と先程のはやてによく似た人物に肩を竦めながら言う人物は水色の髪に前髪の両サイドに白いリボンのような物で束ねている。瞳は髪と同じく水色で、服は白めのインナーに緑のジャケット、黒のジーパンなのだが全体的に面積が小さく。インナーはノースリーブで胸元が、ジーパンは太ももまで露出している。クールそうな感じの少女でこちらは美少女と言うより美人に近い。

「・・・じゃあとりあえず。自己紹介からいこうか」

「ほら皆集まってな〜!」

はやてが現れた彼女達に手で来るように招く。

それに合わせて皆がこちらに来ようとしますが急に女性陣達が固まるように立ち止まる。

男も突如止まった彼女達に反応して一緒に止まってしまったが「何かあったか?」と訪ねたりしている。

「うん？どうしたんやろ？」

「・・・・・・・・多分あれ」

「うん？・・・・・・・・ああ、そういう事・・・・・・・・」

突如固まる彼女達に対して首を傾げはやてだがカイトが指を指した方角を見て納得した。

それは・・・・・・・・・・

「おお！オオオオオオオオオオ！（美少女と美女のバーゲンセールかよ！）」（歓喜）

男1名を除いた彼女達の登場に一誠は目を血走らせるながら見る。

それに対して現れた彼女達は少し引いており、「うわっキモ・・・・・・・・」と言う位一誠の言動があまり宜しくない。

「何恥ずかしことやってんだお前は!!」

「へブツッ！」

流石に見るに耐えないため、辰巳が拳骨を入れて修正させた。

開始の合図はハンマーで

一誠が自重した為、改めて現れた9人がカイトとはやての方に立ち、リアスとその眷属達と対面する。

はやて「それじゃあ紹介するなあ、まずは守護騎士。『ヴォルケンリッター』のメンバーの紹介や」

リアス「守護騎士？」

一誠「え？ヴおる……らったー？」

カイト「……ヴォルケンリッター。ドイツ語で雲の騎士って言う」
【守護騎士】と言う聞き慣れない単語を聞いたリアスは首を傾げる中、名前を聞き取れなかった一誠にカイトが説明する。

リアス「守護騎士って言うのは何かしら？」

はやて「簡単に言ってしまうと私の眷属みたいなもんで思ってくれて大丈夫や。……まあ詳しい事はまた後にして、シグナムから順番に挨拶なあ〜」

話が長くなりそうになったのではやてが手招いて自己紹介するよう9人の内、最初に現れた際膝をついてた4人に言う。

シグナム「わかりました主はやて。」

はやての言葉にピンク髪の女性・・・シグナムがそう答える。

シグナム「さて、先程言われた通り自己紹介しようか・・・我ら、ヴォルケンリツターの将、『剣の騎士』のシグナムだ。よろしく頼むぞ、グレモリーとその眷属」

シャマル「次は私ね。『湖の騎士』、シャマルと言います。よろしくね」

ヴィータ「ふんツ・・・『鉄槌の騎士』、ヴィータだ。まあせいぜいアイゼンの鎧にならねえよう頑張んだな」

ザフィーラ『『盾の守護獣』、ザフィーラだ。よろしく頼む・・・』

そこではやては一旦区切って、今度は残りの4人の内、二人に視線を向ける。

はやて「次に司の騎士・・・『マテリアル』の紹介や。まあ本来は後【二人】おるんやけど、今回は参加せんからシユテルと王様だけや。」

シユテル「初めまして、先程はやてが説明した通り、私は司の騎士、『マテリアル』の理を司る、シユテル・ザ・デストラクターと申します」

一人目の茶色のセミシヨートの女性・・・シユテルが挨拶すると次のはやて似の女性にリアス達は視線を向ける。

・・・が

ディアーチェ「聞け蝙蝠共！我はその小鴉の守護騎士、『マテリアル』のリーダーにして王を司る！ロード・ディアーチェだ！」

腕を組み、上から目線で拳句の果てにはリアス達を【蝙蝠共】と呼んだ彼女に何処と無くイラツとしたのか顔が引き攣っている。

ディアーチェ「ふふつフツハツハツハ！どうした蝙蝠共？我が小鴉に頼みとはいえ直々に貴様らに知恵を与えと言っているんだ。光栄に思い称えるのが礼儀という

もnイイダダダダダッ!!??」

カイト「・・・余計な事は言わない。後、はやてを小鴉って言うな」

ディアーチェ「な、何をする黒猫！私の素晴らしい演説の邪魔をするとは万死にあたただだダダッ!?耳を引つ張るな耳を!!痛いだろう!?!」

彼女の態度に目に余ったカイトは耳を引つ張り始め、ディアーチェは涙目になりながら抵抗している。

はやて「・・・あくそんで彼女がリインフォース・アインス。守護騎士の統括・・・

いや、『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』で言う所の『女王』や」

アインス「我が主の名の下にお前達を鍛えよう。それと私の事はアインスと呼んでくれるとありがたい」

そう言ったアインスに同意するよう頷くりアス達は今度は残り二人の方に顔を向ける。

リアス「えっええ・・・分かったわ。それで、そちらの二人は？二人もハヤテの言う守護騎士なのかしら？」

はやて「二人はカイトの眷属や。『騎士』のユウキに『僧侶』のシノンや」

その言葉に未だディアーチェの耳を引つ張るカイトが「……挨拶おねがい」と言う
と頷き、紫に近い髪の子が元気よく了承する。

ユウキ「OK！ボクはユウキ。カイトの『騎士』だよ！よろしくね♪」
カイト「……シノンも」

シノン「わかった……つて、あんたそろそろ離してあげなさい。ディアーチェ
が涙目じゃない……」

そうシノンが言うときカイトは耳を引つ張るのをやめる。ディアーチェは「うう……
いたい……」と少し赤くなった耳を擦りながら涙目で呟いている。

シノン「まったく。さて……えーと、とりあえず……私はシノン。此奴の僧侶よ、
よろしくね。と言つても私は頼まれた物を運びに来たのと治療係として参加するだけ
だけどね。……あつそれと」

最後にカイトとディアーチェのやり取りに呆れたように肩を竦めながら挨拶をした
シノン。だが最後に一泊間を空け、一息吐くと……今度は絶対零度のような目で
リアス達……の一人を睨むように言う。

シノン「いい加減いやらしい目で見るなら風穴開けるわの。．．．．．その鼻血を出してる変態」

一誠「ヒエツ!?ご、ごめんなさい!」

一度自重したはずの一誠がまたも目の前の美女、美少女達を見て、今度は鼻血（特にシノンの格好を見た時）と血走った目で見ていた一誠はシノンの威圧に青ざめ、少し後ずさりながら謝る。

リアス「まったく一誠は．．．．．つとごめんなさい。此方も改めて彼女達に自己紹介しないとイケないわね」

そう言っつてリアスとその眷属達はそれぞれカイトの眷属とはやての守護騎士に自己紹介する。一通り終わつた所でカイトが手を叩き、注目させる。

カイト「・・・じゃあ時間も限られてるからそろそろ始める。とりあえず・・・シグナムは男の方の『騎士』、ユウキは女の方」

シグナム「了解した。行くぞ木場祐斗」

祐斗「はい！よろしく願います」

ユウキ「はいはい。よろしくね、藍華♪」

藍華「はい。よろしくね」

祐斗と藍華の方にシグナムとユウキがそれぞれ声をかける。カイトはそれを少し見て、再度他のメンバーの方を向き言葉を続ける。

カイト「・・・ザファイラは女の方の『戦車』、シャマルは『僧侶』。それとシノンも『僧侶』で今日は観察」

ザファイラ「了解した。・・・覚悟はいいな？」

子猫「勿論です。よろしく願います・・・」

シヤマル「ええ、わかったわ。よろしくね、アーシアちゃん」

アーシア「は、はい。よろしくお願いします。シヤマルさん、シノンさん」

シノン「よろしく。それでカイト……【アレ】は明後日でいいのよね？」

【アレ】と言う言葉にカイトが頷きながら肯定する。

カイト「……うん、明後日にできるって言ってたから届き次第初めて。」

そう言つて今度はアインスと朱乃に顔を向ける。

カイト「……で、アインスは『女王』とやつて……殺さない程度に」

アインス「勿論だ。それじゃあ……死ぬなよ？リアス・グレモリーの『女王』」

朱乃「あらあら……よろしくお願い致しますわ」

「殺さない程度」と「死ぬなよ」のダブルパンチを受けた朱乃はいつも通りの口調ではあるが少し冷や汗と動揺が見えた。

だがそんなことはお構い無しでカイトは続けて言う。

カイト「シユテルとディーアーチェはリアス・グレモリーだけど……少しへし折つていいよ」

シユテル「わかりました」

ディーアーチェ「うむ、よかろう」

リアス「わかったわ……と言いたい所なのだけど、何故私だけ二人なのかしら？」

三人共了承……かと思いきやリアスが少し疑問の顔を浮かべながらカイトに自身だけ二人なのかを訪ねたが先にシユテルが手を挙げる。

シユテル「それは私から。リアス・グレモリーには王の、ディーアーチェと私から戦闘だけでなく【王としての作戦や采配などの指導】する為です。『王を司る』ディーアーチェと『理を司る』……わかりやすく言えば知識のある私がリアス・グレモリーを心身共に鍛える為にこの配備になりました」

ディーアーチェ「うむ、そういう訳だ蝙蝠娘。安心しろ、我はその小鴉……は、はやてより魔法の制御はマシだ。加減はしてやる」

リアス「こ、蝙蝠娘……」

ディアーチェの発言にリアスが顔を引き攣っているが直ぐにシュテルが発言する。

シュテル「失礼を、王は誰にでも素直に人の名前、苗字を言えず別称で読んでしまうのであまり気にしないでください。謂わばツンデレのようなものだと考えて、どうか温かい目で見てあげてください」

ディアーチェ「なっ?!?おいシュテル!誰がツンデレだ!誰が!?!」

はやて「そうやなあく王様は本当は優しいからそこん所を多めに見てやってな」

ディアーチェがウガー!と言いながらはやてとシュテルに反論する。リアスもその光景を見て笑い始め、それに対してもディアーチェが怒るという状況になっている。周りが笑ったりしている中、カイトは肩を竦めながら次に移った。

カイト「……………あつちは置いといて、次に行くよ……………で次はヴィータなんだけど」

ヴィータ「なんだよ?何か問題あんのか?」

カイト「……………いや……………残った『戦車』を任せてもいい?」

と言つてカイトは一辰巳に指を指す。

辰巳「何だ……俺はアンタとやる」と思ったが、違うのか？」

カイト「……俺はそつちの『兵士』とやる。それに……」

辰巳「ん？」

謎の間に辰巳が首を傾げるがカイトはそのまま話しを続けた。

カイト「……多分、こつちの方が【鍵】なるから」

辰巳「鍵？」

一誠「へ？な、何が？」

一誠は突然自分に向けられた視線に動揺しながら訪ねるがそれを遮るようにヴィータが再度訪ねた。

ヴィータ「へえ、そうか？ならあたしはこつちの野郎を【ヤレば】いいんだな？」

辰巳「……あの、今の【ヤレば】はどういった意味が……」

カイト「……ヴィータの好きなように」

ヴィータ「わかった。よし、オラてめえ！あつち向け茶髪眼鏡！」

そう言われひとつ先の山の方に向けと蹴られた辰巳は少し「何すんだよ」と言いたげ

な反論の目をしたがヴィータの「あゝっ？」と言うドスの効いた声で強制的に動かす。

辰巳「……それで、なんで俺はこつちを向かないと？」

ヴィータ「黙ってそのままそつちを向け。絶対こつちを振り向くなよ。……いいな？」

辰巳「りよ、了解です……」

と辰巳は言われるがままヴィータのさした方向を見続ける。

ガシヤン

と言う機械の音が鳴り響く。

元浜「え？今ガシヤンって……」

ヴィータ「吹っ飛べええええええ!!」

元浜「グエエエエエエツ?!?!」

ドカンッ!と音と共に元浜はヴィータこハンマーによって吹っ飛ぶ。その音と共に他のメンバーも反応して爆音の方を向く。

そこにいるのはいい汗かいたかのように腕で顔を拭うヴィータのみ。

リアス「タツミ!?!」

一誠「も、元浜あああ!?!」

ガシッ

「誠「へ？」

カイト「……じゃあ俺達はあつちでやろうか……他の皆も始めていいから」
「誠「えっ!?何?てか俺、アンタとやるのおおわあああああ!!?」

「誠の言葉を無視して襟首を掴んだカイトはそのまま勢いよく跳躍して遠くへ行つた。」

リアス「い、イツセー!」

はやて「あく大丈夫やと思うよ。カイトは無茶はするしさせるけど、無理はさせないからなあ」

リアス「それって全然大丈夫じゃなさそうなのだけど!」

リアスが跳んでった一誠を心配するような顔をしていたのではやてが肩を叩いて大丈夫と言う。それでもやはり自分の眷属だから心配そうに言った方角を見つめる。

しかし……

シユテル「まあ……貴方も誰かを心配する暇があるんですね？」

リアス「ツ!」

背後からの声に反応したりアスがギギギと顔を振り返るとシユテルが少し微笑んだ（目は笑ってない）顔でそう言った。

シユテル「さて………覚悟は出来てますね？」

ディアーチェ「蝙蝠娘。先に言つとくが……シユテルは本気で貴様を色んな意味でボコボコにするからな。強く生きろ………」

リアスはディアーチェの言葉に小声でヒツと小さな悲鳴を上げるがそのままシユテルに襟首を掴まれて移動させられている。

アインス「さて………いつまでも喋っていても時間は時間ももつたいない。守護騎士、並びにカイトの眷属よ。そろそろ始めるぞ」

シグナム「了解した。………さて、お前の力を見て貰おう。木場」

ユウキ「はいはい！じゃあ僕達も始めよう！あつここじゃあ多いからあつち使おうか！」

シヤマル「わかつたわ。じゃあアシアちゃんはとりあえず。倒れた仲間を一杯治療できるようにならうね。ほらシノンも！」

シノン「分かつてるわよ………ほら、早く始めるわよ」

ザファイーラ「……着いてこい」

それぞれ声をかけながら別々のスペースを取って特訓を始める。

ガリアス並びに眷属たちはこの先の近い未来にどうなるかは今はまだ知らない……

はやて「あんまやりすぎんようになあ……さて、皆は行ったみたいやし、私も私で取り掛かるとしようか……」

予想外な自体

辰巳「し、死ぬ……」

特訓を受けた辰巳が1日目最初のトレーニングの感想、夕日を背にした最初の一言である。

カイト達による個別の練習は全体的に言ってしまうとかなり単純である。簡単に言ってしまうと個別でありながらやる事は大体一緒だったからである。その本日のメニューは……

辰巳「まさか……休み無しの模擬戦とかシヤレになんねえ……」

ヴィータ「何言ってるんだ。ちゃんと休憩時間はあっただろうが」

辰巳「いや、あのですね？俺が気絶していた時間は別に休憩時間じゃないし」
ヴィータ「あ？」

辰巳「……すみません何でもありません」

とこれがリアス達が受けたトレーニングである。

ひたすら模擬戦、休む暇なく模擬戦。これが1日目のトレーニングが個別で受けていた。辰巳はボロボロな体に鞭を打って屋敷まで歩いて戻っている。そしてこれによるグロッキー状態は辰巳だけではない。

辰巳「くっそ身体中が痛いんだが……マジでつら、ん?……な、何だあれッ!」

ブツブツ呟く辰巳は目の前に転がっているナニカに驚き凝視する。そこにはとても見覚えがある同級生が見えた。

辰巳「桐生!?それに木場!」

シグナム「む?そちらも終わったようだな」

ユウキ「あつヴィータちゃんお疲れ♪」

ヴィータ「フンっ別に対して疲れてねえよ」

辰巳の悲鳴をスルーするかのようシグナムとユウキはヴィータを確認するなり喋り始めた。

辰巳「おい！大丈夫か!？」

藍華「……………んあつ……………あれ、辰巳じゃん……………」

祐斗「ははっ……………ごめん辰巳君……………今、起き上がる力もないんだ……………」

辰巳は「うわ……………」と眩きながら青ざめ、ヴィータは藍華達を指さしながらシグナムに訪ねる。

ヴィータ「なあ？あそこまでやってよかったのか？」

シグナム「問題ないだろ？……………それよりもそっちにいる奴はまだ余裕だな……………手合わせするか？」

辰巳「え？」

ユウキ「あつ！ならボクもやりたい！」

辰巳「え、？」

辰巳は自身に向けられた二人の迫力に圧倒されながら後ずさる。次のターゲットにされた草食動物の気分になる位シグナムとユウキから獰猛な気配を漂わせている。

辰巳「ちよつ、ちよつと誰か！助けて」

ドゴオオオオオオオオオオ!!!

辰巳「ヴェエア!？」

突然近くで何かが落ちてきた。

その衝撃によつて周りは土煙で覆われており、視界が悪くなる。

辰巳「ゲホツ、ゲホツ……何だよ一体……ツ!？」

アインス「お前達も終わったか？」

辰巳「あ、ああ、ア、朱乃サアアアアン!!？」

落ちてきた正体……姫島朱乃はまったく動かない。

まるで屍のように微動だにしない彼女を辰巳が絶叫する。

アインス「さて、シグナム、ユウキ、ヴィータ。先に屋敷に戻るぞ。主はやてにいつでも一人で食事の用意をさせてしまう訳にはいかない」

シグナム「む？了解した」

ヴィータ「あいよ」

ユウキ「ええ、もう少しやりたかったのにな」

四人は辰巳達を放置した状態で屋敷に戻って行く

辰巳「えつ、ちょっと!?!俺達は!?!」

辰巳の質問に気づかないままアインス達は今日の夕食が何かの話を始めた。そのまま屋敷に向かう四人を背に辰巳は「……ええく？」と口から溜息混じりの言葉が漏れた。

リアス「そ、その声は……タツ、ミ？」

辰巳「ッ！部長！部長はご無事だった……ん……です……」

今度はリアスの声が聞こえた為、そちらを振り向くがそのあまりにも変わり果てた顔に言葉を失う。

辰巳「ぶ、部長？俺のきのせいですかね？なんか……」
「……老けてませんか？」

と言葉を続けそうになったがそこで止まった辰巳は改めてリアスの姿を確認する。
目は泣き跡が、と言うよりも今も涙を流してしわくちやになっている。髪もボロボロ
にで、以前の貴族らしかったリアスごどっかに行ってしまった。

シユテル「……おや？まだこんなところにいましたか？」
リアス「ヒツ!!」

シユテル「さっさとシャワーを浴びて、その汚らしい姿を少しはマシにさせろと言っ
たはずですよ？……この駄目な蝙蝠め」

リアス「うグツ!!」

シユテル「だから求婚なんて付け入れる隙を与えるんですよ……クズ女」

リアス「あうっ!？」

シユテル「誰が止まっついていいと言いましたか? . . . さっさと行きなさい。 . . . このメス豚」

リアス「わ、わかった! わかったからもうやめて!!」

耳を塞いでそのまま屋敷に走っていくリアスの姿はまるで小学生のいじめられっ子のようなだった。

シユテル「.ふううっ、一日目はこんなものですねああ、ディアーチエ。申し訳ありません。今日は私一人でやってしまっただけ」

ディアーチエ「べ、別にいい。我が出るまでもなかっただけだ。あの蝙蝠娘がもう少しマシになってからであろう」

シユテル「はい。王の指導を受けるにはまだ早いと私も思いました。ディアーチエには後日、王としての指導をよろしくお願いします」

ディアーチエ「う、うむわかった(.ようやく察したぞ。黒猫の奴、我を飴役にしたないや、それでも鞭が強すぎると思うのだが)」

シユテルの余りにも罵詈雑言にディアーチエは自分まで入ったらリアス・グレモリー

がもつとやばい事になりそうだったので後ろで見守り、恐らく慰めるのが自分の役割だとディアーチエは悟った。

結局そのままシユテルとディアーチエも屋敷の中に入っていった為、外にいるのは未だ動かない祐斗、藍華、朱乃と呆然と立ち尽くす辰巳だけだ。

辰巳「何だこれ？木場と桐生は動けなくなってるし、朱乃さんは気絶。拳句の果てにはリアス部長は色々と崩壊してるし……マジで何だこれ!？」

既にカオスな状況に頭を抱える辰巳はハッとまだいない人物達を思い出す。

辰巳「やべえ、そうだ！まだ一誠とアーシアさん、それに小猫ちゃんもまだ来てねえじゃねえか！」

三人もこんな事になっているんじゃないかと嫌な想像をするがそれは近くで発生した魔法陣によって中断された。

辰巳「き、来た！」

一誠かアーシアか小猫か……誰でもいいので無事でいて欲しいと心の中で祈る辰巳は魔法陣から現れる人影に……

アーシア「あつ元浜さん、お疲れ様で・・・はう!? 皆さん大丈夫ですか!」

辰巳「あ、あれ？」

シノン「ちよつとシヤマル。回復が間に合っていないじゃない」

シヤマル「ええ・・・でも皆、もう回復は必要ないって言ってきたから・・・」
意外、普通だった。

いや、全然普通という訳では無くアーシアは今シノンにおんぶされている状態である。

辰巳「あ、アーシアさん大丈夫か? 何かされなかつたか? プライドズタズタにされたとか、クレーター作つてヤムチャされたとか?」

シノン「ちよつとあんた失礼ね。私がそんな事するわけないでしょ?」

辰巳「俺の後ろにいる人達はまさにそんな事をされた方々なんですが!」

アーシア「い、いえ! 大丈夫ですよ元浜さん。私、治療の途中で倒れてしまつてだけですから」

それは大丈夫と言えないのでは? と辰巳は思ったのだが、アーシアは話し続ける。

アーシア「でもシノンさんとシャマルさんに助けて頂いたんです」

シノン「ちよ、ちよつとやめてよ。アーシアは今日のノルマ以上の治療をしたんだし、私はやるのがなかったし、これくらい……」

シャマル「うふふつ、シノンちゃん恥ずかしがっちゃって」

シノン「シャマル？今度余計な事言ったら鼻を弾丸で打ち抜くわよ？そんな事言ってる暇があるならあそこに倒れてる3人をさつさと治療しなさい」

シャマルははくいと言いながら倒れている3人のもとに向かいアーシアはそのままシノンにおんぶされながら屋敷に向かう。

途中でシャマルに治療する？と聞かれた辰巳は動揺しながらも大丈夫と言った。すると別方向から新しい人影がまた見えた。

シャマル「あら、おかえりザフィーラ」

ザフィーラ「待たせた」

小猫「お疲れ様です……」

辰巳「よかった……こつちも普通だ……」

次に現れたのは小猫とザフィーラである。

こちらも外見は余り問題はなく、小猫も少し体操服に汚れが付いているが許容範囲なの分かる。

しかし……………

小猫「今日はありがとうございました……師匠」

辰巳「へ？」

ザフィーラ「師匠はやめると……………まあいい。今日は体を冷やすな」

小猫「はい、師匠」

そう言つて先に屋敷に向かう小猫。

去つた辺りでシャマルがザフィーラを訪ねる。

シャマル「ザフィーラ、何かやったの？」

ザフィーラ「いや……………ただ、今日は主の為に盾となる為の戦い方と心構えを説明しただけだ」

そう言つてザフィーラも屋敷に向かつて行く。

辰巳「……………何だろう、皆がたった一日で変わっている……………これが後9日

もあると考えると頭がおかしくなりそうだ……」

辰巳の夕日を見ながら死んだ魚の目になりながら呟いた。

しかし、まだ最後の一人が残っているすぐに思い出させられる。

ドゴオン……

辰巳「ん？」

その爆発音は辰巳がちょうど夕日を見ていた方にある森、距離は意外と近く、爆発した場所から煙が出ている。

ドゴオオオン……

シヤマル「は〜い、おかえりなさい」

カイト「・・・ん。ただいま」

最後に現れたのは飛び込むように帰って来た一誠と爆音と共に歩いて現れたカイトである。

一誠の姿はジャージがボロボロで所々破けている状態、左手は赤龍帝の籠手が展開されている。

カイトは汚れが一切無い姿なのだが、問題は彼の左右手に持つ何かだ。

辰巳「何だ・・・アレ？」

右手に持っているのはメイスのような黒い鈍器物である。

形は歪で、カイトの体と同じ位のそれはそれでいて全てを壊しそうな、異様な感じを漂わせている。

だがもつと異様なのは左手の手首まで覆っている黒い筒状の物体だ。

長丸いその筒状は大砲の砲身のような形をしており、青い魔力が巡った線がいくつもあ

カイト「・・・じゃあ今日はここまで、おつかれ」

一誠「は、はい！お疲れ様でしたあああ！」

カイトの終了の合図を聞いて斜め90度のお辞儀をする一誠は、こう言つてはあれだが完全に舎弟みたいである。

カイト「・・・戻つて着替えとかして、夕食まで自由にしていから」

一誠「わ、わかりました！」

カイト「・・・うん、じゃあ俺は先に行くから・・・あつ、シヤマル。倒れてる奴らだけどその『戦車』と「一誠」を使つていいから」

カイトはそう言つて先に屋敷に向かう。

シヤマル「はくい。じゃあ二人共お願いね？あつ、私は朱乃ちゃんを連れてくから辰

巳くんは藍華ちゃんをお願いね。一誠くんは祐斗くん」

辰巳「わ、わかりました・・・」

一誠「えっ何で俺が木場!？」

シヤマル「だつて一誠くん。女の子を任せるのはちよつと・・・」

辰巳「……お前、会って一日目なのにもう変態なのバレてるじゃねえか……いや、初対面でアレだったからか？」

一誠「チクシヨオオオオオオオオオ!!」

はやて「皆お疲れ様や!……ってリアスちゃん、大丈夫?」

一度、リアスとその眷属達はシャワーを軽く浴びて汚れを落とし、着替えを終えてリビングに集まる。

そこにはやてが現れてリアス達を労うが、リアスの特訓前とのテンションの違いに氣付いて訪ねたが、呼ばれた瞬間ビクッと反応して震え声で返す。

リアス「い、いえ……何も、なかった……わ……ぐすんっ」

はやて「ええと……ほんまに大丈夫か？」

カイト「……シユテル。何やった？」

シユテル「いえ、普通に模擬戦をやりましたよ？……ただ、何度も同じ手でやられての繰り返しだと身につかないと思ったので……」

カイト「……ので？」

シユテル「なので治療中や攻撃中に欠点を指摘していました。「何度も同じ手でやられて恥ずかしいんですか？」など、『滅びの力』ばかり頼るからそんな全弱なんだよクズが」や「バカ蝙蝠」や「紅髪ビッチ」や「どM」とかetc……、あとは、あうっ……」

シユテルの口から出た罵詈雑言（と言うよりもただの悪口）が続きそうだった為、カイトが手刀でシユテルの頭を叩いて黙らせる。

カイト「……やり過ぎだから」

はやて「えつと……よしよし、大変だったなあ〜リアスちゃん」

一誠「部長が……俺の知らない間に部長がやばい事に……」

辰巳「あれ？朱乃さんは？」

藍華「ええくと・・・・・・・・・・まだ部屋で膝を抱えてたよ？」

辰巳・一誠「「え？」」

どうやら一日目からカイト達（一部の連中）が最初から飛ばしすぎた事を、今カイトは知った為、溜息を吐く。

カイト「・・・・・・・・・・ちよつと夕食が終わつたら全体で集まって今日の【状況説明】しようか・・・・・・・・ついでにアレも話すか・・・・・・・・」

反省と説明

カイト「……で、とりあえず皆の今日の内容を確認したけど……」

夕食を食べ終え、一日目の特訓内容と状況を確認する為に屋敷にある空き室を使つてはやてとリアスとその眷属達以外の全員に聞いていた。

夕食前はリアスが心身喪失一歩前と朱乃が再起不能になりかけた事と外で倒れてた祐斗と藍華についてをメインに訪ねた。

一応それ以外の辰巳やアーシア、小猫の事についても聞き、現在全体的に話を聞いた所である。

カイト「……シャマルとシノン、ザファイラ、それとヴィータはそのままでもいいけど、シグナムとユウキは今日はまだいいけどそれ以上はやり過ぎないように」

シグナム「もちろんだ」

ユウキ「大丈夫大丈夫！」

カイト「……」

カイトの言葉に言われた人達はそれぞれ反応する。

しぐなむとユウキも反応するが、本当に大丈夫だろうかとかカイトはジト目になったが、「二人はまだまし」だった為、溜息を吐いて残りの二組の方を向く。

カイト「……………で？そっただけどさあ……………やり過ぎだから」

そう言ってリアスと朱乃の特訓係であるシュテルとディアーチエ（主にシュテルに言っている）とアインスに言う。

アインス「それ程までにやったつもりがないが……………私はただ、空での魔法戦闘をしただけだが……………」

シュテル「はい、それは私も同じです。あの程度で根を上げるとは思いませんしそれに……………」

スタンツ！スタンツ！

アインス「いたっ」

シュテル「あうっ」

カイト「……………あのさあ、はぐれ討伐意外戦った事がない連中に、実戦経験もある俺らと同じやあ差があるの当たり前じゃん」

シユテルとアインスがカイトに反論した為、手刀で頭を叩き頭を抑えている二人に呆れ顔でカイトはアインスに言う。

カイト「……………だいたいさあ……………アインスは初日から『血塗られた短剣（ブラッドデイダガー）』を連発するとか馬鹿なの？あれつて誘導と数の暴力じゃん……………」

アインス「い、いやだが数は減らしたから問題は……………いくつ？……………え？じゅ、12、いたっ!？」

カイト「……………避けれるわけないだろ。せめて最初は7以下だ」

アインス「だ、だが三分の一では特訓の意味g……………その特訓が今日、本人の正気喪失で終わりかけたんだけど?……………はい」

次にシユテルの方を向き続けて言う。

カイト「……………で、シユテルはシユテルで『砲撃（バスター）』はまだ禁止。

攻撃は『射撃（シューター）』のみ」

シユテル「むうっ・・・・・・・・わかりました」

カイト「・・・・・・・・それと余り言い過ぎないように」

シユテル「それは・・・・・・・・善処します・・・・・・・・」

シユテルの間のある応答に目を細め、溜息を吐いてからダイアーチエの方を向く。

カイト「・・・・・・・・ダイアーチエ」

ダイアーチエ「言いたい事は解っておる。我が見ておるから心配するでない」

カイト「・・・・・・・・」

ダイアーチエ「おい！そこで何故疑うような顔をする!?無礼であろう!!」

カイト「……と、言うわけでシユテルとアインスには注意したから、多分明日から大丈夫」

辰巳「大丈夫の要素がよくわかんないんだが……」

その後、リアス達とはやてと合流して全員がひとつの部屋に集まり、現在は全体会議のようなものを開いている。

カイト「……他はそれ以上やりすぎないように言ったから。まあ……頑張って」

辰巳「いや、俺結構死にそうだったんだけど」

ヴィータ「あ、っ？」

はやて「こらヴィータ。そうやって威圧したらあかん言うてるやろ？」

辰巳に威圧するヴィータに止めるようはやては言う。ヴィータ自身はだつて……と言いながらはやてに言い訳する。

カイト「・・・話を進めるけど、とりあえず今日の特訓を踏まえて、今後この時間を全体での知識や情報を共有する為の集会にしようと思っっているから」

リアス「それはいいわね。私達も色々聞きたい事があったものだしね」
何とか心身が復活し始めたリアスはそう言っただけで了承する。

カイト「・・・うん・・・で、特訓の期間中の主なシケジュールと方針を作ったから配ろうと思うんだけど・・・って、なんで驚いた顔をしてんのリアス・グレモリー？」

リアス「え？あつたの？てつきり私、ほぼ今日みたいに模擬戦させられるのだと思っただけど・・・」

カイト「・・・そんなわけないだろ」

そう言っただけカイトは魔法陣から束になっている紙を数枚取り出し、リアス達に配り始める。

カイト「・・・えーと、これリアス・グレモリー・・・で、こつちが女の方の『戦車』で・・・」

紙はそれぞれ違う内容が書かれているようでカイトがそれぞれ名前を（リアスはフルネームで一誠以外は駒）を呼んで配る。

カイト「……えつと、全員貰った？」

リアス「貰ったわ、それでこれは？」

カイト「……見ればわかる……」

そう言われたリアス達はそれぞれ紙をペラペラと読み始める。

紙は大体5枚分で、それらをひとつひとつ読み終わっていくに連れてリアス達がなんともいえない顔になっていき、そこから……

リアス「えつと……これは何？」

カイト「……ん？何って……それぞれの方針とスケジュール、後は……リアス・グレモリーとその眷属達それぞれの能力とそれらの長所と短所、それとレーティングゲームでの役割内容とか……」

それを言われてリアス達は驚く。

その後、見返したりしながら内容をちゃんと読み始め、色んな疑問が浮かぶ。

一誠「ちよっ！なんで俺の短所に変態とか書かれてんの!？」

カイト「……………間違つてないだろ？」

祐斗「何故、こんなにも僕達の事が……………」

カイト「……………その『戦車』と『騎士』はともかくお前ら3人の神器は少し探ればすぐに出てくる。

神滅具のひとつで二天龍の赤い龍を宿す『赤龍帝の箠手』、魔剣を自在に創り出す『魔劍創造』、どんな種族だろうと治癒できる『聖母の微笑』……………わからない方がおかしい」

はやて「まあこれでも少ない方なんやけど……………あつ一応個人情報は調べんといだから安心してや」

一誠「いや安心の要素が一切ないんですが!？」

辰巳「てか俺と桐生の神器を何で知つてんだよ。俺達が使つたのはあの時しか……………」
その辺でカイトが手で静粛するように訴えかけ、静かになった辺りで喋る。

カイト「……………リアス・グレモリー。あんた達つて最近、駒王町の廃墟になつ

た教会で暴れなかつた？」

リアス「ツ……墮天使レイナーレの事ね」

カイト「……多分それ。その件で色々と書類とか後始末とかしてたらあんた達の情報が入った。それだけ」

リアス「え？そんな話聞いてないわよ」

カイト「……それはあんたの兄にでも聞いて。とにかく俺達がリアス・グレモリー達の事を少し知っているのはこれくらいだから」

そう言つて一息着いた辺りでカイトが再度口を開く。

カイト「……とりあえずスケジュールと方針はその紙を見て、相談とか質問とかは集会の時にそれぞれ聞くこと……つて何？リアス・グレモリー」

リアス「あの……方針の中にある『精神と身体の上』は分かるのだけれど、『シユテルに耐えろ』がよくわからないのだけれど……」

カイト「……抑えるようには言つたから」

リアス「違う、そうじゃない」

一息ついた辺りでカイトが先に温泉に入るように自分の守護騎士と眷属に言っ
て、現在リアスとその眷属、カイトとはやてのみがいる状態でカイトがふと思
い出したかのように言う。

カイト「……………そう言えば、なんか聞きたい事あるって言っ
てなかった？」
リアス「あつ、そうね……………色々とあるのだけれどまず、
貴方達について詳しく聞きたいのだけれど」

カイト「……………詳しくって言われても……………そもそも俺達
はどこまで知ってる？」
リアス「そうね……………バルバトスの本家、その次期当主で、
レーティングゲーム」

の経験者くらいね……あつ、それと純血じゃないって言ってたわね」

カイト「……うん。俺は悪魔と天使から生まれたハーフ」

一誠「え、マジで!?!」

リアス「その……家的には大丈夫だったの?」

リアスは言わずらそうに訪ねたが、カイトはあまり気にしなさそうに淡々と話す。

カイト「……登ってた時に言っただけど、納得しない連中は黙らせたから今は平気」

リアス「そう……両親は?今は何をやっているのかしら?」

その言葉ではやてが少し暗い顔になる。

その反応に気付いたリアスが首を傾げていたがカイトはあまり気にせずにストレー
トに答えた。

カイト「……父さんはバルバトスの現当主だから色々忙しい。母さんは……
四年前に死んだよ」

リアス「え?」

カイト自身は気にしていない表情で答えたが、リアスとその眷属達は固まった。

一瞬にして静まった空間ではなんともいえない雰囲気漂い、嫌な位に静かな空間に

なった。

リアス「えっと……ごめんなさい、失礼なことを聞いてしまったわ」

カイト「……ん？ああ……別に、言っても平気だから余り気にしなくていいよ。……で、他には？」

一誠「あつはい！夜天ってなんすか？」

リアスが申し訳ないように謝罪をするがカイトは余り気にしてないようで、他にないか問いかけると今度は一誠が手を挙げて言った。

カイト「……夜天って言うのは『夜天の魔導書』に選ばれた人間にしかねない種族」

一誠「『夜天の魔導書』？」

リアス「種族？夜天って種族だったの？でも聞いたことが……」

はやて「そうやな……まず、『夜天の魔導書』って言うのは……」
そこからはやてがリアス達に語るように話し始める。

『夜天の魔導書』とは、元々「様々な力を吸収・蒐集」してページを埋めて記録や研究す

る為の魔導書で、666ページを埋めることによって魔導書に「夜天の主」として認められ、『夜天使』として生まれ変わる。主となった者は魔導書に記載された「吸収・蒐集した力を使う」事ができ、主を守り蒐集を行う魔法生命プログラムを生み出したりする事ができる。

リアス「それって神器……いえ、もしかしたら『神滅具』クラスじゃないかしら？」
一誠「……ん？あの魔法生命プログラムって夜天を守る存在ですよ？てことは……」

はやて「おおつ、兵藤くんは意外と冴えてるなあ。そうや、私の守護騎士『ヴォルケンリッター』と『マテリアル』、そしてリインフォース・アインスは『夜天の魔導書』から生まれたんや」

一誠「マジか!？」

辰巳「プログラム？あの人たちが？」

その言葉でリアス達は全員、驚いた顔になる。

カイト「……言つとくけど、俺の眷属は勿論、はやてや守護騎士、アイ

ンスは大事な家族だから、手を出したら誰であろうと潰すからそのつもりで」

辰巳「いやいや、手を出したらあんたに潰される前にあの人達直々に潰されそうな程強かったんですけど!？」

カイトの発言に全力で横左右に手を振って否定する辰巳。
そこでふと、リアスが口を開いて訪ねる。

リアス「……そう言えばハヤテや彼女達が使うあの武器は何かしら?とても機械的で、シユテルが使っていたのなんて武器から声を出したように聞こえたのだけど」

カイト「……もしかして、『装器(デバイス)』の事?」

一誠「デバイス?」

はやて「ああ、それな。それはなあ……」

と、今度は『装器』についての説明をまたはやてが解説する。

『装器』とは種族などは問わず使え、使用者のサポートを主な役割としている。種類も様々存在し、それに応じた性能・補助能力も備わっている。例えば、使用者の能力に応

じて力の消費量を削減や行使する場合の制御する。そしてデバイスによっては使用者をよりサポートするためにAIを備えているものも存在している。

はやて「……とまあ、こんな感じや。因みに『装器』は基本的に人工的に作られるんやけど、中には『装遺物（アーティファクト）』と呼ばれとる神器でいうところの神滅具みたいなもんがあるんよ」

一誠「へえ……え？装遺物が神滅具と同じなんですか？」

はやて「全部が同じって言うわけやないんだけど、ひとつしか存在しないのと、神をも殺せる力を持つ事は確かやで」

カイト「……因みに、俺の眷属に一人いるから」

一誠「マジか!？」

リアス「そんなのが存在するなんて……知らなかったわ」

カイト「……基本的には神器と変わらないから、人によつては神器と間違える場合もある……ん？」

そう話しているとカイトの耳元に小さな魔法陣が展開される。

それはカイトの数回の頷きと応答ですぐに消えて、リアス達の方に向き直りながらカイトは口を開く。

カイト「……今、皆上がったみたいだから、そろそろ入りに行ったら？」

リアス「そう……教えてくれてありがとう。そろそろ私達もお風呂に入ってくるわ」

はやて「おお、せやな。ほな、いつてらっしやーい」

リアス達は聞きたい事も大体全部聞いた為、カイトとはやてをな残してお風呂場に向かう。

途中でリアスが一誠と一緒に入るかとかの談笑が聞こえ、その会話が聞こえなくなつた辺りでカイトは一息ついてはやてにもたれ掛かる。

カイト「……疲れた」

はやて「お疲れ様カイト」

はやてはカイトに自分の膝をポンポン叩いて来るように呼び、それに応じてカイトは膝枕する体制になる。

カイト「……明日もだるい……はやてとゆっくりしていたい……」
はやて「そんな事いってもなあ……この後、一緒に入つてあげるから我慢してや」

カイト「……うん」

はやてはまるで飼い猫を可愛がるようにカイトの頭を優しく撫でながらそう言う。

カイトは目を細め、少し表情を緩めながら撫でられ続ける。

カイト「……[アイツ]……ずっと俺の事見てた……」

はやて「ああ、[彼]？でも今のところ問題ないんやろ？ヴィータから聞いたんやけど、中々に強そうな『神器』やって」

カイト「……ふーん……」

はやて「それにどう見てもカイトの事を見てたのは警戒しているだけのようやし、こつちから何もしなければ問題ないと思うんやけど……」

カイト「……それなら……別にいいけど、もし……」

はやて「もし?。」

カイト「……もし……アイツが……敵だつたら、俺は……誰であ
ろうと潰すだけ……」

カイトのその言葉だけが部屋に残り、リアス達上がるまでこの静かな空間が続いて
行った。

―『夜天の魔導書』にはもうひとつの秘密がある―

―それは、八神はやてが夜天の魔導書の主になるまで、歴代の使用者が起こした悲劇
を―

―己の欲望のまま魔導書のプログラムを改変した結果、この魔導書にはもう一つの名が存在していた―

―本来主として認められ、夜天使になるはずが……3大勢力所か他の神話体系にも害を及ぼし―

―あまつさえ神をも殺した事のあるこの魔導書は666ページをすべて埋めることでその姿を露わにする―

―こうも呼ばれていた………【闇の書】と………―

―……ん？じゃあそれはどうなったのだったの？それはね………―

― 『傲慢』の少年によって支配されたんだよ―

それぞれの風景 『騎士』

リアス・グレモリーとその眷属達は、それぞれ日を重ねるごとに着実な成長が見受けられるようになった。

それぞれの目標、レーティングゲームでの役割、それらを成し得る為のスケジュールが正しく出来ている事によってリアス達は残り少ない期間、どれくらい強くなれるか分からないがライザー・フェニックスに勝つ為にそれぞれ奮闘していた。

祐斗&シグナム

シグナム「フッ！」

祐斗「はあア！」

それぞれの剣が重なり、鏝迫り合う状態になる。

それを見越してか祐斗はシグナムの足元に『魔剣創造』による魔剣達を生やすがその前にシグナムが後方に跳んで回避する。

祐斗「そこだ！」

祐斗は自分の前に魔法陣を発生させ、そこから魔剣を3本、空中に出現させてシグナムに向ける。

シグナム「ほう……」

祐斗「行け、『魔剣創造（ソード・バース）』！」

空中で停滞していた3本の魔剣がシグナムに向かって【追尾】するように飛んで行き、シグナムはそれを上手く回避する。

しかし、いくら躲しても魔剣は方向を変えながらシグナムを追いかける。

シグナム「中々よく考えたな、木場」

シグナムは少し嬉しそうにそう祐斗に告げる。

祐斗に渡されたスケジュールは殆どがシグナムとの一対一の戦いか、藍華と組んでユウキ、シグナムとの二対二の戦い。その他に神器による魔剣の創造だった。

ー木場 祐斗

・『騎士』の特性と本人の戦闘スタイルに合わせ、テクニクとスピードの向上
・神器『魔剣創造』の魔剣の質と量、更にそれを使ったバリエーションを見出す
・特訓の指導者シグナムとの模擬戦にて対一の戦いや桐生藍華・ユウキを入れた二対一の戦いで、上記の内容や剣術、戦闘の立ち回りなどを覚える事

これが祐斗に与えられた特訓期間までの目標である。

シグナム「スピードもテクニクも以前に比べて良くなった。神器の使い方も悪くない……だが」

ガシユン！

シグナムの持つ『装置(デバイス)』、『レヴァンティン』から葉莖のような物が排出される。

シグナムは飛んでくる魔剣3本の正面に体を向けるとレヴァンティンを魔剣が当たる手前で振り下ろす。

シグナム「陣風！」

刀身から衝撃波を繰り出し、振り下ろされた先にある魔剣はまるで硝子が砕けたように壊れる。

シグナム「まだまだ貴様の魔剣は脆い。もっと魔剣をイメージを強くしろ」

祐斗「……はい」

シグナムはレヴァンティンを祐斗に向けながらそう告げ、祐斗自身も短い返事をしながら手に持つ魔剣を向ける。

祐斗はこの期間で着実にスピード、テクニックを向上させることができ、少なからずスピードはシグナムに着いていける程まで成長した。

『魔剣創造』では以前に比べれば作れる量も増して、更に魔剣を魔力によって操作し、手に持つ以外に魔剣を飛ばし対象に追尾させる技を編み出すことが出来た。

しかし、質の方は未だ上げる事ができず強い敵に対してはシグナムのように簡単に壊れてしまう。

シグナム「レヴァンティン！」

レヴァンティン《Explosion!》

祐斗「クツ！『魔劍創造』！」

シグナムの呼び掛けにレヴァンティンが機械的な声で出しながらカートリッジが装填され、刀身から炎を纏わせる。

祐斗は自身の前方に魔劍を何本も創り出し、盾のように構える。

シグナム「紫電一閃！」

縦に飛んでくる炎の斬撃は祐斗を魔劍ごと吹っ飛ばし、木々に激突させる。何本目かの木でようやくく止まり、残り火の中で祐斗はぐったりと気絶している。

シグナム「防御の方もまだまだ足りないな。とりあえず起きるまで待つとしよう……レヴァンティン。シノンに回復の要請を」

レヴァンティン《Jawohl》

聞こえない祐斗を見ながらシグナムはそう呟いて自身も休憩するように近くにある木の下で座るように待つ事にした。

くおまけく

シノン《ちよつとシグナム?》

シグナム「むつどうしたシノン? 回復を頼んだのだがまだ時間がかかるか?」

シノン《そうじゃなくて、あんたこれで何回目よ! もうちよつと気絶しないように配慮してもらわないと、こっちの負担が大きいのよ》

シグナム「す、すまない」

シノン《はあああ……で? 距離は?》

シグナム「あ、ああ。今、位置情報を転送する」

シノン《了解……500ね……じゃつ切るわよ》

シグナム「すまないなシノン」

シノン《ええ……あつそれと》

シグナム「？」

シノン《この事カイトに伝えたから》

シグナム「!?ま、待て、シノンそれは」

ブツンツ (通信が切れる音)

シグナム「……………」 (冷や汗)

藍華&ユウキ

——桐生 藍華

・自身の持つ神器を使いこなす

・特訓指導者ユウキの言う事を聞くこと

・『騎士』としてのスピードと剣術を覚える事

追記：正直、お前のこと知らないから、とりあえず開始早々にリタイアしないよう頑張るって

ユウキ「よつと！」

藍華「きやつ!？」

ユウキの水平に一振すると藍華の持つ武器が吹き飛ばされ、藍華自身も尻餅をつく

ユウキ「うくん……やっぱりパワーとスタミナが無さすぎだね」

ユウキはそう言つて剣を肩にトントンと軽く叩きながらそう藍華に言うが藍華の方は息切れの途切れながらだが恨めしそうに反論する。

藍華「はああ……はああ……そりや……3時間位も休憩無しでやってたら……はああ……こう……なるって……」

ユウキ「あれ？そうだっけ？じゃあちよつと休憩にしよっか！」

ユウキはそんなに時間が経っていた事に気づかなかつたらしく、藍華から言われようやく本日の休憩となった事に藍華は溜息を吐きながら草原の地面に横になる。

ユウキも剣を腰に付いた鞆に戻して藍華の隣で体を伸ばしながら座り込む。

藍華「はああ……疲れた。……ていかなんでユウキはなんで全然疲れてないのよ」

ユウキ「そりやあ、これぐらいの打ち合いは散々やってきたもん。それに藍華も藍華であの剣術は凄かったなあ……あの刀の神器、えくと……」

藍華「『追影の刃爪（シャドウ・チェイス）』の事？」

ユウキ「そうそう！あの影が斬撃になって、わあー！つて一斉にボクに襲い掛かるアレ！」

桐生藍華が持つ神器、『追影の刃爪（シャドウ・チェイス）』は鏢のない全体が黒い日本刀の形状をした刀の神器。

能力は『追影の刃爪』である刀から影を作り、その影を自在に操ることができる。

例えば、何もない場所に刀が振り下ろされると任意で振り下ろされた場所が影になり、刃を下側にして刀を構え、柄を小指で軽く叩く事で発動。その影を斬撃として飛ばしたり、複数の刃となって対象に向かったりなど影を作る事で様々な攻撃方法がある。

ユウキ「藍華の剣術の腕としやどうちえいす？つて奴の止まらない攻撃はボクも少し焦っちゃったよ」

藍華「まあ・・・それをユウキは簡単に避けたけどね」

ユウキ「簡単じゃないよ！全部避けたり流したりするのは結構キツイんだよ！」

藍華「キツイ程度で済んじゃうのがなあ・・・」

藍華は先程のユウキの常人じゃやできない動きで避けた動きを思い出しながら溜息を吐く。

藍華「はああ・・・本当にユウキって人間なのか解んないね・・・」

どう考えても人間じゃないと感じ、特に何も考えないで藍華はそうユウキに聞こえる声でそう呟くとユウキがクルツと藍華の方を向き直り首を傾げながら言った

ユウキ「え？ボク、人間じゃないよ？」

藍華「・・・・・・・・・・いやいや。それはこの山にいる皆そうじゃん。だって私達はあく「ああ、そうじゃなくて」ま・・・・・・・・？」

ユウキ「ボク、『闇妖精族（インプ）』っていう妖精だよ？」

藍華「え？」

ユウキ「え？」

藍華「・・・・・・・・・・」

ユウキ「・・・・・・・・・・」

藍華は（。D。）ポカーンと呆然とした顔になり、ユウキは藍華の反応に首を傾げていたがやがてあつ！と手をポンと叩いて思い出す。

ユウキ「あつ、そっか守護騎士の事はカイトが言ってたけど、ボクとシノンの事は何も言ってなかったね」

藍華「ええ・・・・・・・・・・」（困惑）

ユウキの言葉に藍華が頭を抱えながら困惑するがそれをスルーするかのようユウキが藍華に背を向けながら背中から2対4枚の翼というより羽のようなものが現れた。

ユウキ「ほら！これが妖精の羽だし、耳もちよつと尖っているでしょ？」

藍華「いや、確かに言われれば耳が尖っているけど、はつきり言つてわからない範囲よ。まあ、背中のものでわかつたけどさ……ん？」

ユウキ「どうしたの？」

藍華「ねえ、まさかだけどシノンも妖精だったりする？私の記憶が正しければシノンは普通に見えたんだけど……」

藍華はユウキが言った「ユウキとシノンの事を言つてなかった」という言葉に疑問を持った為、訪ねてみるとユウキが「あつ、あく……」と言葉を詰まらせるような口調になり頭を掻きながら苦笑いで言う

ユウキ「ごめん。こればかりはシノンが言つてもいいって言わないと思うから」

藍華「そえ……まあいいや。その分ユウキの話の色々と根掘り葉掘り聞いちゃうから」

ユウキ「ええ!いい、いやボクも特に言える事は・・・」

藍華はそう言つて両手をワキワキと動かしながらユウキに詰め寄る。ユウキは何か嫌な予感を感じて後ずさりながら距離を取ろうとする。

藍華「そうねえ・・・例えば、好きな人とか。後、スリーサイズ。ああ、それと・・・」
ユウキ「えっなんか多くない!？」

藍華「大丈夫大丈夫♪言いたくないなら言えるようにしてあげるから」

ユウキ「ちよつと!何か元気になつてない!?!つて、神器もう持つてるし!?!言わないよ!絶対と言わないよ!!」

ユウキも腰にある剣を構えようと手を伸ばす・・・がしかし

ユウキ「て、あれ?『黒石の紫妖剣(マクアファイテル)』がない!?!」

藍華「あつ、これ?」ヒョイ

ユウキ「何で持つてるのさ!?!」

藍華「いやあ、影を使つてちよちよつと」

ユウキ「うわー！卑怯者ー!!」

藍華「さて、特訓の続きをお願いするわね。ユウキ」ニタア…

ユウキ「い、イヤああああああ!!」

この後、ユウキがヘトヘトになり、藍華がスッキリした顔で屋敷に帰るのだが、詳しい内容は誰も知らない。

くおまけく

屋敷にて…………

カイト「……ユウキ？」

ユウキ「ひやつ!? な、なに!？」

カイト「……何かあった? 疲れた顔してるけど」

ユウキ「え!? あ……あわ、あわわ……」

カイト「……?」

ユウキ「え、えくと……その……」カアア……
／／／／

カイト「……大丈夫?」ユウキの手を握る&おでこコツン

ユウキ「わひやつ!」顔真っ赤

カイト「……熱がある? 無理させちゃったのならごめん。明日はやs」

ユウキ「わああああアアアアアアア!!」ドン!!!

ガシヤアアアン!!ドガアアアアン
!!!!

ユウキ「藍華のバカああああああああああああ!!」外に猛ダツシユ
カイト「・・・・・・・・・・・・・・・・ヤムチャしやがつて体制

それぞれの風景 『戦車』

小猫&ザフィーラ

ザフィーラ「もつと速く、固く、強くだ」

小猫「はい、師匠」

小猫は現在、縄に結ばれた無数の丸太が彼女目掛けて降っており、それを避けたり、受け止めたり、殴り返すなどをしている。

以前までは何度も当たり吹っ飛ばされていたが、今では数が多くとも何とかこなせるようになってきている。

ザフィーラ「守る事は仲間だけでなく、己自身もしなければ守れない。……塔城。『戦車』であるならばこの位の脅威、退いてみる」

小猫「はい……やあぁー!」

向かってきた丸太一つに拳を打つける。丸太は粉碎し、他の次々来る丸太を小猫は【魔力を帯びた拳】で粉碎していく。

ー塔城小猫

- ・『戦車』としての攻撃力、防御力の向上
- ・魔力の運用方法の改善
- ・格闘戦での自身の戦闘スタイルの欠点を改善

小猫の方針は主に『戦車』としての向上ばかりが記載されている。

他の者達と比べると地味なように見えるが、実際行動に移すには中々に難しい。

今まで格闘戦は我流、魔力の使い方は余り上手くなく、攻撃力も防御力は『戦車』としては悪くは無いが小猫を上回る奴相手だと厳しい。

小猫「はあ……はあ……」

ザフィーラ「うむ、少し休憩だ」

小猫「いえ……まだ、できます……」

現在、ザフィーラとの訓練により魔力を自身の身体に回らせて身体能力を強化したり、拳や脚に魔力を集中させると先程のように丸太は粉碎し、岩は粉々に砕き、受けれ

ばただでは済まない位に強力になった。

ザフィーラが魔力のイメージの際「自身の拳を、脚を、身体全てを鋼にしてみろ」と言うところが小猫に効いたのか魔力の使い方が以前よりも良くなった。

ザフィーラ「いや、休め。これ以上は余計な負担になるだけだ」

小猫「でも……」

ザフィーラ「案ずるな。この後も手を抜く気は毛頭ない。この後は私と組手だ。手加減しないから覚悟しろ」

小猫「……はい師匠」

格闘戦は本人が型なしの我流な為、10日間という短い時間の中で変に変わってはいけないと考え、ザフィーラとの組手をする事で、経験と思考、改善点をそのつど学んでいく事で向上させている。

小猫「師匠、中国拳法は私に合いますか？」

ザフィーラ「塔城に合わんな。組み付きと真つ直ぐな拳と勢いのある蹴りは寧ろ、キックボクシングやプロレスなどに似ていた。ここで、無理に覚えても恐らく、使える機会はないだろう。」

小猫「そうですか……」

小猫は少し覚えてみたいと思ったものを言うと、ザフィーラからキツパリと否定され少し落ち込む。

その姿を見て、ザフィーラは小猫を背にし、ぶつきらぼうに言う。

ザフィーラ「……今度また、長い期間特訓に付き合えるならば、それらも教えよう」

小猫「……ありがとうございます。師匠」

ザフィーラ「……始めるぞ」

小猫「はい」

巨漢の男性師匠と華奢な少女弟子という異様な組み合わせではあるが、順調に今やれるだけの事をやり遂げ、成長している事はザフィーラは感じられた。

小猫も自身の成長に実感し、更にザフィーラから学ぶ様々な自分の知らない事を知る事を知らない内に楽しんでいる。

何より、ザフィーラに言われたある言葉が今も記憶に残っている。

「身体の大きいや小さいなどは戦いでは関係ない」

「『戦車』である塔城はその拳に、その身体に、何者をも打ち破る力がある」

「ならば守護せよ。主や仲間の拳となり、盾となれ」

「その為の方法を、盾の守護獣であるザファイラが応えよう」

くおまけく

小猫「師匠師匠」

ザファイラ「どうした？」

小猫「師匠の耳と尻尾は本物ですか？」

ザファイラ「そうだ。私は守護獣であるから当然だ」

小猫「そうなんですか．．．触ってもいいですか？」

ザファイラ「む？別に構わんが．．．ならば」獣モード

小猫「!?．．．ふさふさです」さわさわ

ザファイラ「いいものか？」

小猫「はい．．．．．蒼い犬の毛皮がとても気持ちいいです」さわさわ

ザファイラ「．．．．．今、何と言った？」ピクツ

小猫「えっ、蒼い犬の毛皮が「犬と．．．言ったか？」．．．は、はい」ピタツ

ザファイラ「．．．．．犬ではない狼だ」野獣の眼光

小猫「え？し、しよ「犬ではない、狼だいいな？」ツ!?．．．．．は、はい」ピクビクツ

ザファイラ「犬ではない……犬ではない……ないのだ……」
しよぼーん

小猫「師匠……!?!」

辰巳&ヴィータ

ヴィータ「オラオラオラア!!」

辰巳「ガッ!グワッ!!グゲッ!!」

爆発と衝突の轟音が鳴り響く此処では辰巳がほぼ一方的にヴィータに殴られる展開になっている。

ヴィータは手に持つハンマーを振り回しながら「辰巳が纏っている鎧」に何度も打つ

ける。

辰巳「ごふっ、ごふっ、．．．．．き、キツすぎる．．．．．」

ヴィータ「アイゼン！」

ヴィータが自身の手に持つ機械的なハンマーの形をした『装器』の『グラーフアイゼン』からカートリッジが装填される。

グラーフアイゼン《Explosion!》

するとハンマーの形が変わり、先端がスパイク状の鋭利な形になり、反対にはロケットのような噴射口になる。

グラーフアイゼン《Raketenform!》

辰巳「ゲツ!? またそれかよ!？」

変形したグラーフアイゼンの噴射口から魔力が噴出され、ヴィータはまるでハンマー投げのように高速回転しながら辰巳に向かって行く。

辰巳はまずいと思い、必死に逃げ回るが噴出の勢いがあるヴィータに逃げ切るはずもなく．．．．．

辰巳「だアアアアア！おし、出れた!!」

ヴィータ「うるせえ！さつきとこっち来い、このバカ！」

辰巳「いや、貴方が原因でここまで吹っ飛ばされたんですけど!?!」

そう言つて辰巳はヴィータの元に向かつて走つて行き、「何一つ傷が無い鎧」を解除してジャージ姿になる辰巳。

それを見て、ヴィータは眉を顰めながら不機嫌そうな顔で辰巳に聞く。

ヴィータ「おい、さつきからその鎧のお陰で無傷だが、お前ももうちよつと攻撃してこいよ。さつきからあたしが攻撃してばっかで、これじゃあ特訓になんねえぞ?」

辰巳「いや、したくても出来ないんだよ。防御に専念しないと下手すれば死ぬぞ俺」
ヴィータ「死ぬならもうちよつと鎧に傷が付くんだよバカ。それともてめえはあれか? 殴られたいドMか?」

辰巳「チ・ガ・イ・マ・ス! 誰がドMだ!?! こんな痛えの喜んでする訳ないじゃないですか!?!」

とい感じのやり取りが続く。

この二人は何故か特訓の時間よりもこの言い合いが多い。

ヴィータが辰巳を煽り、辰巳がツツコミを入れるという流れが出来てしまつて、それ

から事あることにこう言つて何かと言ひ合いをする。しかし、そればかりという訳ではなく、ちゃんと所々では真剣にやる。

・・・と言つても

辰巳「大体、残り期間もずっと模擬戦しかしなんでしょうか？」

ヴィータ「じゃあ選べ、【ずっと鎧無しのアイゼンで殴られる】か【ずっと走り込み】。因みに休み無しな」

辰巳「鬼か!？」

ヴィータ「そもそもあたしはお前のその神器の能力的に模擬戦での実戦に近い戦闘経験の方が良いって解つてんだろ？」

辰巳「グッ・・・まあ、そうだけだよ」

そう言つて辰巳は鎧から解除した際に手に握られた一本の剣を見る。

その剣は鏢の中心に黒い十字がある、赤い色の瞳のような宝玉が嵌め込まれた全体が青い剣である。

ヴィータ「そのるぎーれ何とかつていう鎧になる剣・・・威力を抑えたとしてもあたしのアイゼンを食らつても傷一つねえんだからそれに合わせた戦闘法を身につけるし

かねえだろ」

辰巳「……………で？その良い戦闘法とは？」

ヴィータ「んなもんでめえで考えろよ。馬鹿じゃねえの？」

辰巳「貴方俺の指導者だよね!?それと、これは『咆哮する恐龍鎧（ルギーレ・インクルシオ）』って言う名前だつて前にも言ったじゃないですか!？」

そう言つてヴィータに見せるように『咆哮する恐龍鎧』と呼ぶ青い剣を向ける。

ヴィータ『『適応』する能力……………確かに場合によつちやあ厄介だけどさ、結局お前が攻撃できなきやただの肉盾じゃねえか』

『咆哮する恐龍鎧』には『適応』という能力があり、「あらゆる環境に適応し、様々な生き物に適応し、食らつてきた悪鬼の龍……………『ガンドレクス・ドラゴン』を宿す剣」と辰巳は言っていた。

ヴィータ自身、そんな龍種を知らないし、その事をカイトに話したがカイトも知り合いに聞いた所、「そんな龍は聞いた事ないしいる訳がない」との事だった。

ヴィータ「(本当にこいつの持つてるのは神器か?……………いや、神器なのは違いねえが能力が尖つてるし、例がねえのに変に手出しできねえんだよな……………まさかカ

イトが言つてた〔アレ〕って本当なのか?〕

ヴィータははつきり言えば元浜辰巳という人物を信用出来ない。

怪しい……で片付ければいいのだが何処か〔カイトと同じ匂いがする〕のがとても気に食わず、カイトからも「……あっちから手を出さないなら、普通に接して」と言われた。

ヴィータは正直、得体の知れない辰巳を排除したいが先走つた行動をしてははやてとカイトに迷惑をかけてしまうと思ひ、自重している。

ヴィータ「……なあ、折角鎧で防御は完璧なんだから何か武器ねえのか? 格闘戦の、それも素人の喧嘩技程度じゃ、その内限界来るぞ?」

防御力は期待できるが、攻撃方法が少ないとヴィータは頭を抱えていた。

鎧を纏っているのだからその鎧で殴る蹴るの格闘戦をすればいいのではないかと思つたが、経験が低い為、少し喧嘩が強い程度の格闘技術しかない。

そう思ひ、辰巳に武器は無いのかと聞くと、思ひ出したかのように言う。

辰巳「あつ、『咆哮する恐龍鎧』の副武装に槍がありますよ?」

ヴィータ「は？」

辰巳「え？」

そこで数秒間、沈黙になる。

辰巳はまずいと思う前に、辰巳の真横に何かが振り下ろされた。

ズガンッ！と重い音がなった所にはヴィータが持っていたグラーフアイゼンが地面をめり込んでおり、その形が先程辰巳を吹っ飛ばした時のラケーテンフォルムになっている。

ヴィータ「……………おい、てめえ……………」

辰巳「ヒイツ!？」

ヴィータは拳を握りしめ、プルプルと体を震えさせながら怒気のある声音で辰巳を睨む。

辰巳は冷や汗を書きながら、本能的に「逃げねば」と思い全力でヴィータから逃げるようにダッシュする。

ヴィータ「さっさと言いやがれこのアホがああああああ!!」
辰巳「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!?!」

その後、地面にめり込んだ辰巳とかなり不機嫌なヴィータをシノンがスコープ越しで確認する事になる。

くおまけく

はやて「今日のおかずはハンバーグく♪?」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアア!!

はやて「今のは……ヴィータやな、最近ヴィータは機嫌悪そうやったもんなあ……
ヴィータの分だけ少し多くしようか」

それぞれの風景 『女王』と『僧侶』

朱乃&リインフォース・アインス

朱乃「そこですわよ！」

上空、二つの飛行物体が通常の飛行機やヘリでは出来ない旋回や動きをしているそれから魔法陣のようなものさえ見える。

ここでは朱乃とアインスが空中戦を想定した魔法戦が繰り広げられている。
現在、朱乃は魔法陣から雷を迸り、アインス目掛けて放つ。

アインス「甘いぞ『女王』。」

それをアインスは片手で受け止め、雷を四散させる。

アインス「穿て、血塗られた短剣（ブラッディダガー）」

朱乃「ッ！」

防御からすぐさま朱乃に飛んでくる「9つ」血のような赤い短剣に朱乃はすぐさま逃

げるように回避行動をとる。

アインス「それでは避けられないぞ？」

朱乃「クツ！・・・ハアア！」

アインスの言葉で逃げられないと思った朱乃は先程と同じく雷を迸らせて、ブラッティダガーにぶつける。

雷と短剣がぶつかるそこから爆発が起き、それによる煙でアインスを見失う。

朱乃「まずいですわ・・・何処にい「此処だ」ツ!?きやああアアアツ!？」

後ろから声が聞こえ朱乃は振りむくとそこには既にアインスが朱乃とほぼゼロ距離まで近づいていた。

朱乃は咄嗟に防御しようとするが、それは間に合わず、アインスの魔力を帯びた拳で殴り飛ばされる。

空中で錐揉みするように体制を崩すが、何とか踏ん張りアインスを見据える。

アインス「一つ覚えの雷。通ると思うか？」

朱乃「クツ・・・」

アインス「他にも雷以外の攻撃方法があるのなら、威力は無くとも牽制にはなる。雷がまだ威力を上げられるのなら話が変わるがそういう風には見えない。お前の強みをもっと見出してみろ」

朱乃は悔しいのか軽く唇を噛みしめる。

朱乃はこれで【6回目】の雑揉みをした為、アインスはそろそろ他の方法を本人が思いつく、または【本来の力】を使うか待つようにただ、魔法戦をしている。

――姫島 朱乃

- ・ 魔力を使った戦闘の向上、または新しい攻撃手段を編み出す
- ・ 防御が薄い為、防御力を上げる
- ・ 雷ばかりに頼らない、またはバリエーションを編み出す

朱乃の出された課題は、女王としての能力と言うよりも朱乃自身の能力向上を目標とした方針が多かった。

朱乃は所謂ウィザードタイプ。それも自身の『雷の巫女』の異名の如く、雷電を使う事を得意としている。

その威力も絶大で、本来ならはぐれやそこいらの敵には簡単に倒せるだろう。

しかし、相手はライザー・フェニックス。それも眷属達もそれなりの場数はくぐつて来たというライザー自身が言うのだから強いのは確かだろう。

アインス「どうした？もう終わりにするか？」

朱乃「いえ……もう一度お願いしますわ」

朱乃は女王として、親しいリアスの為にも自分だけ進まないわけにはいかない。

そう思い、朱乃はアインスに覇気ある声で再度挑もうとする。

アインス「そうか……ならば来い。何度でも私はお前を撃ち落とそう」

朱乃「私もやられてばかりではありませんのよ！」

もう一度雷と短剣がぶつかり合い、爆音が再度響き渡るのであった。

くおまけく

シグナム「ふう……こんなものだろう」

祐斗「……………」チーン

シグナム「さて……………またシノンに連絡しないとな。レヴァン」

ドガアアアアアアアアアンン!!

シグナム「む？」

朱乃「……………」チーン

シグナム「……………アインスカ」

アインス「シグナム。すまない、当たらなかったか？」

シグナム「問題ない……………にしても派手にやったな」

アインス「ああ……………少し、熱が入ってしまった」

シグナム「そうか……」

アインス「……これは……まずいか？」

シグナム「少なくともカイトから説教があるだろう」

アインス「……」プルプル（震え）

シグナム「……案ずるな、私もおそらく同じ事になるだろう」肩叩き&震え

アーシア&シャマル&シノン

シヤマル「はーい、お疲れアーシアちゃん。ちよつと休憩しましょう」
木々がたくさんある山にいる三人の人影。

そこにはアーシア、シヤマル、シノンの三人が木を使ったトレーニングが行われている。

アーシア「はい！．．．あつ、シノンさん。他の皆さんはどうですか」

シノン「．．．．．」

アーシア「えつと．．．．．シノンさん」

シノン「．．．ごめんなさい。イライラを通り越して頭が痛くなっちゃって」

アーシア「ほ、本当ですか!?治療できるかわかりませんが私でよければ．．．」

現在、アーシアはシヤマルと一緒に治療以外のあるトレーニングを行っている。

その間、シノンが全体の治療役を担っているのだが．．．．

シヤマル「またアインスやシュテルがやったの?」

シノン「それとシグナムね．．．．．とりあえず後で三人には眉間に一発ぶち込むわ」

シヤマル「あ、あははは．．．．．」

シノンは先程から主に三人からの回復支援の連絡が来るのでその都度イライラしな

がらやっているのだが、二桁に入った辺りでそろそろ限界になり怒鳴っているレベルだった。

これには流石のシャマルも乾いた笑い方しかできない。

シノン「まったく……私の弾も無限じゃないのよ……でしょ？ 『ヘカート』」
《全くだ、主よ。》

シノンは自身を持つ大きなスナイパーライフルに話かけると、そこから機械的な女性の声が発生する。

このスナイパーライフル……正確には対物（アンチマテリアル）ライフルである『ウルティマラティオ・ヘカートⅡ』、通称『ヘカート』はシノン『装置』であり、相棒である。

見た目は本物のスナイパーライフルそのものだが、所々にやや機械的な部分があり、マガジンとボルトとの間にある満月のように黄色い宝石はヘカートが喋りだすと光ったりする。

ヘカート《主よ、非殺傷設定にしている故、一撃加えてみてはどうだ？》

シノン「そうしたいけど、今はダメよ。特訓中だし、時間が勿体ないもの」

ヘカート《だが、いいのか？またシグナムから支援の連絡だぞ？》

シノン「……ヘカート、シグナムの場所は？アイツには一発入れないと気が済まない」

ヘカート《心得た(Je savais)。北東800m、風は向かい風。弾道予測t》
 シヤマル「待つて待つて！今はダメだつて自分で言つたばかりよシノン!」

アーシア「シノンさん、落ち着いてください！私が治療しますから！」

シノンは殺気すら漂わせながらヘカートを構えようとした為シヤマルとアーシアが止めに入る。

アーシアは何故かシノンの頭に『聖母の微笑』の治療をしようとする。

シノン「冗談よ。二人共本気にしないでよ。……それとヘカートも」

シヤマル&アーシア「ほっ……」

ヘカート《む？本当にいいのか》

シノン「ええ……その代わり、特訓が終わった瞬間に撃つから三人の座標は捉えておきなさい」

ヘカート《了解した（J e l , a i e u . ） 、 我が主よ（O m o n S e i g n e u r ）》

シヤマル「逃げて！三人共超逃げて!!」

アーシア「あうう・・・シノンさん。すごく怖い顔してます・・・」

シノンはふふふつ・・・と恐ろしい笑い方をしながらヘカートにそう告げる。

シヤマルとアーシアは唯々シノンを怒らせてはいけない、この特訓で一番それを学んだ。

シノン「そんな事より、そっちの方はどうなの？」

シヤマル「え？ええ、そうね。アーシアちゃん、覚えるのが早いからほぼ使いこなしているわよ」

少し、時間が流れ、シノンはシヤマルとアーシアが休憩している時に訪ねてきた。

アーシアは近くにある木に座って、シヤマルから何処からか取り出した飲み物を受け取って飲んでおり、シヤマル自身も自分のコップとシノン用のコップに飲み物を注いでいる。

シヤマル「『装器』の使い方」も上々。治療も数はこなしているから問題なし。後はどれだけ本番で立ち回れるかって感じかな？」

シヤマルはそう言いながらコップをシノンに渡す。

シノンは今回、回復担当であるシヤマルやアーシアの代わりに来ているがもう一つやることがあった。

ーアーシア・アルジエント

・神器『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）の限度向上

・魔力の使い方、または『僧侶』としての役回りを学ぶ

・支給された『装器』の使用し、それを指導者シヤマルから指導を受ける事

これがアーシアに課せられた目標だが、この中で一番重要とされたのは『装器』である。

アーシアには自衛方法がない。

それは彼女がシスターで、そう言った戦いというものから無縁だと本人も思う位、戦

闘ができない。

できるのは『聖母の微笑』による治療……しかし、それでは敵的にされてしまう。何せ、回復役とはそれほど脅威になるのだから。

ライザーは自身含め16人。対してリアスは自身含めても8人。

半分の人数差があるのと、更にレーティングゲームに対しての経験差もある。

一人かけるところか一人でも多く戦える人間がいるだけで可能性や戦術が広がる。

故に出した結論は、「少なからず自衛程度はできる力」。その為の『装器』の支給となった。

アジアに渡されたのはシャマルの使う『装器』、『クラールヴィント』のように支援に特化した『装器』だ。

左手が爪の部分が鉤爪のように鋭いグローブに覆われ、「爪の部分から魔力で作られた糸を操る」。魔力糸は簡単に切れるものではなく、それを使って相手を足止め、拘束などができる。

しかし、それでもアジアは誰が見ても戦いが苦手そうに見える為、少なからずシノンには心配していた。

シノン「アジアは大丈夫？」

アーシア「はい、大丈夫です！最初は少し不安だったのですが、シノンさんやシャマルさんのおかげで頑張れます！」

シノン「そう？ならいいのだけど」

アーシア「それに。この子もいてくれるので、まだまだ皆さんのお役に立てるように頑張ります！」

そう言つてアーシアは自分の胸に付けた翡翠色の宝石が付いたリング状のネックレスをシノンに見せるようにする。

そのネックレスを付けているのがアーシアだからか、とても似合っており、シノンはへえ……と少し呆けてしまう位見惚れていた。それほどまでに似合っているからだ。

……だが……

アーシア「頑張りましたよね！『ラピユセル』さん」

ラピユセル《任せてくださいませえお嬢！お嬢の為なら、たかが鶏の一匹や二匹なんざ楽勝つすよ！》

・・・『ラピユセル』と呼ばれたアーシアが持つ『装器』から機械的な男性の声が周りの木々に響く。

それだけならいい、音声は男性か女性かはA I次第な為、どっちでもいいと言える。ただ、明らかに口調がおかしい。まるで自分、舎弟とでもいえるその喋り方は機械的な声もあつて違和感を覚える。

シノン「・・・シャマル。何かあの『装器』の口調・・・」

シャマル「言わないで・・・最初はあんなのじやなかったはずなのに、マスター認証して数時間後にはあんな感じになっちゃったのよ」

シャマルはシノンから来る視線を顔を逸らして回避する。

シノンは目をパチパチと何度も瞬きしながら自分の聞き間違いだと思い、アーシアに訪ねる。

シノン「あの・・・アーシア？」

アーシア「はい、何でしょうか？」

シノン「そのネットワークスが『装器』よね？」

アーシア「はい！名前は『ラピユセル』と言います！ラピユセルさん。シノンさんに

挨拶を」

アーシアがそういうと、翡翠色の宝石から音声が発せられる。

ラピユセル《おん？おお、嬢ちゃん。初めましてだな！あつしはお嬢の『装器』のラピユセルって名前だ。まあよろしく！》

シノン「……………」

ラピユセル《どうした？鳩が豆鉄砲でも食らったみてえな顔しやがって。……………あつそんな事よりお嬢！そろそろ『バリアジャケット』のデザインを決めねえとやべえですぜ！》

アーシアが「はうう！？そ、そうでした！」慌てはじめ、ラピユセルとどうすればいいのか話している。

会話から外れ、『装器』の謎口調にシノンは近くにあつた丸太に座りながら頭を抱える。

シノン「どうして……………どうしてこうなったの？」

シャマル「私に聞かれても……………クラールヴィント」

クラールヴェイント《すみません。私にもわかりません》

シノン「・・・ヘカート」

ヘカート《我に聞かれても、他人『装器』などわかるまい》

シノン「そういえば貴方もまともじゃなかったわ」

ヘカート《解せぬ》

くおまけく

アーシア「そういえば私、シノンさんの『装器』さんに挨拶してなかったです」

シノン「別にしなくていいけど・・・名前はウルティマラティオヘカートⅡ。長
いからヘカートでいいわよ」

ヘカート《よろしく頼むぞ、我が主に友よ》

アーシア「はい、よろしくお願いします。ヘカートさん」ニコツ

ヘカート《・・・うむつ。さん付けされるのも悪くないな》

シノン「あんた何嬉しがってんのよ」ジト目

ヘカート《別によからう。我が主が冷たすぎる故にこのように敬意ある挨拶をされるのが新鮮でな・・・》

ラピユセル《おお旦那！あんたもわかってますね！お嬢の良さが！》

シノン「・・・じゃあ何？あんたはアーシアをマスターにしたい訳？」イライラ

ヘカート《何、ただ新鮮と言うだけの話・・・それに我が主の方も中々に魅力的

な所もあるぞ？例えば、思い人に対しては普段の態度と違ってかなり奥々

シノン「ちよ、ちよつと!?!やめなさい！黙らないと壊すわよ!!」真っ赤

ヘカート《おお、怖い怖い》煽り

アーシア「？何の話をしているのでしょうか？」キョトン

ラピユセル《お嬢・・・その内近い将来、お嬢にもわかりますぜ》

アーシア「? そうなのですか?」首傾げ

それぞれの風景 『王』と『兵士』

リアス&シュテル&ディアーチエ

ローリアス・グレモリー

- ・『王』としての下僕の指揮、レーティングゲームの様々な戦術を取得
- ・滅びの力のバリエーション。それ以外の魔力の運用方法
- ・精神の強化。眷属や自分自身に対しての甘さの矯正

リアス・グレモリーは自身の立場や冥界の事情を知っている。

それは自信が他と比べて少し甘やかされていた事をそして何よりそういった地位にいる事を理解している。

現四大魔王の一人であるサーゼクス・ルシファーの妹にして、『滅びの力』を持つており、『紅髪の滅殺姫（ベにがみのルイン・プリンセス）』と呼ばれ、周りの悪魔からはそれこそお姫様の様に優遇されている。

しかし、それらは全て【魔王の妹】や【滅びの力】などの評価であり、更に【グレモリーの娘】と見られ、自身を決して【リアス・グレモリーという一人の少女】として見られない。

それは当たり前なのだとしても、貴族社会では普通であつても、それを簡単に受け入れられるかと言えばそうではない。

ー私はリアス・グレモリー。……ただのグレモリーじゃないー

今回の婚約もそう。親が勝手に決めたのも、恐らく私の事を考えて思っているのも分かっていて。何もかも分かっているのに拒むのはそれは単純に【我儘】なのである。

実際リアスは、彼女は周りにこそ甘やかされているが、親はそうではない。それこそ怒れば誰もが震え上がり、下手をすれば【消滅する】。何度も怒られ、何度も泣いた少女が初めてと言つてもいい反抗である。

他所であるバルバトスを巻き込ませたのは申し訳ないとリアスは思っているが、それでもこのレーティングゲームは勝ちたい。

―せめて結婚する人は、私を「リアス」として見てほしい……
その為にどんな辛いことでも耐える……そう思っていた。

リアス・グレモリーは怒りに燃えている。

部屋にライザーが現れ、現在に至るまで、貯まるに貯まった油が一気にマッチで爆発する位、現在リアス・グレモリーは怒りに燃えている。

シユテル「ほら、また足元がお留守ですよ？何度も何度も同じ手でやられて……
恥ずかしくないんですか？このアホコウモリ」

リアスが現在怒りに燃えている原因……全体が黒紫色で赤や青の装飾や線で飾られた服に足元までロングスカート。何処か制服のようにも見える姿をした少しリアスより身長が低めの少女……シユテルからの罵倒に怒りながら、シユテルが放つ炎の球体にリアスは足の脛に当たり膝をつく。

リアス「うぐっ?!?このお!なんで当たらないのよ!?!」

シユテル「はあ・・・またですか?そうやって焦って『滅びの力』を使って、それだけで私をどうにか出来るんですか?・・・身の程を弁えろ、駄犬姫」

リアス「ツ!?!きやああああ!」

反撃せしと放った滅びの力をシユテルに放つ。

本来、こんなものを誰かに向けて放ってしまえば、下手すれば消滅してしまうがシユテルは溜息を吐きながら炎の波紋のようなものを前方に張って滅びの力を防ぐと、それと同時に展開していた四つの炎の球体・・・『火の誘撃(パイロシューター)』がリアスに向かって飛んでいき直撃する。

リアス「カハツ!・・・ケホツ、ケホツ・・・くっ、うう・・・」

シユテル「後数少ない期間しかないのですよ?この程度しか強くなれなければ、ライザー・フェニックスに勝てません。・・・あつ鶏の卵をお腹に宿したら教えてくださいね?写真を撮りたいので」

デИАーチェ「・・・お、おいシユテル。ここら辺で一度・・・」

地面に転がるリアスを見て、シユテルはまるで【ゴミを見る目】でリアスに罵倒を言

「ディアーチエ「ほれ見ろ！この光景も何度目だと思ってる!?また蝙蝠が泣き始めたぞ！」

シユテル「ですがディアーチエ。残り期間までにやるべき事はまだ残っています。そこな哀れなメスどれ……雌豚を調きよ……育成を出来うる限りしなければ……」

ディアーチエ「シユテル。とりあえず今日の説教は覚悟しといた方がよいぞ。流石にシノンがキレてる故、今回は我は被害を受けたくないから弁護せぬぞ」

シユテルが「解せぬ」と言っていたが、ディアーチエは無視してリアス・グレモリーの方に歩き進む。

地面にorz状態で涙をポロポロと流しているリアスにディアーチエはやれやれと思いつつ、手を差し出す。

ディアーチエ「ほれ蝙蝠。一度シャワーを浴びに行くぞ。ジャージは我が直しておくから……だあああああもう！おいっ！王である我が手を差し伸べておるのだ、はよ立たぬか！」

リアス「もういや……なんで、私だけ……ぐすん……いつもいつもそうよ……もういやよ」

「ディアーチエ」……はああ……貴様は『王』であろう？ならば貴様の為に眷属は死物狂いでやっておるのに貴様だけ逃げる訳には行かぬだろ？」

泣き崩れ、戦意を失い始めたリアスに溜息を吐きながらもディアーチエは近づいてリアスをおんぶする。

「ディアーチエ」ほれ、背を貸してやるからさつさと乗れ。仕方ないからこの我が運んでやる」

リアスはされるがままにおんぶされ、その背中の中の暖かさにやられてか折れた心に染みわたるリアスは強く抱き締めながらまた大泣きする。

リアス「ぐすん……ディアーチエええ……ふええええん！」

「ディアーチエ」ちよつ!?抱きつくでない!?……全く。小鴉に茶菓子と紅茶を準備させるから一度休め。その後にレーティングゲームの座学を始めるぞ？」

そう言つてディアーチエとリアスは屋敷に向かつて行くが少し振り返り、シユテルの方を見る。

「ディアーチエ」シユテル……お主はとりあえず山の森林にでも行つて食材でも探しておれ。【馬】と【鹿】が居たら……一匹だけ捕まえて来るが良

い」

シユテル「……………はい、わかりました。【王】よ」

シユテル「……………ふうう……………今日の所はディアーチエに任せるとしまし
う」

そう言つてシユテルは一呼吸を入れた辺りで山の少し木々の多い森林に行く。

その姿は先程のまま、手には彼女が愛用する装器、『ルシフェリオン』を持っており、
周りを見渡しながら静かに言う。

シユテル「さて……………そろそろ出てきたらいかがでしょうか？」

シユテル「先程からこちらを狙っていたようですが、お目当ての【お姫様】はあのよ

うに屋敷に戻させて頂きましたので、此処には私しかいませんよ?」

そう言つて木々の茂みに向かつてシユテルが言うと、そこから【数名の男達】が現れた。数は10から20人近くおり、全員が下衆な目と卑猥な視線をシユテルに向ける。

「……チツ、いつから気づいてたかは知らねえがそつちから出てきて欲しいなら出てきてやるよ……なあ、テメエらあ?」

「ヒツヒツヒツこの女あ、中々いい体してんじやねえかあ! 壊しがいいがありそうだけ!」
「だな! ちよいと俺好みの大ききじやねえが服越しでも解るくらい形の良さそうなモノを持つてんぞ。あの女あ」

その姿を見て誰でもわかるように、【人間とは言えない姿】であつた。肌は紫色のような褐色に刺繍のような物が見える範囲に付いており、極めつけは眼球が黒く、瞳孔が白いのが特徴的で耳も鋭く尖っている。

一般人が見れば異形と言えるその姿からして悪魔、それも服装や各々鋭利な武器を携えており、話をしに來たようには到底見えない。

シユテル「皆様方が何処の貴族に雇われた【悪魔】か、もしくは眷属か……詳しくは知りませんが一応警告を。すみませんが、早々に此処を立ち去る事を提案しま

す。この場所はグレモリーの別荘であり、この山々一帯は現在グレモリーとバルバトス
が使用しております」

シユテルは彼等から向けられた下賤な眼差しに嫌悪感を抱いているような目でそう
告げる。

悪魔「ハッ！んなもん言われなくとも分かってんだよ!!」

シユテル「ならばこのまま冥界にでもお帰りください。我々は貴方達に付き合う暇が
ありません」

悪魔「そんな事は聞きてねえんだよオ！いいからさつきとリアス・グレモリーを出す
か、そこを通しやがれ!!それともなんだあ？この人数を一人で出来るとでも思ってるん
か、ああ!!」

悪魔「おめエ見たいな雌犬はよお、大人しく俺達の言う事を聞けばいいんだよ！わ
かったか!？」

悪魔「まあ・・・テメエもこの後グレモリーとバルバトスの男共を殺した後で、他の
メスと一緒にたつぷりと遊ばせてもらうぜエ。何せ聞く限り全員上玉らしいしな!!こ
りやあ楽しみで仕方ないぜ!!」

ギヤハハハハハ！といった笑い声が周りに響く。

それを聞くに耐えないのか、それともこの場にいる【害虫】が耐えないのか、シユテルは溜息を吐いてから冷たい眼差しのまま、悪魔達に話しかける。

シユテル「……すみませんが、私達は貴方達と遊んでいる時間はありませんし、ましてや初対面の相手に雌犬呼びなどする虫唾が走る輩に捧げるものなど何一つないかと」

悪魔「ああア!?このメスガキ、いい度胸してんじやねえか!!」

悪魔「おい、最初にあの女をやっちまおうぜ!四肢を引き裂いてから二度と口聞けねえようにさア!!」

悪魔「ぐふふつ、どう泣くか想像するだけで興奮してきた!」

シユテルはもはや聞く耳持たなくなった悪魔達を見て、一度ため息を吐いてから最後にこう訪ねる。

シユテル「そうですか……わかりました。では最後に一つだけ確認を」

悪魔「ああ?」

シユテル「この中で一番偉い、又は指揮を執っている者、所謂リーダーのような方が

いらつしやるなら前に出て来て頂いてもよろしいですか？」

そう言つてシユテルは悪魔達に訪ねると、その中で一番背の高い悪魔が前に現れた。

悪魔リーダー「ほう……嬢ちゃん中々に見る目あるな。確かに俺は此処にいる連中のリーダーだが……それがどうした？」

シユテル「そうですか……貴方が……それでしたら此方に。こういうものはまず偉い方から楽しむものだと思ひますし」

悪魔リーダー「?……ああ、なるほどなあ」

悪魔達のリーダーこと悪魔リーダーが名乗りを上げるとそこでシユテルは両手でスカートをたくし上げる。

下着がギリギリ見えない所で止めている為、恐らく見えないが悪魔リーダーは誘つていると思ひニヤケながらシユテルの方に進む

それを見た悪魔達も何をするのかと少し動揺したが、彼等には今からその行動に悪魔リーダーと同じ考えに至り、再び下衆なニヤけた顔になる。

悪魔リーダー「へへ、自ら誘つて来るとはな。もしかして意外とイける口なのか？」

シユテル「そうですね……最近【溜まりに溜まって】いますので、案外こういうものも悪くありません」

悪魔リーダー「そうかよ。だがそつちから誘うならそう簡単に壊れんじやねえぞ？せめて俺を少しでも楽しませようああああああああああああああああああああ！！！！」

突如、一步一步近付いた悪魔リーダーの体にくっつもの炎をサークルが巻き付かれ、その炎の熱さに悶えるかのように地面に倒れ苦しむ。

実際、悪魔リーダーから少しだけ黒い煙が出ており、臭い肉が焼ける匂いを周りに漂う。

シユテル「……そう、少々荒っぽく、豪快に、跡形もなく殲滅するのも意外と悪くありません」

悪魔「な、なんだ!?!」

悪魔「テメエ！何しやがった!?!」

他の悪魔達がそれぞれ動揺しながら何かやったであろうシユテルに指を指しながら叫ぶ。

しかし、それに反応せずにシユテルは静かに呟きながら吐き捨てる。

シユテル「はあ……襲う？遊ぶ？楽しませる？猿以下の脳みそしかない屑共が、随分と余裕ですね？おかげでこんな簡単なものに引つ掛かるとは思いませんでしたよ」
そこで一泊置いてシユテルは低く、冷たい声で悪魔達に告げる。

シユテル「戦いは始まる前から勝負が着いております。現在、私と貴方達の周辺は脱出不可能な結界を張り、拘束させて頂く為に予め罫も仕掛けております。……故に」

悪魔「ツ!?ぐあああああああ!?」

悪魔「あ、熱いイ!?熱いイイイ!?」

悪魔「や、やめろ!やめろおがあああああああ!」

悪魔リーダー以外の悪魔達もそれぞれ炎のサークルに巻かれ身動きが取れない状態で体を焼かれている。

シユテルはその光景を見てなのかはわからないが、普段の無表情に口の骨格が少しだけ……ほんの少しだけ上げて。その瞳には一切の同情も慈悲もなく。

シユテル「さて、貴方は後でたつぷりと遊ばせて頂くとして……それで、【我が王の命令】にかけて、残りの【馬鹿】共を一掃させて頂きます」

殲滅者は星光の炎が悪魔達を焼き尽くし、灰すら残さずに消し去る。

くおまけく

シユテル「……ダイアーチエ、片付け終わりました」

ダイアーチエ《うむ、ご苦労。大儀であるぞシユテル。それで？一人は残しておるな？》

シユテル「はい。リーダーを名乗る男を一人、少し乱暴にしてみました。が治療す

れば問題ないかと」

「ディアーチエ《解つた。こちらも蝙蝠と座学に入る。お主はそのまま外の警戒を続けろ》」

シユテル「了解です我が王……それでは」ピッ

シユテル「はああ……疲れました……おや？」ピピピッ、ピピピッ

ピッ

カイト「……どうだった？」

シユテル「カイトでしたか……はい、無事に終わりました」

カイト「……そう……怪我は？」

シユテル「特に異常はありません。そこまで強くありませんでしたので……」

カイト「……そっか、なら「それより」……ん？」

シユテル「私は王と貴方の命令に従い、成功いたしました。故にその報酬があるべきかと」

カイト「……報酬？出来るものなら何でもいいよ」

シュテル「でしたら、もしよろしければ今度、二人で外出しましょう」

カイト「・・・・・・・・・・そんなでいいの？」

シュテル「はい。・・・しかし、私だけです。はやては勿論、他の者達と一緒にではなく、私個人でお願いします」

カイト「・・・・・・・・・・シュテルがいいならいいよ。それじゃあ」

シュテル「はいそれでは・・・・・・・・ピッ」

シュテル「ふふ・・・・・・・・少し心拍数が上がりましたが、頼めば意外と簡単に了承して下さりますね。これで少しは他の方々よりリードできそうdっ!？」

ダンツ!!↑シュテルに向かって飛来してくる弾

シュテル「まそつぷ」直撃

一誠&カイト

カイト「……………シユテルはああ言ってたけど、あんなので本当にいいのかな？」

カイトは先程連絡して来たシユテルとの通信を切ってから首を傾げながらそう呟いた。

カイト「……………まつ、別にいつか。それより……………まだできないのー誠？」

一誠「だあああああ！全然できない!?!なんでだよ!?!」

カイト「……………はああ……………」

カイトが溜息を吐きながら一誠を見る。

一誠は現在、左手の『赤龍帝の籠手』に付いた緑色の宝玉を光らせながら持っている【黒い塊】に唸っていた。

一誠「大体、カイトさんはいつもどうやってやってるんですか？その……なんでしたっけ？」

カイト「……………『鉄血』。いい加減覚えて」

そう言つてカイトは自身の手から血を流すと、その血が黒い大きなメイスの形になる。

それを一誠に見せるように突き出す。

現在、カイトは一誠に自身が使う『鉄血』という魔力を使つて血を武器に変換する方法を教えている。

この『鉄血』は、燃費がよく、魔力の消費量が少ない。更に、かなり単調なイメージでも簡単にできる為、得物がない一誠が『赤龍帝の籠手』の倍加する時間の間の戦闘方法が増えるのではないかと思ひ、カイトは教えている。

しかし、血を使つている為、血の消費量も考えないと下手したら出血死になる場合がある方法である為に危険と隣り合わせになる。

カイト「……『鉄血』は前にも言ったけど、「血を鉄のように固める」だけ。それをすれば「自分が思った武器を作る」事ができる」

一誠「いや、できないんですが……」

カイト「……それは単純にイメージ不足。お前の中で一番強いと思う武器は？」

一誠は頭を捻るように深く考えていると何か閃いたかのように口を開く。

一誠「やっぱり剣とかじゃないっすかね？特に大きな剣」

カイト「……そっか。じゃあ……」

そう言つて、カイトは手に持っているメイスの形をぐにやぐにやと変形させると、それは自身を覆うくらいに大きなバスターソードのような剣ができる。

カイト「……はい、これりこれをベースに自分用のをイメージして」

一誠「ええ……いくら実物があるからってそう簡単に……」

カイト「……一誠は本当に勝ちたいの？」

一誠「なっ!?そんなの当たり前っすよ!あんな焼き鳥野郎なんか……」

カイト「……なら、できるできないじゃなくてやれよ。格闘経験ほぼ無し、魔力量の少なさ。……足りない物は無理やりでも埋めなきやライザーに勝てないよ？」

一誠「うぐっ！」

カイトからのきつい一言に一誠は何も言い返せない。

カイト「……それと……いい加減、その【籠手の中にいる竜】にも起きてもらわないと、俺が言ってた【アレ】ができないよ」

一誠「……」

カイト「……もしかして怖いのか？」

一誠「怖くねえよ。……本当は少し怖えけど。……でも、俺は決めたんだ。部長の為に、俺は最強の『兵士』なるんだって」

拳を強く握りしめながら一誠はカイトに真っ直ぐな目で言う。

カイトはその姿勢に「……ふくん」と呟きながら、一誠告げる。

カイト「……じゃあ死ぬ気で頑張つて。……俺は勝てる可能性をあげて、勝算もあつて、それでも足りないのは沢山ある。……後は一誠の覚悟とそれによつ

て生まれる結果次第だよ？」

一誠「カイトさん……」

カイト「……頑張りましたけどダメでした」は何も守れない。何も救えない。……だからさっさとその程度の目標なんて乗り越えて」

一誠「はい！」

——兵藤 一誠

・全体の身体能力を上げる

・『鉄血』の制御。またはそれをベースにした自身のオリジナル技を編み出す。

・禁手化に至る

くおまけく

一誠「そう言えば、なんでカイトさんって俺や部長以外は駒で読んでるんですか？」

カイト「……ん？ああ、それは……」

一誠「それは？」

カイト「……覚えられないから」

一誠「え？」

カイト「……こればかりは全然わからないけど、何故かすぐに人の名前を忘れる」

一誠「え、ええく……朱乃さんは？」

カイト「……誰それ？」

一誠「マジか……じゃあ木場は？」

カイト「……誰？」

一誠「……子猫ちゃ「誰？」はや!?!……じゃあアーシアは？」

カイト「……『僧侶』の奴？」

一誠「う、うくん……あってるけどさあ」

カイト「……そんなに一変には覚えられない」

一誠「カイトさんって意外とバカなのかな……」ボソツ

特訓の終わり、変化と不穏

ライザーとのレーティングゲーム前日となった現在、リアス・グレモリーとその眷属達は短いようで長かった特訓を終え、屋敷で過ごす最後の夜を迎えていた。

はやて「さあ！おかわりはたくさんあるからいっぱい食べてや！」

一誠「うまい！めっちゃうまい!!」

辰巳「箸が止まんない！めっちゃご飯が進む！」

ヴィータ「当たり前だ！はやての飯はギガうまなんだぞ！」

はやて「ふふっ、ありがとなヴィータ」

屋敷内では毎日料理を作っていたはやてが、最後というのもあつて普段とは何倍も腕によりをかけて作った料理が並べられている。

小猫「おかわりをお願いします」

カイト「・・・おかわり」

リアス「本当に美味しい……特訓の間……唯一の楽しみだったハヤテの食事が、今日で終わるのね……」虚ろな目

朱乃「あらあら……なんだか寂しくなりますわね……」暗いオーラ
シノン「……ちよつと。二人とも大丈夫なの？」

リアスと朱乃の反応に少し引きながらも心配したのかシノンがそう言う。二人はこの特訓で恐らく片方は精神面で、もう片方は物理面でやられた二人であり、それをこの特訓の期間に嫌という程された為にもはや此処にいる誰もがトラウマレベルなのではないかと思う位に二人の病み具合が凄かった。

一誠「……うっぐ、ごくん。ぶ、部長！俺頑張りますから、絶対に勝ちましょう!!」
リアス「ええ……そうね。勝つわ、勝つてみせるわ……こんなに辛い思いをしたもの……」

一誠「……部長？」

リアス「そして勝って思い知らせるのよ。私の事を無視して勝手に決めたお父様やお母様、お兄様にも……そうね、なんなら今回のレーティングゲームは生中継されるみたいだから、ライザーに恥をかいてもらいましょうそうしましょう。そして私の事

を舐めた目で見てきた連中に思い知らせてやるのよ。いえ、それだけじゃ足りないわ。連中を見つげ次第^{?????}させて（自主規制）して（バキyunバキyun!）してから（見せられないよ!）にしてやつたり・・・うふふ、うふふふふ・・・!」

一誠「ぶぶぶぶぶ、部長!」

藍華「ちよつ!?なんかやばいオーラどころか口調までやばい事になってるけど!」

小猫「おかわりをお願いします」

カイト「・・・おかわり」

明らかにリアスの雰囲気グロウアップしている事に一誠と藍華は驚愕する。

しかし、リアスをこのような状態にした本人はサムズアップしながら言い放つ。

シユテル「リアスは私が育てました。えっへん」

ディアーチェ「・・・一応本人のやる気は十分だから問題あるまい。それとこれに関しては全てシユテルの責任であるからな。我は寧ろこれ以上逝かないようにするのに精一杯だったわ」

辰巳「いや、もうかなり手遅れな気がするんだが・・・これ本当に大丈夫か?」

シユテル「安心してください。柔な育て方はしていません。その気になれば非道も外道もやれる程の精神に仕上げたと私は責任を持って断言できます」

辰巳・藍華 「安心出来るかあ!!」

こうしてリアスの眷属達は（朱乃を除いて）少しばかり……いやかなり変わってしまった『王』の姿に戸惑うのであった。

小猫・カイト 「（……）おかわりをおん」

ディアーチェ 「お前らはいつまで食っておるんだ!?!いい加減やめんか!!」

—————

現在、グレモリーの別荘にある温泉を満喫しているはやて達ははこれまでの特訓期間を振り返るように談笑をしていた。

リアス達は先に入り、明日の早朝には下山をしてレーティングゲームの支度をする為に早めの就寝をしている。

はやて「ふうく……とりあえずお疲れ様や♪なんだかんだで皆いい顔になったんやし、これならライザーにも何とかなるんやないか？」

シユテル「それはどうでしょうか？まあ、あのM……リアス・グレモリーをこの数日かかなりのものに仕上がりましたがそれでも数と経験の差は歴然ですのぞ」

デИАーチエ「シユテル。それは今に始まった訳ではない。この特訓が始まった当初から分かつていた事であろうが……それとそろそろあの蝙蝠娘の事をいじめるのをいい加減やめんか」

シユテル「いいえ。彼女のような甘い者には一人ぐらい明確な敵を作っておくべきです。そうすればもう少し視野が広くなり、明確な目標や慢心が無くなるはずぞ」

デИАーチエ「……それがシユテル。お主であるぞ？」

シユテル「はい……それに、私なら今後も近くで【厄介者】を払う理由が出来るか？」

シノン「ダウトね。どうせ発散できる遊び相手を手放したくないだけぞしよ？」

シユテル「あら。バレてしまいました」

デИАーチエ「シユテル……」

それぞれが湯に浸かったり、身体を洗ったりとしている中でユウキが温泉で手を挙げながら口を開く。

ユウキ「あつ！ねえねえ、そういえば結局捕まえた奴はどうなったの？」

はやて「それな、どうやら色々話してくれたらしいで。まあそれも全部〇〇〇君が全部吐かせたもんやけど」

シノン「ちよつと。〇〇〇つて殺してないでしょうね？最悪やりかねないわよアイツ」

はやて「……うん。そこんところなん？」

はやては横にいる人物……本来この女性だらけの中にいるべきじゃない【彼】に話しかける。

カイト「……ん？ああ……大丈夫。一応証拠として生かすといつて言ったから」

シノン「つまり生きてはいるけどどうなっているのかはわからないって事？」

カイト「……まあ……そんな感じ」

カイトはシノンにそう言うとはやての肩に寄りかかりながらお湯に浸かり続ける。

シノン「そうね……にしても、あんたって本当に平然と入れるわよね」

カイト「……何が？」

シノン「何がって……まあいつもの事だし、これに何も違和感を感じなくなつた私達もおかしな事なんだけど……」

シノンが言った通り、現状。カイトがこの空間にいるのは傍から見ればかなり異常である。

はやてと守護騎士、眷属全員が女性である為、その中で現在温泉に入っているカイトは男性一人と残り全員女性の状態である、これがカイト以外の男性ならば吹っ飛ばされるか、潰されるか、斬られるか、殺されるか……etcと言つた事になりかねないがカイトはかなり前からこんな感じの為、今更と言つた感じである。

因みにザフィーラは先にリアスの男組と混じつて入っている為、此処にいない。

アインス「私達、守護騎士はこう言つてはあれだが一切気にしなかつたが……」
シノン「流石に最初は抵抗とかあるでしょ普通……まあ【色々知ると】そんなのどうでもよくなるけど……」

シノンがそう言うのと周りも黙り始める。

カイトは「……どうしたの？」ってはやてに言うが、はやてはぎこちない笑みでなんでもないと言いなながらカイトにより肩を寄りかかる。

シノン「……ごめんなさい。こんな場所で言う事じゃなかったね」

ディアーチェ「気にするでない。これ如きで落ち込む程、我らは弱くない。うぬもそうだろ？」

アインス「そうです。それに私はカイトから教わりました。【過去に囚われず、糧として前に進め】と……私含め、守護騎士の皆も今を見ています。なので気にしてません」

シノン「そう……ね。そんな事を言ってたわね。こいつ」

「そう言つて温泉を堪能しているのか目を閉じてゆつたりとしているカイトに全員が向く。」

その視線にも、意味も、カイトはわからないが此処にいる者は【自分を救つた者】のそんな姿を見て、思わず笑う。

シノン「ふふっ……そういえばユウキはどうだった？ 貴方は私より先に眷属になつたじゃない？」

ユウキ「え？うくん、ボクも最初は驚いたけど結局すぐ慣れたって言うかなんと言うか……っ！ふふくん♪」

シノン「？」

シノンの質問にユウキは唖っていたが、何かを閃いたのか何かを企んだ顔付きになり……

ユウキ「えい！」

はやて「わっ!？」

カイト「……っ、うん？」

シユテル・シノン「ツ……」ピクツ

突然ユウキがはやてに寄っかかっていたカイトの背中を抱き着いて、そのまま自分の方へ引き寄せる。

カイト「……誰？」

ユウキ「えへへ♪」頬ずり

カイト「……はああ……んっ……」

シノン・シユテル「……………」ピクツピクツ

カイトは突然引つ張られ背中から伝わる感触が気になり後ろを少し目を開け見るが、それがユウキだと分かったら溜息を吐きながら目を閉じて、そのまま後ろに寄りかかるように体重を少しかける、傍から見るとペットを可愛がる飼い主とされるがままのペットの図である。

そして、それを見るたびにシノンとシユテルの片方の眉間が動く。

ユウキ「今はこんな感じかな〜♪あつはやて急にごめんね。ちよつと我慢できなくて〜♪」

シユテル「ちよつと待つてください。何勝手な事をしているんですか？」

ユウキ「ええ〜、いいじゃんシユテル。別にカイトが嫌がつてる訳じゃないからさ」

そう言つてドヤ顔で自慢するように見せつけるユウキにシユテルとシノンが青筋を浮かばせながら立ち上がる。

シユテル「そうですかそうですか……………でしたら不定な真似をする者を殲滅しましょう。ルシフェリオン」

シノン「別に……………私は羨ましいとか思つてないけど……………その顔はイラツと来

たし、ちようどいいからシユテルの手伝いをするわね。．．．．殺るわよハカート」

シユテル・シノン「セットアップ」

ユウキ「え!?ちよつと二人はずるいんじゃない!?」

ディアーチェ「まてまて、こんな所で暴れるでない。せめて外に出て殺りあえ馬鹿共」
シユテルとシノンが互いにデバイスを起動し衣服を纏うとディアーチェの言われたとおりにユウキをカイトから引つpegしてそのまま外に飛んで行った。

ユウキ「待つて待つて!?ボクまだ全然堪能してないんだよ!?ツもう!来て、『黒石の紫妖剣（マクアフィテル）」

すると魔法陣から取り出した黒紫色の片手剣が現れ、ユウキも騎士風の服を纏い羽を出しながら応戦する。

はやて「3人共、暴れ過ぎて屋敷を破壊しないでな」

ディアーチェ「全く．．．おい、こがrはやて。その黒猫をもう少しどうにかできるのか?止めも入らんし、結局お前の所に戻っておるではないか」

カイト「．．．．うん?」

「ダイエットが言うように、ユウキから離されたカイトはそのままはやての所にスーっと何も無かったかのように戻り、また肩に寄り掛かっている。」

はやて「そんな事言われてもな王様。別にカイトは悪い事してへんやろ？せやから3人もやりたいようにやらせても問題ないんと違うかな？」

「ダイエット「はああ・・・夜天の主もその王も、甘くて困るわ」

カイト「・・・そう言うダイエットも大概変わらないけどね」

「ダイエット「よし、その喧嘩買うぞ黒猫。我はいつそのような真似をしたか言うてみる。ほれ？」

カイト「・・・フツ」

「ダイエット「今何故鼻で笑った!?小鴉もその目はなんだ!?てか全員でそんな顔をするでない!やめんかああああ!!」

「ダイエット「の絶叫と外から聞こえる爆音と共に夜になってもカイト達の騒がしい時間は今も流れ続ける。」

温泉にも入り、皆がそれぞれのタイミングで就寝し始めた頃。屋敷から少し離れた所にある草原にカイトは近くにあつた座れるくらいの大きさがあある石に座っている。

寝間着には着替えず、黒いフード付きのパーカーに灰色のズボンでいる彼は夜の空を眺めながらポケットの中にある袋から干物の何かを食べながら見続けている。

「……いや、実際は星を見に来たのは序で本当は別の目的で外を出ていた。」

カイト「………来たか」

カイトはそう呟きながら立ち上がる。

その言葉通り、カイトは木々のある方向に顔を向けて口を開く。

カイト「……俺以外にいないから、出てくれば？」

木の方を向きながらカイトがそう言う一人の人物が木から現れ、カイトに近づくと歩み始める。

右手には全体が青く、赤い宝玉が嵌め込まれた剣を持つており、駒王学園の制服に穿着ている男が一人、カイトに鋭い視線を向ける。

カイト「……やっぱり来たんだ……リアス・グレモリーの『戦車』」

辰巳「俺はそんな名前じゃねえ。俺には元浜辰巳って名前があるんだよ」

カイト「……ふーん……で何？」

カイトは余りに無表情、無興味な顔付きでポケット入れた袋から干物のドライフルーツを取り出しながら食べる。

その態度に少しイラツとしたのか眉を少し歪めたがそのままカイトに警戒の眼差しのまま話し始める。

辰巳「何って……ほんととは分かってんだろ？俺がお前の……が一人になったタイミングで来た理由を、俺が【ずっと警戒してた】のも……違うか？」

カイト「……うん知ってる。だから一人になったんだけど……で、話があるなら早くしてくんない？眠いんだけど」

辰巳「わざわざ一人になるとか……まあいい。もう回りくどい事をするのは面倒臭いから単刀直入に聞く」

辰巳はそのまま剣をカイトに向けながら夜の静かな空間に一言、強い風が流れながら、カイトに確かに聞こえる声でカイトに問う。

辰巳「…………お前、【転生者】だな？」

レーティングゲーム、開始

此処は今回のレーティングゲームの審判する為に作られた一室。

この場所からモニター越しでリアス並びにライザーとそれぞれの眷属がいる陣地、フィールドの至る所が映像で見えている。

グレイフィア「皆様、この度は我が主であるサーゼクス・ルシファアの名の下、フェニックス家とグレモリー家の試合に置いてアナウンサー役を任せられましたグレモリー家の使用人、グレイフィアと申します」

その部屋でモニターに映っている両者を見ながら専用マイクで話しているメイド服の女性、グレイフィアが転々と話し続けている。

グレイフィア「今回のレーティングゲームの会場として、両家のご意見としてリアス・グレモリー様方の通う人間界の学び舎、『駒王学園』の校舎を元にしたレプリカを異空間に用意させていただきました。この異空間であればどんなに壊して本物の駒王学園には影響がありません。また、両者の転移された場所が本陣になっています。リアス様は旧

校舎の『オカルト研究部部室』、ライザー様は新校舎の『生徒会室』です。それと『兵士^{ボーン}』は互いの敵地に足を踏み込めた瞬間、昇格を可能となっております」

モニターでは両者がアナウンスを聞きながら耳に光った何かをはめ込んでおり、これは魔力を介して作られた通信機で遠くにいても話せられる物で連絡などは基本的にこれを介して行われる。

そうこうしている内にグレイファイアが腕に付けた時計を確認して開始の合図を告げる。

グレイファイア「それでは開始のお時間と成りました。ルールは両者どちらかの王がリタイア、またはリザインをされたら終了となります。それではゲームスタートです」

そう言うのとグレイファイアはマイクのボタンから手を離し音声オフ状態にすると溜息を吐きながら椅子に背中を預ける。

グレイファイア「はあ……」

「お疲れ様です。グレイファイア様」

後から声をかけられたグレイファイアは振り返ると同じようなメイド服ではあるが、スカートの丈は少し短めで膝上で太ももから見える黒いナイフホルダーと腰に付いてい

る懐中時計が特徴的な、所々違う衣服を纏っている少女がお辞儀をしながらグレイファイアに言う。

「お粗末ながら紅茶をご用意しました。それと、サーゼクス様とご主人様からグレイファイア様のお手伝いをさせて頂くことになりました」

グレイファイア「そう、ありがとうございます」

咲夜と呼ばれた少女はそう言う隣グレイファイアの机に紅茶を置き、隣の席に座る。

グレイファイア「久しぶりに会うけれど、元気になりましたか？」

咲夜「はい、今は眷属としても……バルバトス家のメイド長としてもそれなりにやらせて頂いてます」

グレイファイア「そう……それで？彼は今どうしているの？」

咲夜「今は別室にてモニターでゲームを観戦していますが、時が来れば動くとの事です」

グレイファイア「……そう」

グレイファイアは置かれた紅茶を持ち、飲み始めながら試合を観る。

現在、両陣営は本陣から一步も動いていない。リアスは地図を広げて作戦を立てているようだが、ライザーの方は優雅に座って寛いでいる事がモニターで確認された。グレイファイアはそんな光景を眺めながら飲んでいる紅茶を堪能している。

グレイファイア「おいしいわ・・・とても」

咲夜「ふふっ、ありがとうございます」

所変わって別室。

この部屋には『カイト・バルバトス一行』と書かれた札通りに、カイトやはやてと言った今回のリアス・グレモリーとその眷属の特訓に付き合った者達がいた。

ユウキ「うわあ、すごいドキドキするね！」

シノン「ユウキがドキドキしてどうすんのよ……まあ、心配なのはわかるけど」
それぞれ椅子が用意され、座っている中でユウキが落ち着きがないようにしながらモニターを眺めながらそう口にした。

シノンも肩を竦みながらユウキに呆れているものの視線はとても心配そうな目で眺めている。他の守護騎士達も各々の気持ちで見ているがカイトは相変わらず無表情で、はやてに至ってはモニターを覗ずに片耳にはインカムとタブレットを使って何かをしている。

カイト「……はやて、どう？」

はやて「うん、準備完了や。本格的に動くのはゲーム中盤からやけど、証拠や承認もすませているから問題なしや」

カイト「……ふーん……サーゼクスは？」

はやて「責任はこちらで持つから後は任せたよ」って。それと「できればいいけど殺さないでくれ」も言ってたで」

カイト「……うん」

そう言うつてはやてはタブレットを閉じてカイトに言うともニターに目を落とす。

現在、レーティングゲームのセンターと呼ばれる中心ではリアスの眷属である一誠と藍華と小猫が潜入している。

対してライザーの眷属からはポーン3人と戦車1人が一誠達を待ち構えている。

カイト「……そろそろ戦闘が始まる」

はやて「そうだね。しかしライザーさんにしてはセンターを先に取りに行くなんて以外やな……」

カイト「……多分、最初だからリアス・グレモリーと眷属の実力を確認するんだと思う」

一誠達も隠れながら入っていたがライザーの眷属を確認すると隠れるのをやめ対面する。

それぞれ小猫がライザーの戦車雪蘭シエンランを、藍華が棒を持った和服の兵士ミラ、一誠は双子の姉妹イルとネルと対峙していた。

ユウキ「イケイケ〜!! 藍華やっちゃえ〜!!」

ディアーチェ「こら紫髪の! こんな所ではしゃぐでない!」

シノン「へえく……小猫の方は良い感じじゃない？」

ザフィーラ「あれ位の攻撃なら簡単に捌ける」

それぞれがモニターに向かって応援しているがヴィータが睨みながら口を開く。

ヴィータ「おい、何かアイツさつきから逃げてばかりじゃねえか？」

シグナム「そうだな……しかし、当たらないな」

カイト「……一誠は一応、避けるのだけはそれなりにうまくなったと思う」

ヴィータ「にしても……ダサイな」

カイト「……」

ヴィータが言っていた方では一誠がチェーンソーを持った双子に追われている状況になっている。

その光景を見たカイトは溜息を吐きながら眺め、他数名は一誠の逃げ腰になんともいえない顔になる。

はやて「……まあ、一誠君の神器は倍加するのに時間がかかるからな」

シノン「そうね……そういえば、結局あの変態は禁手に至ったの？」

シノンがそう言つてカイトに訪ねるとカイトは首を横に振りながら口を開く。

カイト「……………至つてないし。【赤い竜】もまだ目覚めてない」

シノン「……………それ、本当に大丈夫なの？」

カイト「……………わかんない。正直キツイと思う」

モニター上では逃げていた一誠がようやく倍加の準備を終えたのか双子と向き合うように相對する。

一誠《行くぜ！『赤龍帝の籠手』！》

《Explosion!!》

モニターでは一誠が『赤龍帝の籠手』を発動させ、双子に突進する。

双子も突然逃げてた奴がいきなり来た為動揺したが、それでも反射的にチェーンソーを振り下ろす。

一誠《おらおら！》

しかし、一誠は振り下ろされたチェーンソーを簡単に避けて双子に攻撃をする。

ユウキ「おお！すごいじゃん一誠！」

シノン「ええ、そうね……え？」

シヤマル「でも何か……」

はやて「なんや攻撃にしてはえらく弱いなあ。そもそもパンチと言うか……触つた？」

一誠は双子の肩や横腹を叩くようにタッチするだけでそのまま通り過ぎた。

双子も攻撃とは言えない行動に驚いてか転んでチェーンソーを落とすがすぐさま拾い上げ一誠に向ける。

ヴィータ「おいおい！ほんとにちゃんと鍛えたんだよな!？」

カイト「……あいつ、何する気だ？」

ユウキ「ちよつと待って！何か一誠の様子が変だよ!？」

ユウキが指を指しながら言う先には一誠が肩を震わせながら俯いている。その姿に双子の姉妹はここぞとばかりに一誠に近づく。

イル《何こいつ？さつさとバラバラにしちやおう!》

ネル《そうだねしちやおつか!》

双子の姉妹《バラバラ♪バラバラ♪》

そう言つてチエーンソーの構え、今からでも突進しようとする。

カイト達も一誠の異変を感じながらモニターを見ている事しかできない。まさに絶体絶命……なのだが

カイト「……………一誠、何かやらかしそう」

はやて「え？今なんて？」

カイト「……………アイツがあんな顔をする時は……………」

一誠《ぐふつ》

双子の姉妹《？》

一誠《ぐふふふふツ……………》

カイト「……………大抵、碌な事を考えてない」

一誠《フツハハハハハ！この時を待ってたぜ！！》

双子の姉妹《ツ!?!》

そう言つて一誠は何やらポーズを取りながら大笑いして、何か某ライダーの変身ポーズを取りながら最後に籠手を展開している左手の指を鳴らして一言。

それにより、双子の姉妹の体から、正確には一誠が触れた所に魔法陣が現れ、予想の斜め上の光景が広がる。

一誠《洋服崩壊（ドレス・ブレイク）!》

双子の姉妹《キヤアアアアアアアアアアアツ!?!》

カイト達「……………は？」

一誠の叫びと共に双子の姉妹の衣服が粉碎するように破け、簡単に言えば全裸になつた。

当然、双子の姉妹は突然全裸にされた事で悲鳴を上げてはその場で座り込み、戦闘などできない状況になる。

ユウキ「……………何アレ？」

シノン「……最低」

ヴァイター「バカの一言だな」

シグナム「女性には有効だが……良い手段とは言えないな」

シユテル「なるほど、触れた際に自身の魔力を介して【衣服が吹き飛ばす】というイメージをして発動しているのですね」

デアアーチェ「……ふんっ、下らんことを」

シヤマル「あはは……」

ザフィーラ「……」

それぞれが一言ずつ冷ややかなコメントをする中でモニターでは一誠がガッツポーズしながら喜んでいた。

一誠《ハーハッハッハッハ！見たか、これがカイトさんとの特訓以外の時、寝る間を惜しんで編み出した俺の必殺技！その名も『洋服崩壊』だ!!》

双子の姉妹《最低！ケダモノ!!》

一誠《ハッハッハ！これが……これが俺の、エロの力だア!!》

左手を突き出しながらそう言っている一誠。

その光景を見ているカイト達は、もはや絶句とまで言えるほど静かになるが、アイン

スが首を傾げながらはやてに訪ねる。

アインス「我が主。私にはよくわからないのですが、あの男は何故あんなに喜んでるのですか？」

はやて「ああ……えつとなアインス。ああいうのは気にしなくてええんよ」
アインス「そうですか？」

はやても苦笑いしながらアインスに言い、アインスもよくわかっていないような顔をする。

カイト「……アイツ、終わったら一回殺そう」

ユウキ「う、うーんどうしよう。同意せざる負えないんだけど……」

シノン「私も。ちよつとあれは異常よ、異常」

カイトに関しては魔力を纏いながらかなり無表情ではあるものの、明らかに声が低く怒った感じで言う。

それを感じてかモニターの一誠がビクツと肩を震わせながら左右に首を振って何かを警戒しているような動きをしている。

はやて「あつ、小猫ちゃんと藍華ちゃんも終わったみたいやな」
ユウキ「あれ？でも相手を残して体育館を出ちやったよ？」

一誠達は止めを刺さずにそのまま体育館を出口に向かつて走る。

その際、ライザーの眷属が「逃げるのか!？」と叫びながら言うがそれを無視して一誠達は体育館を出た。

カイト「・・・ふーん、考えたね」

はやて「そうやな。まあ、考えてみれば当然なんやけど」

ユウキ「ねえ、何で一誠達は体育館を出ちやったの？」

カイト「リアス・グレモリーの方は人数差的にもセンターを守りながらライザーを倒すのは難しい・・・だから」

カイトが最後まで言う前にモニターから爆発音が聞こえる。

モニターの方向を向くと、そこでは朱乃が体育館を破壊する光景が映っている。

朱乃《撃破（テイク）ですわ》

グレイファイア《ライザー様の『戦車』^{ルック}一名『兵士』^{ポーン}三名、リタイア》

ユウキ「おお！体育館が壊れたよ!？」

カイト「センターそのものを破壊すれば守る必要がなくなるから攻められる」

シユテル「なるほど、少しは考えましたね。あの駄目蝙蝠」

シノン「センターの破壊と相手の撃破……意外と順調じゃない？」

それぞれが関心しながら眺めている。

モニターでは一誠が藍華と小猫にハイタッチしようとして避けられている光景が目に映る。

はやて「そりゃあ、あんな変態技を見せられた後じゃあ触りたくないよね」

カイト「……はやて、そろそろ行くよ」

はやて「うん？ああ、そうやったね。行ってらっしゃいカイト」

カイト「……うん。行くよユウキ、シノン」

ユウキ「はいはい」

シノン「ええ」

カイトユウキとシノンは立ち上がって部屋から出る。

出る際、はやてのあつという声とモニターの爆発音が聞こえたが、カイト達はそのま

ま部屋を後にして廊下を歩く。

「ねえねえ古城君。カイトから連絡来た？」

「いや、まだ来てn・・・おっと、今来たぞ」

「えっ、ほんと!?! 見せて見せて!!」

「あつ私も見たい!」

「お、おい立花近い! 近いから! 結城も止めろって!!」

「ちよつと三人共うるさいわよ」

「そう思うなら止めろよアリス！」

「あつ、そろそろ行動開始だつて！ユキカゼちゃんは先に行つてるから私たちも行くよー！」

「待て待て立花！それぞれ場所が指定されてんだから……ええつと何々？俺と結城がシノンと合流してエリアAに、アリスがユキカゼと合流してエリアBだつてよ」

「了解！」

「わかったわ」

「あれ!?私は!？」

「ああ……立花はカイトとユウキと合流だつてよ」

「え?また私？」

「いやお前じゃなくてあつちのユウキ。最初に行つたのがお前な」

「あつユウキちゃんか」

「やったー！私、カイトとだ!!」

「落ち着きなよ響。それに遊びじゃないんだから」

「勿論大丈夫！任せといてよアリスちゃん！」

「それじゃあ行くぞ結城」

「うん、了解！牛鬼も行くよ！」

「それじゃあ私も行くわね。また後で」

「皆また後でね！よし、立花響！行きます！！」

「フヒヒ……もうすぐ、もうすぐで全部俺の物になる……フヒヒヒヒヒヒ」

赤と青の龍

一誠「やったな小猫ちゃん、桐生！……つてなんで二人共俺から遠ざかってんの？」

体育館での戦闘を無事に終えて一誠が小猫と藍華にハイタッチをしようとすると彼女達は一誠から距離をとっている。

理由は単純で、先程一誠がした技、『洋服崩壊』を警戒しているからだ。

藍華「いやあのね一誠。貴方が何をしたか胸に手を当ててよく考えなさいよエロ兵藤」

一誠「もしかして俺の『洋服崩壊』の事か？あれは相手だから遠慮なくやっただけで流石に味方にするわけ……」

藍華「いやいや、だとしてもよ。アンタどんだけ女の裸が見たいのよ……流石の私でも引くわよ」

一誠「う、うっせーな！この技を覚える為にどれだけ特訓したか……！」

一誠は握りこぶしを作りながら藍華に熱弁しようとするが、その前に小猫から一言罵声が発んでくる。

小猫「……最低です。近寄らないで下さい変態」

一誠「辛辣!」

藍華「そうね。これから私達から最低でも20メートルは距離取ってね。行こう小猫ちゃん」

小猫「はい」

一誠「えっ?えっ、ちよつと待ってよ!桐生、小猫ちゃん!!」

藍華と小猫が距離を取って移動し始め、一誠が後ろから追いかける。

しかし、次の瞬間……

ドカアアンツ!!

一誠「ウワツ!」

突然の爆発音と勢いよく舞う土煙、そして爆発の衝撃はによって一誠が吹き飛ばす。吹き飛ばされた一誠は地面を転がりながら衝撃に耐えた。

一誠「クツソ！いきなりなんだよ……ツ！桐生!?小猫ちゃん!」

起き上がって辺りを見る一誠は思わず息を飲む。

今起きた爆発、その発生源と言える土煙の中心がちようど、藍華と小猫がいた所だからだ。

一誠「おい桐生！小猫ちゃん！大丈夫か!?……クツソ、誰だよ一体……!」

「フフフツ、撃破^{テイク}」

一誠「ツ！お前、ライザーの女王^{クイーン}か!」

一誠が声のした方を向くとそこにはライザーの女王であり、『爆弾女王（ボムクイーン）』と呼ばれるほどの実力を持つ女性、ユーベルーナが上空で浮いている。

一誠「テメエよくも!」

ユーベルーナ「あら？二人倒したつもりなのだけど、その戦車^{ルック}は中々やりますわね」

そう言つてユーベルーナは一誠の言葉を無視しながら藍華と小猫がいたであろう場所に視線を送る。

そこには土煙が止んで、二人共服がボロボロあるものの、倒れている小猫とそれを抱きかかえる藍華の姿が見えた。

藍華「ちよつと！しつかりして小猫ちゃん!？」

小猫「すみ．．．ません．．．．藍華先輩．．．．後を、お願いしm．．．．」

小猫が最後まで言う前に粒子に包まれて消えた。

それと同時にグレイフィアからのアナウンスが流れた。

グレイフィア《リアス・グレモリーの戦車ルーク一名、リタイア》

藍華「そんな．．．．私を庇って．．．．」

一誠「桐生．．．．」

藍華の手から消えた小猫を見た一誠は嘔みしめながらユーベルーナを睨みつける。

一誠「クソツ降りてきやがれ！俺が相手になつてやる!!」

ユーベルーナ「フフツ、そう言つて降りる人が何処にいますとでmツ!？」

ユーベルーナが最後まで言う前に彼女に向けて雷撃が飛んでくる。

それを魔法陣を張つて防いだユーベルーナは雷撃が飛来してきた場所を見据える。

ユーベルーナ「貴方は……リアル・グレモリーの女王^{クイーン}ね」

朱乃「あらあら、流石に防ぎますか」

飛来して来た朱乃は右手に雷を迸らせながらいつもの和かな口調で喋る。

しかし、目には敵意のある視線をユーベルーナに向けて、後ろにいる一誠と藍華に声をかける。

朱乃「イツセー君と藍華ちゃん。此処は私に任せて先をお急ぎなさい」

一誠「朱乃さん！」

藍華「でも……」

朱乃「うふふっ♪心配いりませんわ。私が全身全霊をかけて、小猫ちゃんの仇を取ってあげますわ」

魔力のオーラを漂わせながら朱乃はそう一誠と藍華に言った。

藍華はそれでも迷っていたが、朱乃が視線で一誠に送ると頷いて藍華の手を引く張る。

藍華「一誠……」

一誠「行くぞ藍華。．．．朱乃さん！後をお願いします!!」
そう言って走って行く一誠と藍華。

二人が去った後、いるのは朱乃とユーベルーナだけとなった空間でユーベルーナが口を開く。

ユーベルーナ「一度あなたと戦ってみたかったのよ。【雷の巫女】さん」
朱乃「あら、それは光栄ですわ。【ボム・クイーン】さん」

これを合図に【雷】と【爆発】がぶつかり合った。

藍華「ちよ、ちよつと!? 離してよ兵藤!」

一誠「うるせえ! あんな所でいつまでも悔やんでも仕方ねえだろ!」

藍華「そんなのわかって……」

一誠「わかってんなら走れ! じゃねえと『洋服崩壊』ドレス崩壊するぞ!」

藍華「わかった! わかったから!!」

朱乃とユーベルーナ戦い始めた頃、一誠と藍華は共に走りながらその場を離れていた。

その時にまたもグレイファイアの声が聞こえる。

グレイファイア《ライザー様の兵士ポーン三名、リタイア》

藍華「えっ!? ……きやつ!?」

一誠「三人!? ……うおっ!」

驚いている一誠と藍華に物陰から突然引つ張られ、そちらを振り向くと祐斗と辰巳がいた。

祐斗「やあ」

辰巳「待たせたな」

一誠「木場！それに元浜も!!」

藍華「もしかしてさっきの兵士三人って……」

祐斗「朱乃さんが張った結界と辰巳君の協力のおかげでだいぶ楽できたよ」

辰巳「ともかく一旦隠れるぞ」

そう話し合つて一誠、藍華、祐斗、辰巳は体育館の倉庫に身を潜んだ。

一息つくためにも倉庫にあった平均台や跳び箱などにそれぞれ座つたりしている所で藍華がポツリと口を開く。

藍華「ごめん……私のせいで小猫ちゃんが……」

祐斗「聞いたよ……余り表にださない子だけど、今日は張り切つてたよ。無念だったろうね……」

辰巳「まつ、元々全員生存で勝利……なんて甘い期待はしてないし、最初に取りタイアしたのが小猫ちゃんつてだけだ。その分俺たちが頑張れば良い」

藍華「本当に……ごめん」

藍華が悔しさの余り涙を流す。

そんな彼女の頭を優しく撫でながら辰巳は口を開く。

藍華「た、辰巳……？」

辰巳「誰もお前のせいなんて思っていないし、謝る必要もないぜ？」

一誠「そうだけ！俺だって何もできなかったんだ、小猫ちゃんの分も俺達で頑張ろうぜ！！」

祐斗「そうだね。先輩として、小猫ちゃんの分も頑張ろう」

藍華「兵藤……木場……そうね、頑張らないとね」

藍華はそう言つて徐々に微笑んだ。

和んだ空間に辰巳がツハ!?と何かに気づいた反応をして急に制服のブレザーを脱ぐ。

藍華「ちよ、どうしたの辰巳？」

辰巳「……とりあえず、お前はこれを羽織れ」

藍華「え?……あつそういう事ね」

辰巳の行動によく気付いたようで藍華はブレザーを受け取つて【ボロボロの制服】の上から羽織る

一誠「あつ元浜テメエ！何しやがんだよ!？」

辰巳「やっぱりお前は気づいてたのに黙っていたのかよ！さつきから目線がおかしい

と思つてたぜ全く……」

藍華「なんだ……たかが下着がちよつと見えてるだけで興奮するとか、流石はエロ兵藤ね」

そう言つて藍華が「ほれほれ♪」と辰巳からもらつたブレザーを半脱ぎしてポロポロ制服からチラつく下着を見せる。

それを見て「ブハっ！」と鼻血を出しながら四つん這いになる一誠。

一誠「クソツ桐生の下着如きで興奮するなんて……悔しい！けど見ちやう!!」
藍華「ほれほれこれね？これがいいんでしょう？」

一誠「クソツおおおおお！良いです！最高です!!」

辰巳「アホな事やつてんじやねえよお前ら……」

祐斗「あはは……」

一誠と藍華のやり取りを見ながら辰巳は頭に手を当てて、祐斗は苦笑いしながら呆れる二人。

そんなことをしていると耳に付けた通信機から声が聞こえる。

リアス《4人共聞こえる?》

一誠「部長!」

リアス《どうやらライザーの女王クイーンが早めに登場した以外は想定内ね……これから新しく指示を言うわ》

そう言ってくるリアスに一誠達は頷きながら答える。

リアス《まず、藍華は治療ね。前線に出るにも今の状態じゃあ危ないから一度旧校舎に戻りなさい》

藍華「了解です」

リアス《それ以外のイツセー、祐斗、辰巳は校庭から新校舎に向かいなさい。イツセーは新校舎に着いたら女王クイーンに昇格よ》

一誠「ハイ!部長!」

祐斗「わかりました」

辰巳「了解!」

各々が返事をして話を進める。

リアスは彼らの元気のある声にほっとしたのか、通信機越しからでも笑い声が聞こえた。

リアス《ふつつ、祐斗と辰巳が旧校舎の裏を守ってくれたおかげでもう奇襲の心配はないわ。二人共、どんだん攻めなさい》

辰巳「よし！やってみよう」

祐斗「うん。頑張ろうね、辰巳君」

リアス《それとイツセーも……遠慮なく暴れて頂戴》

リアスの言葉に一誠は大きな声で返事をしながら祐斗と辰巳に向けて拳を出す。

一誠「了解です部長！……それじゃあ、「オカルト研究部男子トリオ」で！」

祐斗「……派手に行くかい？」

辰巳「ああ、行こうぜ！一誠、木場!!」

祐斗、辰巳も拳を前に出して三人でぶつけ合う。

それを眺めるように見ていた藍華が羨ましそうに言った。

藍華「いいね、男の友情？熱い絆って奴？それとも三角関係？」

一誠「つってお前なア！今いい所を台無しにすんなよ!？」

藍華「はいはい♪それじゃあ私は戻るから三人共頑張ってみよう」

藍華が手をヒラヒラと振って旧校舎に向かつて戻ろうとしていると、急に制止してはクルッと振り返る。

藍華「あつそうだ。辰巳」

辰巳「……ん？どうした？」

藍華「……負けないでね？」

振り返った藍華が心配そうな顔で辰巳に言う。

辰巳は最初はきよとんつとしていたが、すぐにニヒル顔になりながら言う。

辰巳「ハッ！下から負けるつもりなんかねえよ!!」

藍華「……へっそうね。……少しの間、任せたわよ！男共!!」

そう言って藍華は旧校舎に向かい、一誠達も校庭に足を運んだ。

体育倉庫から出て、校庭に着いた一誠、祐斗、辰巳は着いて早々に一誠が吼えるように叫ぶ。

一誠「おい！どうせ隠れてるんだろ!? 正々堂々勝負しやがれ!!」

辰巳「……………つて言つて出て来れば楽なんだけどなく……………」

祐斗「そうだね……………でも、流石にこれで来る人はいないよね……………」

「ふふふふつ……………」

「「ッ！」」

一誠に叫びに余り期待しない辰巳と苦笑いする祐斗だったが、何処からか女性の笑い声のが聞こえる。

笑い声が聞こえた方を向くと、そこには如何にも騎士と思わせる甲冑や剣を携えている女性が一人現れた。

カーラマイン「私はライザー様に仕える騎士^{ナイト}、カーラマインだ。堂々と真正面から出てくるなど、正気の沙汰とは思えんな……だが、私はお前らのようなバカが大好きだ！」

そう言つてカーラマインと名乗る女性は左腰に付けた剣を抜き、炎を纏わせた刃を一誠達に向ける。

それに応じてか祐斗が数歩前に出て、同じく腰に付けた魔剣を抜いて口を開く。

祐斗「僕はリアス様に仕える騎士^{ナイト}、木場祐斗。騎士^{ナイト}同士の戦い……待ち望んでいたよ！」

カーラマイン「よくぞ言つた！リアス・グレモリーの騎士^{ナイト}よ!!」

そう言つて祐斗は魔剣を構え、カーラマインも同じく構えては祐斗に向かって突撃する。

祐斗も同じく間合いを詰めて、剣を振るう事によつて鉄と鉄がぶつかり合う音が響き渡る。

カーラマイン「ダアツ!!」

祐斗「フツ！」

カーラマイン「ハッ！」

祐斗「ハアツ!!」

騎士ナイトの特性もあつて、見えないスピードで繰り広げられている剣戟は、もはや彼ら以外に入れるものはいない。

一誠と辰巳は蚊帳の外のように見ているだけだった。

一誠「すつげえ……つうか、俺達の出番なくね？」

辰巳「……いや、そうでもない見たいだぞ？」

辰巳は自分の言葉に「へっ？」と返す一誠に指を指して教える。

そこには片面の仮面を被りライダースーツ系の服を着た戦車ルーク、イザベラやドレスを着た、と思僧侶ビショップられる金髪の少女。

他にも大剣を背負った騎士ナイトと十二単の和服を着た僧侶ビショップ、猫耳セーラー服の二人の兵士ポーンが現れる。

「全くカーラマインったら。相変わらず頭の中は剣ばかりで埋め尽くされて……挙句、そちらの騎士も剣バカの戦闘好きなんて。剣を持つ人は大体あなるのでしょうかね？」

辰巳「おいおい……残りの駒全部投入したんじゃね？」

一誠「マジかよ……」

そう呟いている二人に金髪ドレスの少女が再び口を開く。

「それにしても退屈ですわね……あ〜あ……こんな【くだらない茶番】、早く終わらないかしら？」

辰巳「一誠……!」

一誠「ああ! 『赤龍帝の籠手』!」

《Boost!!》

一誠は『赤龍帝の籠手』を展開し、辰巳も右手に青い剣、『咆哮する恐龍鎧』を構える。

「あら、もう戦うのですの? なら……イザベラ、美南風。貴方達はあつちの眼鏡をかけた方を。シーリスとニイ、リイはあつちの下品な男を相手なさい」

「「はい、レイヴェル様!」」

ドレスの少女、レイヴェルがそう言うのと、仮面の戦車、イザベラと和服の僧侶、美南風は辰巳に、大剣の騎士、シーリスと猫耳セーラーの兵士、ニイとリイは一誠に攻撃を仕掛けた。

一誠「うおっ!?!・・・って!お前は戦わねえのかよ!?!」

レイヴェル「あら、ごめん遊ばせ。私は下より戦う気なんてありませんの」

一誠「なんじやそりゃあ!つてうお!?!」

一誠は何とか相手の攻撃を回避しながら叫ぶ。

辰巳も同じく相手の攻撃を回避して、一誠と辰巳は背中合わせの状態になった。

辰巳「チツ、何か——とちよつと違くな?——がいるからか?」ボソボソ

一誠「あ?元浜何か言ったか?」

辰巳「なんでもねえよ・・・それより一誠、やれるか?」

一誠「当たり前だ!俺はカイトさんからとん鍛えられたからな。まだ【得た力】を

使わずに負けるかよ!」

辰巳「・・・そっか」

辰巳は少し息を吐いてから剣を持つ右手を一誠に向ける。

その行動に理解してか一誠も籠手のある左手を出して合わせる。

一誠「行こうぜ!親友!!」

辰巳「ああ！勝つぞ一誠!!」

二人は互いに向かつてくる敵に正面を向けて構える。

その二人の「異様なオーラ」に気づいてかライザーの眷属達も突っ込まず、構えて警戒する。

レイヴェル「……なるほど、あれが噂に聞くドラゴン……」

レイヴェルが誰も聞こえない位の声でそう口にする。

一誠から漂う赤いオーラ

辰巳から漂う青いオーラ

二人はそのドラゴンのオーラを放ちながら、咆えるように叫ぶ。

一誠「行くぜ! 『龍の剣』!!」
ドラグ・サイカ

《《Blade!!》》

赤い籠手から現れる赤黒い球体が現れる。

それがまるで生きているかのようにぐにやぐにやと変形し、その形状は球体から大き

な黒い刀身に赤い脈のような大剣になった。

辰巳「なら俺も！ 来い、インクルシオオオオオオオオオオ!!」

辰巳が叫ぶと剣が消え、鎧を身に纏う。

全身が青い装甲で白いマントに赤のラインが入っている鎧は辰巳の全身を覆い、ドラゴンのオーラをさらに高める。

辰巳「ドラゴンの力！」

一誠「舐めんじゃねえぞ！」

「俺が、俺たちがドラゴンだ!!」

赤い龍の剣

一誠「オラオラ行くぜえ！」

辰巳「やられたい奴から来やがれ！」

それぞれ別方向に突っ込み一誠は騎士シーリスと兵士ニイとリイを、対して辰巳は戦車イザベラと僧侶美南風に向かって行く。

一誠「オラア！」

一誠が両手で持つ『龍の剣』を大きく振るう。

それをシーリスとニイとリイは回避するが、回避した場所に振り下ろされた地面にクレーターができ、更にその切れ目に炎が漏れ出すように噴出する。

シーリス「熱い・・・！これは!?!」

ニイ&リイ「にやにや!?!」

一誠「へへっ！この剣から出る炎はドラゴンの炎！お前らの着ている服を燃やして、脳内ホルダーに保存してやるぜ!!」

辰巳「そういう為の炎じゃねえだろそれ!?!」

一誠が下品な顔つきでシーリス達に襲い掛かるのに対して辰巳がツツコミを入れる。その隙を付いてイザベラの拳が辰巳に向かって殴りかかる。

イザベラ「正面の敵に余所見など・・・ツなに!？」

イザベラの拳は確かに辰巳の鎧の胸辺りに直撃した。

しかし、殴った場所は凹みができる所か傷が一つもつかなかった。

辰巳「お返しだ!」

イザベラ「グツ、ガツ!」

お返しとばかりに拳を振るう辰巳に対して、イザベラが両手をクロスさせてガードしようとするが重い攻撃を必死に耐えるのでやっとの状態だ。

イザベラ「この!」

美南風「イザベラ援護します!」

美南風が魔力を使ってイザベラを強化をしているがそれを軽く砕くように鎧を纏った辰巳の拳は防御用の魔法陣をも吹き飛ばす。

イザベラ「クツ！何だその鎧は？神器なのはわかるがここまでとは・・・だが！」
辰巳「ツ！ぐあツ！」

イザベラはフェニックスの炎のようなものを拳に纏わせ殴る。

辰巳は受け止めようとするが勢いに押されたのかそのまま吹き飛ぶ。

辰巳「あつづく・・・魔力を拳に纏わせてるのか？」

イザベラ「この炎はフェニックスの炎と思え！ハアアツ!!」

辰巳「うおつ!!?ってアツアツツ!!」

イザベラの炎を纏った拳を辰巳は躲したり、ガードするが炎の勢いに押されている。

そんな辰巳の中、一誠は・・・

一誠「せりやあ！」

シーリス「はああ！」

ガキンツ！という衝突する音と共に一誠の大剣とシーリスの大剣がぶつかり合う。

その一誠の両サイドをニイとリイが襲い掛かる。

ニイ&リイ「うにやあ!!」

一誠「うお！危ね！」

シーリス「そこ！」

一誠「ぐつ、ウオオオオオ・・・！」

ニイとリーの攻撃を回避するがシーリスに罅迫り合いで押される。歯を食いしばって耐えるがズズズと地面を滑るようには後退する。

ニイ「なくんだ、全然大したことないにや」

リー「不潔な輩はさっさと退場にや」

シーリス「どうした？先ほどの威勢は何処にいった？・・・まあいい、これでッ！」

シーリス達はそれぞれ構えて突撃する状態を取る。

それに合わせてイザベラ達も構えながらシーリス達と同じように辰巳に言う。

美南風「ライザー様の勝利は決まっているさかい、早めの退場を進めますえ」

イザベラ「私の見込み違いか？・・・まあいい、そろそろやられてもらうぞ！」

余裕の表情を見せるライザーの眷属に対して押される一誠と辰巳。

それぞれ拳と剣が振り下ろされ、直撃する所でレイヴェルが呟く。

レイヴェル「まったく……慢心してはいけないとあれ程言いましたのに……」

一誠「……ハハッ」

シーリス「ッ!?!」

辰巳「……フツ」

イザベラ「何ッ!?!」

それぞれ押されていた一誠はシーリスを大剣ごと『龍の剣』を薙ぎ払って押し返す。辰巳もイザベラの炎を纏った拳を難なく片手で受け止めて制止させる。

一誠「へへっ……忘れたか？俺にはこいつがあるんだぜ？」

シーリス「『赤龍帝の籠手』ブリステッド・ギア!?!だがまだ倍加は一回しか……なッ!?!」

そう言っただけで赤龍帝の籠手を見せながら言う一誠に対してシーリスは最初驚かなかつたが、その緑の宝玉の輝きを見て驚愕する。

シーリス「お前！いつそこまでの力になるまで倍加を行った!?!一回ではそのオーラではないはず！」

ニイ「それって十秒ごとに倍加ではないのかにや!!」

リイ「この短時間でそこまで強くなるのは不可能にや!」

それぞれが吼えるように一誠に言うが一誠はそのニヤリつと笑った顔で左手を前に突き出しながら言う。

一誠「ああ!だから手っ取り早く【倍加の時間を短縮】したんだよ!!」

《Times eight. Ignition Boost!!》

《Explosion!!》

そう言つて一誠の体から八回分の倍加をした力を纏つた一誠は両手で持つ龍の剣を大振りに振つた。

一誠「イツケエエエ!!」

《Flame!!》

シーリス「くっ!?!」

ニイ&リイ「きやあアアアアアアアツ!!」

大振りに振つた大剣から炎が放たれる。

その炎にシーリスは回避できたが、意表をつかれたニイとリイはそのまま飲み込ま

れ、粒子となって消えた。

グレイファイア《ライザー様の兵士^{ポーン}二名、リタイア》

シーリス「・・・チツ！よくも・・・喰らえ！」

一誠「オラア！」

シーリスから振り下ろされる大剣を一誠は難なく左手の籠手で受け止め、そのまま左手に力を入れることで大剣を砕いた。

シーリス「わ、私の剣が「タッチ！」なっ、しまった!?!」

一誠「触った・・・触ったぜ！喰らえ、洋服崩壊！」
ドレス・ブレイク

シーリス「きゃ、きゃああああああ!!?」

動揺したシーリスのすきを突いて一誠が彼女の体を触り、洋服崩壊を発動させて全裸にさせる。

シーリスは絶叫するが、一誠はいやらしい目で見ながら左手を突き出し魔力を行使する。

すると野球ボール位のサイズの魔力玉が出来上がり、それをシーリスに向ける。

一誠「脳内フォルダに保存完了！そじゃあいくぜえ！」
 作った魔力玉をシーリスの前に突き出し、そのまま魔力玉を……殴る。

一誠『『龍ドラグ・バスターの破砲』!!』

シーリス「こんな！こんな男にいいいい……！」

グレイファイア「ライザー様の騎士ナイト一名、リタイア」

殴られた魔力玉は弾けるように割れ、赤い砲撃と変わる。

それに飲み込まれたシーリスは叫びと共に、粒子となって消えた。

一誠「いよっしやああああ！これで後hイツテエ!？」

辰巳「おいバカ。なんだよあのふぎけた技は？マジでこつちまで恥ずかしいんだから二度と使うな」

ガツポーズを挙げながら喜ぶ一誠だったが、頭に受けた衝撃に悶えた。
 後にはいつの間にか鎧姿の辰巳がおり、右手には水色の槍を携えている。

一誠「も、元浜!? お前いつの間に……つて、なんだよその槍!？」

辰巳「ああ、これか? こいつは『九の殺槍』ノインテーターていうインクルシオの副武装だ。それと……」

グレイファイア《ライザー様の戦車ルーク一名僧侶ベシヨツ一名、リタイア》

辰巳「お前より倒すのが遅い筈ないだろ?」

そう言つて鎧の兜が消えニヤツと笑を浮かべる辰巳顔が現れる。それを見て同じく一誠も笑い拳を出す。

辰巳は理解して、同じく拳を出して互いにぶつけ合わせた。

一誠「木場の方はどうだ?」

辰巳「ああ、それなら……《ライザー様の騎士ナイト一名、リタイア》……つて感じで、平気そうだぞ?」

一誠「よし! 後はライザーと女王クイーンだな。……まあ、朱乃さんなら大丈夫そうだと思うけどな」

辰巳「とりあえずリアス部長に連絡だ……つて、そう言えばライザーの僧侶は?」

一誠「ああ、それならあつちに・・・いない」

辰巳「まあ、本人は戦わないって言ってたし、あまりいい気にしなくてもいいな。それじゃあ部長に連絡するから木場を呼んで来てくれ」

一誠「わかった」

一誠は木場の方に向かいに行つて、辰巳は耳の通信機でリアスに連絡を行う。
殲滅を報告するとリアスは声越しでもわかる位に嬉しそうな口調で言う。

リアス「よくやったわ。それじゃあ次の指示ね」

そう言われ、三人はそれぞれ領きながらリアスの指示に耳を傾ける。

リアス「まず、今朱乃が戦っているライザーの女王クイーンの所には辰巳に行つてもらおうわ」

辰巳「俺がですか？」

リアス「ええ。そつちには回復した藍華も向かわせているから、朱乃と三人でライザーの女王をお願い。・・・それで祐斗はその場で待機。今から私とアジアが行くからそのまま敵の本陣に行つてライザーを叩く」

一誠「えっ、部長が!?!」

祐斗「部長。王キングが本陣を出るのはリスクが大きすぎるのでは？」

リアス「本来ならね……けれど、相手の残りがライザーと女王クイーンだけなら話が変わるわ。それにライザーは不死鳥……フェニックスである以上相応のリスクは負うべきよ」

一誠「部長……」

一誠が不安そうな声で言うのに対して、リアスはいつも通りの口調で一誠達に言う。

リアス「……大丈夫よ。私だつて特訓して強くなつたもの。……それじゃあ行くわよ、私の可愛い下僕たち」

そう言つてリアスは通信を切断する。

祐斗と一誠は不安の顔をしているのだが、辰巳はそれを見て肩を竦めながら言う。

辰巳「部長の言う通り、ここまで来たら数で攻めたほうが寧ろいいかもな」

一誠「元浜……」

辰巳「そもそも部長は俺たちの王キングだぜ？俺達よりも簡単にやられないし、それにアシアもいる。ここまで来たらやるしかないだろ」

祐斗「そうだね。それに僕と一誠君だけでライザー・フェニックスに挑むよりも、部長とアシアさんも入れば勝算も増えるからね」

一誠「木場……」

辰巳「・・・まっそういう事だ」

そう言つて辰巳は二人を背にして歩く。

一誠「元浜？」

辰巳「さつき部長が言つてただろ？俺は今から朱乃さんの所に向かうんだよ」

一誠「そっか・・・元浜、負けんじゃねえぞ！」

祐斗「気を付けてね？」

辰巳「ああ・・・お前らもな」

そう言つて辰巳は走り始め、その場を去る。

校庭に残っているのは一誠と祐斗だけとなった。

一誠「とりあえず。俺は回復しないと・・・倍加も今は使えないし」

祐斗「どうしてだい？」

一誠「俺の『赤龍帝の籠手』って一回の倍加に十秒かかるだろ？それをどうしようかって悩んでた時にある方法を思いついたんだよ」

祐斗「方法？それはなんだい？」

一誠「まあカイトさんの案なんだけどな……【時間が掛るなら、その時間を前借りすればいい】って……簡単に言えば倍加を回数を、【十秒ごとを無視して】一気にできるんだ。まあその代わりに一定時間倍加自体ができなくなるけどな」

祐斗「それって……所謂、諸刃の剣って事？だって、倍加の効果が切れれば使えなくなるんでしょ？」

祐斗はそう言つて難しい顔をしながら一誠の言葉を返す。

一誠も頬を掻きながら苦笑いしながら祐斗に言われた事に対して返す。

一誠「いや、カイトさんがな？どうせ攻撃喰らったら倍加がリセットしちまうならさつさと上げて切れる前に倒した方が良くって言つてたんだよ」

祐斗「そうなのかい？」

一誠「そうなんだよ。それでさ、カイトさんが特訓の時に……」

と言つた感じでありアスが到着するまで会話を続ける一誠と祐斗。

ライザーとの勝負もあとわずか……

新校舎の生徒会室

その生徒会長の椅子に踏ん返り返つて座るライザーが目の前に小さな魔法陣を展開させながら話をしていた。

ライザー「そろそろ此方も終わるが……貴様の方はどうだ？」

「……大体の用事は済ませた。後はこの騒動の張本人を叩くだけ」

ライザー「ふんっ。今回はお前と手を組んでやったが、こんな回りくどい事をする必要などないだろ?……大体」

ライザーは机に置かれた紅茶を一度飲み、一息入れてから会話相手に文句を言う。

ライザー「俺の下僕に手を抜かせる必要は無かっただろ？おかげでもう残っているのはユーベルーナだけだぞ？」

「……レイヴェルは？」

ライザー「アイツが戦うと思うか？それにつまらないと言ってさっさと自己申告でリタイアした」

「……そう」

ライザー「グレイフィア殿に事前にアナウンスしないよう言ったが、それでもこのぎまだ。確実に評価は下がるな」

「……それは大丈夫。これを見ているのは事情を知っている連中か、この後捕まえる連中だけだから」

ライザー「……ふんツ、よくもまあここまで用意周到な茶番だ。そして、それをやらされているこっちは至極、不愉快だ」

そう言つて悪態着くような顔で会話相手に言うライザー。

飲み干した紅茶のカップを置き、椅子から立ち上がる。

ライザー「そろそろ俺も出る。……それで？別にここから俺が勝つてもいいんだな？」

「・・・勿論。ここからリアス・グレモリーが勝とうが負けようが興味ないし、こっちはアンタらのゲームが終わってからが重要だから・・・好きにやっちゃって」

ライザー「ふんっ、下からそのつもりだ。貴様もせいぜい俺が倒すまで、くだらない事で死んだら唯じゃ済まさないからな・・・カイト・バルバトス」

そう言つて一泊置いて部屋のドアに手をかけた辺りで会話相手に名を呼び、告げてから生徒会室をでた。

ここからがライザー対リアスの最終戦。

そして・・・その終了がカイト・バルバトスの粛清が始まる。

カイト「・・・それじゃあ。リアスとライザーのレーティングゲームが終わったら・・・俺らも始めようか？」

“レーティングゲームを・・・”

悪鬼の龍

元浜辰巳は転生者だ。

彼の前世はよくある二次小説のようにトラックに撥ねられてしまい、その19年という短い人生の幕を閉じたのであった。だが彼が次に目を開けた時は全く知らない場所だった。

辰巳「……ここは？ 確か俺はトラックに轢かれて……って、ここ何処？」

——それは地平線

どこまでも広がる夕焼けとそれを輝かす水面の世界。彼はそこに一人、そこに立ち尽くしていたが、突如声が聞こえた。それは男性か女性か、若いか老いてるかわからないその声は実際には声として聞こえているのではなく、直接脳内に響くように聞こえた。

——お前は死んだ……死んだ……死んだ……死んだ……

辰巳「っ！ 何だ……声が、聞こえる？」

辰巳は頭を押さえながら声の主を探す様に辺りを見渡す。

しかし、誰もいない……誰も……あるのは変わらずオレンジ色に輝く空とそれを移す水面しかない。

—ここは境界、死と生の境界、故に形なし—

—○○辰巳、選ばれた……選ばれた……—

—どこ行きたい?……天国?……地獄?—

—やり直したい?……一から?……零から?……百から?—

辰巳「は?え、ええくと……とりあえず誰ですか?」

理解が追い付けない辰巳は放心しながらその言葉を聞き、返せたのは誰かという質問のみだった。ここに来る前は何処にでもいる普通の大学生の彼にとつて、が死んだことを知り、更に誰かのわからない声が頭に直接響くという非現実的な体験をしているせいで、動揺と吐き気、更には頭痛までもが起きている。

それでも誰かもわからない声は止まらない。止まらずに、辰巳の頭に語り掛けるよう

に告げる。

—名はない、意味もない、存在しない—

辰巳「いやいや、存在しないのならなんで声が聞こえるんだよ。現実的に考えておかしいだろ」

—現実……違う—

—ここは境界、故に存在不要—

辰巳「うくん……やっぱり意味がわかんねえ」

—○○辰巳に提案……選択を—

辰巳「え？急に話が変わったな……てか選択？」

—○○辰巳は死んだ。あの世界、居た世界で死んだ……そして選ばれた—

—故に選択2つを提示……終わりにする？それとも……—

—新しくやり直す？—

辰巳「終わり？ やり直す？ 何を言つて……」

辰巳は言い終える前に声が先に言い放つ。

―簡単、終わりにするなら消滅するだけ―

―やり直すのなら転生するだけ―

辰巳「消滅つてマジか……それに転生つて……ん？ 転生？」

声の言葉に疑問を抱きながらそう口にする声は淡々と辰巳の質問に答える。

辰巳「転生つてあの転生でいいんだよね？」

―転生……生き返る事、選ばれた者だけが行われる因果干渉―

―でも、それらすべての者が善と限らない―

―同時にすべての者が悪とは限らない―

―転生する者には加護……特典を―

辰巳「転生に特典つて……何かすげえ前に読んだことがあるラノベとか二次小

説の言い回しだな……ってうお!？」

すると辰巳の目の前に突如として三つの光の柱が起きる。

それが止むと三つの台とそれぞれに赤・青・緑の光の玉が置かれている。

—力は勇氣、理は真理、守は仲間—

—それぞれ転生する世界において大事で、なくてはならないもの—

—加護は一人一つ—

辰巳「……一人一つって言う前にさ、そもそも何で転生する前提なんだ? いや、まあ消滅は嫌だけどさ。……ていうか何で俺はこんな冷静何だ? 死亡宣告させられて、変な所にいるし、普通もうちよつと取り乱しそうなんだが妙に落ちつくつていうか……それにしても特典か……」

辰巳は頭を掻きながら一人でブツブツ言いながら台に置かれている三つの玉を見る。赤と青と緑の玉を順番に見てからどうしようかと悩んでいる。

辰巳「うくん……ん? てかさ、今言われるがまま選びそうになっただけ冷静に

考えたら元の場所に戻せばそれで万事解決じゃね？」

そう口にした辰巳に答えるようにまた声が辰巳の頭に直接伝える。

「……できない」

「既に死した者は元いた場所には戻れない」

「それがルール」

「死後の世界の掟」

辰巳「あつハイ、そうなんですわね。……ほんと何でこんなところまでテンプレ二次小説みたいな展開なんだよ。」

「それで……選択を」

「力か？理か？守か？」

辰巳「おいおい、そんな事言われたってなあ……うーんと、力と理と守か……」

そこで考え込み始めた辰巳。

とりあえず辰巳は自身の状況を整理して、自身が死に、よくわからない声に「選ばれた」と言われ、加護という特典を頂いて転生するという、言葉だけ並べたら何とも力才

スという状況になっていると乾いた笑いをしながら把握した。

辰巳「まあ、生き返させてくれるだけありがたいと思うか、それとも巫山戯るな！と言うべきか……ん？　そういえばこういう転生ものつて転生先がファンタジーだったり、アニメやゲームの世界なんだがどうだろう」あの……」

―選択を……―

辰巳「えつと、その前に質問いい？　俺って何処に転生するの？」

―選択を……―

辰巳「いやあの……じゃあ特典つて具体的に何を貰えるの？　あの玉を取るとどうなるの？」

―選択を……―

辰巳「いやあのね、色々と説明してくれないとこつちも困ると言うか……ね？」

――

辰巳「……あ、あのく聞こえてますか」

―〇〇辰巳、早急に決めなければ転生を無効にし、消滅を強制選択をじk―

辰巳「わ、わかった！　わかりました！　選びますから消滅はなしで！」

声に急かされた辰巳は渋々と一通り考え込み三つの玉をどれにするか考える。そして決めたと言いなながら台に向かって前に進む。

そのまま一つの台の目の前まで着いた辰巳はそれを掴むように手を伸ばす。

辰巳「じゃ、じゃあとりあえずこれで」

—選択、受理—

—これより転生を始める—

辰巳「え、もう!?てか本当に何処に行くんだよ俺は!?!それくらい説明して貰ってm」

—転生、開始—

辰巳「ちよっ!?!は最後まで話をき・・・・・・・・・・・・・・・・」

それが元浜辰巳の始まり。

○○辰巳から元浜辰巳に生まれ変わった序章。

—転生準備完了—

―特典の確認・・・完了―

―罪と罪状を確認・・・完了―

―特典の作成・・・神器化・・・80、90、100・・・完了―

―転生開始・・・完了―

―それでは、良き第二の人生を・・・○○、いや・・・元浜辰巳―

ユーベルーナ「ぐあっ！」

テニスコートに落ちていく一人の女性、ユーベルーナはボロボロ衣服で地面に仰向けで倒れていた。

そこを上から微笑みながら雷を迸らせている朱乃も同じく着ている巫女服が所々破けており、両者ともにそれなりに負傷しているのがわかる。

朱乃「ふふふ。そろそろお終いですかね？」

ユーベルーナ「流星は【雷の巫女】と言ったところね。．．．でも、貴方の魔力もそろそろ．．．」

朱乃「あら、心配いりませんわ。少し休めばすぐに回復致しますもの「ふふふ．．．」つ、あらあら、何かおかしな事でも？」

ユーベルーナ「ふふつ．．．掛かったわね」

そう言つてユーベルーナは懐から小さな小瓶を取り出す。それがなんなのかわかった朱乃は驚愕の顔になる。

朱乃「それは!？」

ユーベルーナ『フェニックスの涙』。いかなる傷もその場で癒すことが可能なフェニックスのみ作れる秘薬。レーティングゲームでも二つまでは使用を許されているこれをまさかこんな早く使う事になるとはね」

そう言つてユーベルーナは自分の体にフェニックスの涙を垂らすと傷が癒え、直に回復する事ができた。

ユーベルーナ「形成逆転ね」

朱乃「くっ・・・」

ユーベルーナ「チエックメイトね、吹き飛びなさい」

そう言つてユーベルーナが指を鳴らすと朱乃の周囲に魔法陣が現れ、それと同時に次々と爆発が起こる。

朱乃「きゃあああああ!!」

ユーベルーナ「これで・・・・・・・・終わりね」

吹き飛ばされる朱乃に止めと言わんばかりの大きな魔法陣を発動し、今度は朱乃全体、それ以上の大きな大爆発が起きる。

爆煙と轟音が周囲を包み込み、その中でユーベルーナは勝利を確信し優越な笑を浮かべる。

もはや勝利は確実、後はアナウンサーであるグレイファイアの撃破報告が流れるのを待つだけ。

ユーベルーナ「ふふふつ、そろそろライザー様と合流を………したかったですかね」

そう口にしたユーベルーナは勝利の確信は消えた。

まずアナウンスがいつまで経っても流れない。本来撃破したのならグレイファイアのアナウンスが流れるはずなのにそれが起きないという事はつまり、まだ姫島朱乃はいるという事だ。

そしてもう一つは、その付近の朱乃が本当なら墜落しているであろう場所に視線移すとボロボロの姫島朱乃は存在した……その彼女を支える人影も一緒に。

ユーベルーナ「回復は済みましたか？ 桐生 藍華」
リアル・グレモリーの騎士

藍華「ええ、お陰様で」

朱乃「藍華・・・さ、ん」

そう言つて朱乃の背中を支えている藍華はもう片方の手に持つ黒い刀『追影の刃爪』
シャドウ・チエイズ
 から現れた黒い影状の物体が、所々朱乃と藍華を囲むようにしており、爆発を防いでいた。

藍華「ああ・・・姫島先輩遅れてすみません。後は私達に任せてください」

朱乃「すみません・・・このような無様な姿を後輩に晒してしまつて」

藍華「何言つてるんですか姫島先輩。まだまだここからでしょ？」

肩を竦めながら俯いた朱乃に藍華は支えながらそう言つた。

朱乃は「すみません」と言いながら自身で立つと手で示して、よろよろではあるが立ち上がった。

ユーベルーナ「あらあら、わざわざやられに来るなんてね……」

藍華「んなわけないでしょ。アンタはここであたし達が倒す。そんでもってそっちの王様は兵藤や部長達が倒す。そういう予定なの」

ユーベルーナ「あら……随分と無謀な予定ですね。いくら魔王の娘や赤龍帝がいようと不死鳥であるライザー様に勝てるはずがないのに……。そもそも私を倒す？ 貴方如きにやられるとでも？」

そう言つて余裕の表情で杖を藍華に向けるユーベルーナ。

それを見た藍華はため息混じりに、それでいて口元をニヤケながらユーベルーナに告げる。

藍華「まあ確かに私や姫島先輩だけじゃ無理よね」

朱乃「藍華さん……」

ユーベルーナ「ふふふつ、なら今の内に降参でも「でもね」……？」

藍華「さつき私は言つたはずよ？……私達つて」

ユーベルーナ「？……っ!?うぐう！」

藍華の言葉に理解したユーベルーナは咄嗟に後ろからの気配に察知して魔法陣を張って防御の体制をとるが、勢いよく飛んできた何かの衝撃に押され、ユーベルーナは再度地面に落ちる。

ユーベルーナ「ぐっ……今の衝撃は？」

驚いた表情のユーベルーナは後ろから吹っ飛ばしてきた物体は……水色の槍は不規則な動きで飛んでいき、主……「元浜辰巳」の手元に戻る。

辰巳「悪いな。俺も混ぜてもらおうぞ、爆弾女」

藍華「ナイスタイミング辰巳♪」

朱乃「辰巳……君……」

藍華は親指を立てながら笑みを浮かべ、朱乃は驚いた表情で元浜を見据える。

元浜自身は神器の鎧に身にまとった状態であり、右手に持つ槍『九の殺槍』をユーベルーナに向ける。

辰巳「姫島先輩。大丈夫ですか？」

朱乃「え、ええ……でも魔力がもう……」

朱乃のその言葉で辰巳は彼女がもう魔力が枯竭しているのを理解する。

辰巳「わかりました。そしたら先輩は少し休んでいてください」

朱乃「辰巳君……でも」

藍華「まあまあ先輩。一旦ここは後輩の私たちに任せてくださいよ」

朱乃「藍華さんも……わかりました」

辰巳の言葉に朱乃は思惑うが藍華に肩をポンポンと叩かれながら笑みを浮かべながら言われ、思わず渋々と了承する。

そのまま藍華は辰巳の隣まで歩み、二人は土煙を払いながら現れたユーベルーナを見る。
据える。

ユーベルーナ「まったく、小癪な真似をしますね」

辰巳「おいおい、最初にその不意打ちで小猫ちゃん小癪な真似と桐生を攻撃した奴がよく言うぜ」

ユーベルーナ「ふんっ、減らず口を……食らいなさい！」

そう言ったユーベルーナは辰巳と藍華にそれぞれ既に地面に仕掛けてた魔法陣を展開し爆発を起こす。

朱乃「辰巳君！藍華さん！」

朱乃が叫んで二人を心配する。

ユーベルーナも二人を撃破したと思い笑みを浮かべるが、土煙から現れる二つの影を見てすぐさま驚愕の表情に変わる。

ユーベルーナ「なっ!？」

辰巳「ふうく……あぶねあぶね」

藍華「あのねえ……そうなんでも同じ手を喰らうわけないでしょ？流石に舐めすぎ」

朱乃「二人共、大丈夫ですか？」

藍華「はくい！大丈夫ですよ」

辰巳「同じく」

そう言つて現れたのは辰巳の纏う発光した青い鎧と、藍華を囲む透けた黒いナニカだった。

さらに辰巳の鎧から《A d a p t !》という音声が放たれ、青い鎧に白いラインが廻るように浮かび上がる。

そんな二人は心配する朱乃に手を振つて返す。

辰巳「さてと・・・桐生。いつもの感じでないな？」

藍華「ええ、勿論。いつも通りね・・・あつ、そうだ辰巳」

辰巳「ん？」

再びユーベルーナに身構えた辰巳と藍華だが、藍華が何かを閃いて辰巳言う。

藍華「先にあの女を倒した方が、一つ何でも命令できるのつてどう？」

辰巳「・・・・・・は？なんで急に」

藍華「ほら、いいからいいから！アンタが勝てば私に何でもできるのよ？・・・・とい

う事で！」

辰巳「ておい！ちよつとまつ！……」

そう言つてにやけた顔をした藍華は、そのまま辰巳を置いてユーベルーナに向かつて地面を蹴つた。

完全に不意を突かれ、置いていかれた辰巳は「ええく……」と言いながら鎧の上で当たを掻く。

辰巳「……つたく、しょうがないなアイツは」

《ハツハツハツ！いつもの事だろタツミ！》

そう青い鎧……神器の封印されたドラゴン、ガンドレクス・ドラゴン悪鬼の龍に笑われた辰巳は溜息を吐きながら槍を構える。

辰巳「わかつてるよ。……そんなやまあ、俺らも行くか『ブラート』……いや、相棒」

《おう、咆えろタツミ！熱い魂でエエエ!!》

辰巳「すううう………うおおおおオオオオオオオ!!」

辰巳は大きく息を吸って、そして叫び走り出す。

彼の叫びに答えるかのように鎧も青白く光輝く。

その叫びはまるで本物の龍の咆哮の如く。

こうして不死鳥の女王と紅髪姫の騎士と戦車、後に女王も加わりぶつかり合う。

「では、このゲーム終了後、君たちのレーティングゲームという事でいいね？」

リアス・グレモリー対ライザー・フェニックスは終盤戦へ……

赤と紅の誓い

駒王学園校庭にて、一時の休憩の為、校庭の茂みで身を隠している一誠と祐斗は自陣の旧校舎から来たリアスとアーシアと合流を果たした。

「部長、こつちです」

「二人共無事ね？念の為、少しアーシアの治療をしてもらいなさい。アーシア、お願いね」

「はい、部長さん！すみませんラピユセルさん、お手伝いして頂けますか？」

《了解ツスお嬢！Connection 接Twilight Healing 続『聖母の微笑』Multitudes Health 複数治療、開始》

アーシアは既にセットアップした状態で、その指に付いた指輪、『聖母の微笑』を光らせながら一誠と祐斗の受けた傷を治療する。

セットアップしたアーシアの身を纏う防護服、通称『バリアジャケット』は教会でシスターをしていた時と似ていた。

しかし、以前着ていた物よりも幾つか異なっており、頭の帽子や服に彫られた刺繍はシヤマルのバリアジャケットにとっても似ていた形をしていた。

「すごい……二人同時に治療できるなんて」

「ありがとうアーシア！」

「えへへ」

一誠と祐斗のお礼に照れくさそうに笑みを浮かべるアーシア。

二人の治療を確認したりアスはライザーがいるであろう新校舎を見据え、このあとの決戦に備えて最終確認をする。

「さて、これからライザーと戦うけど、はつきり言つて勝算は低いわ。でも、此方は子猫以外がまだ大丈夫なのはいい意味で想定外だったわ」

「それはどういう……」

「……こう言つては皆に失礼かもしれないけど、後二人、悪くて三人はリタイアする事まで、想定の内に入れてたわ。何せ相手はライザーとその眷属だもの。……寧ろ順調過ぎて不気味だわ」

「……いえ、確かに部長の言う通り、思いのほか僕達は順調過ぎますね」

「でも！後は俺たちでライザーを倒せばいいんですよ？なら任せて下さい！俺が必ずアイツを倒しますから」

「そう……ありがとうイツスッ!!」

そこでリアスは言葉を止めて振り返り、何かを凝視する。

「みんな構えて！来たわ!!」

「「ツ!!」」

リアスが指示を出す前に三人に叫びながら自身も校庭を見ながら構える。そこに飛来してきた男を睨みながらリアスはその人物の名を呼ぶ。

「ライザー……!」

「ようリアス。終わらせに来たぜ」

そう言つて余裕そうな表情で言うライザー。

以前の同様にホスト被れなスーツの衣装で、背中にはフェニックスの翼を出しながら現れた。

「それにしても。ここまでやれるとは大したもんだなリアス。流石はバルバトスに鍛えられただけはある」

「一応、その褒め言葉はありがたく頂くわ。お返しは敗北をあげようかしら?」

「ふんつ、減らず口を。その態度も余裕も、俺の業火で焼き尽くしてやる」

そう言つて堂々とした体制でリアス達の近くで着地すると、何も構えずに余裕の表情でリアス達を睨むライザーに一誠は『赤龍帝の籠手』を展開し、裕斗は魔剣を、アーシアはデバイスを構え、リアスも魔力のオーラを纏いながらライザーを睨む。

「ライザー!」

「久しいな下級悪魔君、いや・・・赤龍帝。それに魔剣使いに僧侶が一人・・・という事はユーベルーナの方には女王と騎士、それと戦車か」

「ええ、貴方達を離れた状態の方が一番勝率が高いもの・・・悪いけど、貴方は私達が相手よ！」

リアスは先制の滅びの力をライザーに向けて放つ。

単調な一直線の攻撃だが、そのスピードは不意をつくには十分な速さだ・・・が。ほう・・・勝率？俺に勝つと？そういう事でいいんだな？」

しかしそれをライザーはバシツと音を立てながら片手で難なく受け止める。

ライザーは眉を顰めては、憤怒の表情をあらわにしている。

「ほぎけよりアス。今のうちに宣言してやる！お前じゃ俺に勝てない！」

「魔剣創造！」
ソードパース

ライザーがそう言ってリアスを指しながら叫ぶと共に戦いが始まった。

まず、祐斗はいつの間にかライザーの横に現れ、剣を横薙ぎに振るう。また、反対側には作られた魔剣がライザーに向かって飛んでいく、完全に挟んだ状態である。

「ほおお？不意をつくのは良し。スピードも悪くないな・・・だかな！」

「っ！ぐあああ！」

「無駄だ！」

いつの間にか作られた炎を剣を両手にそれぞれ持った二刀流状態で祐斗攻撃と飛んでくる魔剣を軽々といなす。

砕けた魔剣に驚いている祐斗の腹にキツイ蹴りを入れて吹き飛ばす。

「らあああああ！」

「無駄無駄！」

今度は一誠がライザーに殴ろうとフェイント混じりの突撃する。

しかし、一誠のパンチをライザーは受け流すようにいなして、当たらずに通過する。

「無駄無駄ア！」

「があッ!？」

ライザーは一誠に向けて炎の剣を振りかざし、そこから炎を斬撃を放たれた。

一誠はそれを回避することができずにまともに食らい吹き飛ばされてしまう。

「一誠さん！」

「アーシア、一誠に回復を！はああああ!!」

アーシアは一誠に駆け寄り、リアスは指示を出しながらライザーに滅びの魔力を再度放つが、それをライザーは防がずに食らう。

「無駄！無駄！無駄アアア!!効かんぞリアス・グレモリー!!」

滅びの魔力を直撃し、腕を吹き飛ばされるもそこから炎から腕が再生される。

そのまま続けざまに攻撃を仕掛けるリアス。だがそれらはライザーには全く効いていない様子だ。

「くっ！流石はライザーね．．．でも、まだ始まったばかりよ！」

全く効かないライザーに冷や汗するも、それでも後ずさること無く対面するリアス。

そんな中、リアスの横を通り過ぎる者がライザーに向かって走る。

「イツセー！」

「このオオオオオオ！くらいやがれ！」

《Flame!!》

回復した一誠がライザーに対して、手に持つ『龍の剣』を振るい大剣から炎を飛ばす。

その炎はライザーを飲み込み、一誠は「どうだ！」と叫ぶ．．．しかし

「なんだ？このチンケな炎は？」

「「「っ！」」」

またしてもライザーは無傷。

溜息を混じりに呟くライザーは手を振るうだけで一誠の放った炎を消す。

それを見て一誠は動揺を隠せない表情で構える。

「くそ！なんで効かないんだ「それはなあ、赤龍帝」よ．．．ッ!?!」

「圧倒的な力の差だ。よく味わえ赤龍帝!!」

そう言って突如一誠の懐にまで来たライザーは炎を纏った拳で一誠にラツシユする。突然の攻撃にガードす時間もなく、一誠は諸に直撃、滅多打ちにされる。

「ぐああああああああああ!!」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!吹き飛ばせ赤龍帝エ!!」

「がアアア!!!」

ラツシユし続けながら叫ぶライザー。

最後に腹に蹴り飛ばし、一誠を新校舎に向かって吹っ飛ばす。

新校舎まで飛ばされた一誠は窓ガラスを割る音と激突する音のみが聞こえ、校庭から消えた。

「一誠君!」

「イツセーさん!」

「イツセー!!」

リアス達は叫びながら一誠が吹き飛ばされた場所を見据える。

そこから一誠は現れず、激突音が止んでも一誠の姿を見る事ができない。

「イツセエエエエ!!」

リアスの叫びのみが校庭に響く。

「ハハハ！ さあリアス、まだ始まったばかりだ！ せいぜい俺の楽しませてみる!!」

それをあざ笑うかのようにライザーは見下す目のまま、リアス達に歩み、手をかざす。リアスはただ、怒りに魔力を身に纏わせながら、ライザーを睨む。

そして……

「ライザー!!」

「こい！ リアス!!」

紅と炎がぶつかり合い、閃光と共に校庭を抉った。

「あれ？ 俺は何をしてんだ？」

そう思いながら一誠は動かない体と重い感覚、そして視界の暗さに疑問を抱きながら

そう思った。

「確か、今はレーティングゲームのはず．．．！そうだ、ライザーに！」

そう思い、一誠が体を起こそうとするも思うように動けない。まるで金縛りの如く、必死にもがいても動けない。それでも一誠は「こんなことをしている場合じゃない！」
「早く部長を助けに！」と焦りながらも足掻こうともがき続ける。

そうやって体を動かそうともがく一誠に突然炎が広がる。

「うわアツツ！．．．．．くない。何だこれ？」

《．．．．．はあ、やっと会話できるようになったな》

「ツ！誰だ!？」

一誠は突如聞こえた声に驚きながら叫ぶ。

すると炎の渦巻きと共に現れた大きな赤い竜が、いきなり一誠の前に現れる。

《オレの名はドライグ。二天龍の赤龍帝と称され、お前の左手に宿ったドラゴンだ》

「ドライグ．．．！お前が俺の中ロンギヌスにいる『神滅具』の．．．．」

《ああ、よろしくな兵藤一誠．．．．いや、相棒と言うべきか》

そう言つて話しかけてきた赤い竜、ドライグは一誠に溜息交じりに話を続ける。

《それにしても．．．．今回の相棒は随分と変な奴だな。まあ、それもこれもあの【憤

怒】と【傲慢】と出会ったのが原因だろうがな》

「何を言つて……つてこんな事している場合じゃねえ！はやく部長を《まあ待て相棒》……な、なんだと。えくと赤い龍帝さんよ」

《ドライグで構わん。それはそうと相棒。今お前が行つてもあのフェニックスには勝てないぞ？それでも行くのか？》

「あたりまえだ！俺は部長の眷属で「最強の兵士」になるつて誓つたんだ！」

そう叫びながらドライグに言う一誠。

それを聞いたドライグは数秒沈黙の後に盛大に笑う。まるで馬鹿にするようなあざ笑い方で。

「な、何がおかしいんだよ！」

《ハツハツハ！……いや何、少し前までバカな宿主だなと思つてた奴から最強と聞くとは思わなくてな。……ハツハツハ！》

「……んなもんわかつてんだよ。そんなことは」

《ハつは……ん？》

一誠の言葉に笑つてたドライグは笑うのを止め、視線を一誠に向ける。

向けた先で一誠は血が出るほど左手を握りしめ歯を食いしばりながらドライグを睨むように言う。

「カイトさんにも言われたよ。「こんなバカで弱くて変な奴は初めて見た」つてな……」

それと聞いたよ、俺は〔歴代で最弱〕なんだってな。．．．でもな、それでもカイトさんは「お前は一番、『可能性』の持っている」って言葉を信じて、死に物狂いで鍛えたんだ！」

《．．．．．》

「俺は強くないからな．．．．．だけど、せめて俺は部長を守りたい！だって、あの時に約束したんだ！あの時、部長と．．．．．」

そう言つて涙を流しながら一誠は尚もリアスと誓つたあの日を思い出す様に話を続ける。特訓期間中の夜。眠れなかった日にリアスと会話した日、彼女はこう言つた。

——私はね、私をリアス・グレモリーではなく、ただの『リアス』として見てくれる人を．．．愛してくれる人と一緒にになりたいの。

そう言つてきたリアスに一誠は告げた。

——俺、部長の事は部長として好きです。

——俺は部長の家の事とか悪魔の社会とか、難しい事はよくわかんないです。．．．けど。うまく言えませんけど．．．俺にとつて部長は、今ここに居るリアス部長が全てで、一番なんです。

一誠は恥ずかしそうに頬を掻く。

それと同じく顔を赤く染めて呆然と聞くりアス。けれど、それに気づかない一誠はま
だ話す。

——だから……

「俺、決めたんだ」

《……ほう？何をだ？》

そこまで語った一誠は下を向きながら左手の手のひらを見ながらドライグに言う。

「……俺には、木場みたいな剣の才能も桐生みたいな器用さもない」

《ああ、そうだな》

握りこぶしを作りながら

「子猫みたいなバカ力もないし、朱乃さんみたいな魔力の才能もない」

《……そうだな》

そのまま左手を上……

「アーシアみたいな癒しの力もないし、元浜みたいになんでもできない……けど」
《……》

その上に挙げた拳を、今度はドライグに向けながら、ニヤリと笑う。

「俺はそれでも【最強の兵士^{ホーン}】になってやる！部長を！仲間を守るために俺は、たとえば神様だろうとぶつ倒す!!」

一誠はドライグに向けてそう叫ぶ。その瞳には自信と覚悟に満ちた顔と目をしていった。

「それでもって。今はあのニワトリ野郎を殴らなきゃいけない。でも俺は弱いから……力を貸してくれるか？ドライグ」

《ほう……覚悟はあるのか？》

「ああ。ちょうどいいタイミングでお前と会話できたんだ。それに……」

ドライグの問いに一息付けながら真剣な顔で一誠は答える。

「これで部長を守れるなら、たかが腕の一本や二本は安い取引だ」

《……ふは》

一誠の覚悟。

一誠の答えを聞いたドライグは盛大に笑いながら……ドライグもニヤリと笑いながら一誠を見据える。

《フハハハハ面白いいいだろ相棒！【最弱】のお前に、力の象徴と言われたこのオレが【最強】与えてやる！》

そういうと、空間に少しずつ光が照らされて、視界が眩しくなる。

《リアス・グレモリーの騎士一名、リタイア》

グレイファイアのアナウンズが鳴り響く校庭。

そこにはボロボロのリアスとそれを後ろから涙を流しながら治療するアーシア。対面には無傷のライザーがいた。

「ふう……まつ、こんなもんだなリアス」

「くっ……ライザー……」

リアスは膝を付き、ボロボロのその姿でも、尚瞳の光は消えぬままライザーの方を見て魔力を練ろうとする。

しかし、既に限界に近い体で、もう枯れてきた魔力のオーラは、既に2割位の力しか発揮しない。

「もうチエツクメイトだリアス。君はもう十分に功績をだした。もうこの辺でいいんじゃないか？ さっさとリザインしろ」

「言った……はずよ、ライザー……私は決して、リザインは……しない！」
リアスは振り絞った魔力をライザーに放つも。

それを簡単に払いのけるように弾く。ライザーはそんな満身創痍なリアスを見て、呆れながらも手にフェニックスの炎を纏わせる。

「そうか……君はもう少し利口だと思っていたんだがな。……
かたない」

そう言いながら、ライザーは一步、また一步とリアスに近づく。

「そんなにリザインが嫌なら、君の望み通りに再起不能リタイアさせてもらうぞ。後の婚約の件はこちらに任せて、君はもう……眠るといい！」

そう言つて、ライザーは魔力の炎を纏つた手をリアスに向けて振り下ろす。

「部長さん！」

「クツ……！」

ライザーの攻撃にアジアはリアスを守るように前で手を広げ目を瞑る。リアスも歯を食いしばりながらこの後来る痛みにも目を瞑る。

もはや絶体絶命の一瞬……

《Welsh Dragon Over Booster!!!》

その声と共に……

「ぐああああッ!!」

悲鳴が響いた。

「……………つ、あ、れ？」

「……………ぶ、部長さん。これは……………つきや!？」

いつまでも来ない痛みと先ほどのライザーの悲鳴に疑問を抱き、リアスとアーシアはゆつくりと目を開く。

そしてアーシアがリアスに尋ねようと声をかけたが、それは横に落ちてゐる人の腕と地面に突き刺さった赤黒い大剣を見て、悲鳴と共に遮った。

「ぶ、部長さん！これは!?!」

「これは……まさか……」

「チツ！復活したか……それも厄介な姿で……」

校庭にいる三人はそれぞれ驚きながら、今度は旧校舎の方から放たれる強い何かに視線を向ける。

そこから現れたのは赤……

真つ赤な鎧を身に包み……

緑色の宝玉と瞳が光る……

まるでその姿は赤い龍の如く……

「……つ、イツセー……!」

リアスは涙を流す。

それと同時に彼とのあの誓いを思い出す。

——俺、絶対に部長を……リアス部長を守って見せます！
——だって俺は……

「部長おおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

——リアス・グレモリーの……兵士^{ポーン}ですから

赤龍と鳳凰

「部長おおおおおおおおおおお!!!!」

ライザーは驚愕した。

自身の腕が突如として斬り飛ばされたのだ。驚きはする。しかし、それよりも重要なのは切断した箇所から痛みを感じたからだ。

それを確認し終え、後ろを振り返りながらライザーは再度驚きを露わにしながらも腕の再生に専念しながら見る。

そこにいるのは赤。炎を渦巻きながら現れた赤なのだ。

「赤龍帝か？それにその鎧は……」

「イツセー!」

「イツセーさん!」

そう、新校舎から炎と共に現れた赤い鎧、『赤龍帝の鎧』を身に纏った一誠がライザーに目掛けて『龍の剣』を投げたことでライザーの腕を吹き飛ばしたのだ。

そしてそのまま『赤龍帝の鎧』からブーストを吹かせながらリアスとアーシアの

元に向かう。

「部長！兵藤一誠、只今参上しました!!」

「無事だったのねイツセー……それにその姿は……」

リアスは一誠の姿を見て驚く。一誠はそんなリアスに対しガッツポーズしながら言う。

「部長。後は俺に任せてください。アイツは俺がブツ飛ばしてみせます」

「待ってイツセー！一人では危険よ、ここは「部長！」つい、イツセー……」

リアスとアーシアの元に戻った一誠は二人の前に出て既に腕を修復し終えたライザーを正面に見据える。

それをリアスは止めようとするが、一誠の大きな声と後ろ姿で親指を立てる彼の姿に思わず言葉が消えてしまう。一誠はただ一言……リアスに対して言う。

「俺はバカで弱いけど、それでも俺は……絶対に勝ちます！」

「約束、守りますから！」

「ツ……イツセー……」

リアスはその言葉と共に、唯々一誠の後ろを見ることしかできなかつた。

【約束を守る】

その言葉はリアスを止めるには十分な言葉だったのだ。二人の会話が終わり、一誠が歩もうと前を向こうとした時、アーシアは一誠の横に向かう。

「イツセーさん、してしまったのですね？」

「ああ、アーシア。．．．アレを頼めるか？」

「．．．．．わかりました。つても．．．．．絶対に無事でいて下さい！」

そう言つてアーシアは箱と瓶を一誠に渡す。

一誠はそれを受け取りながら「ああ．．．」と短く返しながら笑顔で二人に告げる。「待つててください、部長、アーシア！俺、必ず勝ちますから！」

そう言つて一誠は前に出る。

目の前にはライザー・フェニックス。『不死鳥』の名を持ち、圧倒的な力を持つ悪魔。今も悠々な立ち姿のまま、一誠を捉える姿は正しく強者である。

「．．．．．行くぞ、ドライグ」

《ああ、相棒》

だが一誠には恐れはない。

例え、勝つ見込みが低くとも、圧倒的な差があろうとも、それでも一步・．．また一步と歩む。

そして対面にいるライザーは一誠を見据えながら口を開く。

「ふんっ、リアスとのお話は終わりか赤龍帝？敗北の準備は出来たか？」

「うるせえ！俺は絶対に負けねえ！．．．来い、『龍の剣』！」

そう言った一誠は右手を横に広げ、地面に突き刺さった大剣に手を向ける。

すると大剣の刀身に巡る赤い線が脈打ち、地面から抜き出る。

そのまま回転しながら一誠に向かって飛んでいき、その勢いよく飛んでくる大剣を一誠は難なく柄を掴み取り、右手の籠手の中に吸い込まれる。

「これでよし！ドライグ、制限時間は？」

《5分だが、ダメージによつては短くなるぞ》

「十分だ！行くぞライザー！！」

そう言つて一誠は『赤龍帝の鎧』のブースターを吹かせながらライザーに向かって突撃する。

ライザーもフェニックスの翼を出した状態で一誠に向かって地を蹴る。

互いに近づき間合いに入ると．．．

「うおおおおおおお！」

拳と拳がぶつかり合った・・・!

激突した衝撃は校庭全体に響くように風圧が起きる。足元の地面は凹み、小さなクレーターが出来上がる。

「来たな! 【化け物】の入り口に! その力、そのオーラ・・・はははっ! 正しく神をも超える『神滅具』の事だけはあるな!・・・がしかし!」

そのまま何度も殴る。

殴る殴る殴る殴る殴る殴る!!

互いに怒涛のラツシュをしながらライザーは尚余裕の表情である。

しかし、一誠も負け時と殴り続ける。

「その状態、いつまで持っていられるかな? 辛いかな? 苦しいかな?・・・さっさとリザインしたらどうだ? 楽になるぞ?」

「うるせえ焼き鳥野郎! 俺はてめえをぶん殴って勝つ! その為なら・・・!」

「うぐっ!・・・更にパワーが・・・!?!」

ブースターを更に吹かせ、ライザーを押ししていく一誠はライザーの頭を掴み、押し出す。

そのままの勢いでライザーの頭を地面に打ち付けながら引きずる。

「不死鳥だろうが神様だろうが超えてやる!!」

《Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!》

「ぐあアアッ!」

引きずったライザーをそのまま左手の拳で殴る。

空中に殴り飛ばされたライザーは、錐揉みしながら回転するもフェニックスの翼を使って体制を立て直すと自信の頬と口から流れた血を拭いながら言う。

「再生しない、だと? 貴様何をsッ まさか 」

そう言つてライザーは一誠の左手に持つ輝きを見て驚愕する。

「その左手に持っているのは十字架だな?」

「うちの僧侶は元シスターでね、奥にしまったのを今借りたのさ。流星のアンタでもセイクリッド・ギア神器で高めた聖なる力は堪えるようだな!」

そう言つてもう一度ライザーに左手で殴りかかろうとする一誠。

「チッ! 舐めるな赤龍帝!!」

「グハッ!?!」

しかしそれを躲して炎を纏つた拳で殴り返された。

一誠は血反吐を吐きながらも、反撃と言わんばかりに今度は右手で殴る。

「グッ! ハハッ、左手さえ警戒すればその程dグハッ!?! な、何?」

「喰らいやがれ！ 『龍の破砲』!!」
ドラグ・バスター

投げられ放たれた力はぶつかり合い、衝突した。

互いに業火と砲撃を放ち、そして……衝突と音が校庭だけでなく全体に大きく広がる。

それにより赤い衝撃波が発生し、木々は崩れ、建物は窓が割れ、ヒビなどが出来上がる。

リアスとアシアは何とか魔法陣による防御壁を作りだして衝撃を和らげているのだが、一誠とライザーがどうなっているかが確認できない状況だ。

やがて衝撃が止み、土煙が薄くなるにつれて二つの人影が現れ、それを見たリアスとアシアは思わず叫んだ。

「……ッ！ イッセー!?!」

「イッセーさんツ!?!」

そこにはうつ伏せに倒れた一誠がいた。

鎧は所々破損し、さらに血が垂れ流れている。その姿はとても痛々しく立っているのも不思議なくらいだ。一方ライザーは一誠に比べれば傷も少なく、ボロボロではない

が、それでもダメージを負っているのか片膝を付いているも一誠ほどじゃない。

「はあ．．．はあ．．．、これ程とはな。赤龍帝」

そう言つて先に立ち上がったのはライザーだ。

ふらふらではあるが、体から炎が徐々に増え始め、傷を治そうとしている。

「そんな．．．．．イッサーー!」

「ラピュセルさん!一誠さんに治癒をします!」

《了解っス! 接続・Connection 『聖母の微笑』Twilight Healing》

リアスはボロボロ一誠に駆け寄ろうとする。その後ろでアーシアも駆け寄ろうとし、向かいながら『聖母の微笑』による治癒をしようとする。

．．．．．しかし

「邪魔をするなリアス．．．．．!大人しく見てろ!!」

「きやああああつ!」

《Protection!》

「うぐつ!．．．．．これは．．．．．っ!アーシア!」

ライザーがそれを阻めた。

ライザーより放たれた炎はリアス達を払うように壁ができ、その炎は一誠とライザーを囲むように広がり、円になるとリング状のような状態になる。

それだけでなく、リアスとアーシアに炎を放った際、アーシアに向けて強く放った為、ラピュセルが咄嗟にプロテクションによるバリアを張ったものの、アーシア自身は倒れ気絶している。

「その僧侶は回復持ちだからな。眠ってもらうぞ。……さて」

そう言ってライザーは一誠の元に歩みよる。

そのまま片手で胸倉を掴みながら無理やり立たせ、もう片方の手で炎を纏う。

「そろそろ眠ってもらおうか赤龍帝。まあ、目覚める頃には全てが終わっているころだ
と思うがな……」

そう言いながらライザーは話続ける。

「それにカーラマインのほうも時期に終わるだろう。何せ『フェニックスの涙』もあるし
な。言ったろ? 「お前じゃ俺に勝てない」と? リアスだけじゃない。お前も、あの『戦
車』の小僧もだ! ハッハッハ!」

笑いながら言うライザー。

そんなライザーに対して、一誠は尚も動かない。

しかし、時はまってくれず、その前に先にグレイファイアからアナウンスが流れた。

《リアス・グレモリーの『戦車』一名、リタイア》

「……フツ、ようやく済ませたか」

それが流れた事でライザーの顔は喜びの顔に包まれた。

勝利を確信しながら、そのまま一誠に向けて炎を放とうと腕を振り下ろそうとする。
「燃えるがいい。赤龍帝」

その手が振り下ろされる……前にライザーを驚愕させるアナウンスが流れる。

《……並びにライザー様の『女王』一名、リタイア》

「なっ何!? ユーベルーナが!?!」

それは一瞬の硬直。そのアナウンスから発せられた言葉に驚くライザーは、次に自分の腕に伝わる感触に驚愕する。

「……だ」

「ツ!? コイツ! まだ動け……」

小さく。細い声……それでも聞こえ、動いた。

「まだ……だ」

振り下ろされるはずのライザーの腕は、赤い手の……一誠の手によって阻まれた。

ライザーの腕を掴んだ手は、握りつぶすかの勢いで力が籠っており、ミキミキと音を立てる。

「グッ！ 貴様、まだこんな力が」

「まだだ……！」

血が流れながらも尚も力を籠める一誠。

そんな一誠に焦りながら、ライザーは無理やり振りほどき距離をとる。

「チツ！ しぶといぞ赤龍帝！ 本当にこういう所まであの小僧と同じとは……面倒な奴らだお前らは!!」

「はあ……はあ……つゴフツ！……俺は、俺達は負けない。例え自分が死にそうになっても俺は……」

俺は……絶対に諦めねえ!!」

一誠は叫びながら、ボロボロの鎧のままライザーに向かおうとする。

一歩、一歩と……

「チツ！まだ立ち上がるか赤龍帝!？」

ライザーは後ずさりながら叫ぶ。

しかし、それでも一誠は一步ずつ近づく……そして……

《Count Over》

「っ！そんな……」

限界が訪れた

その音声と共に、身に纏う赤い鎧が解除された。

それと同時に足を躓いた為転んでしまう。

《すまないな相棒。どうやら時間切れのようだ》

「クツ……ソ、ふざけんな！あと少しなのに！」

そう言って無理やり立ち上がるうにも力が出ない一誠は地面をうつ伏せの状態ですライグに問うように叫ぶ。

「ドライグ！今度は何を支払えばいい！目か？足か？……なんでもいい、なんでもくれてやる！だから……」

《お前の今の能力じゃあこれが限界だ。……と言つても、これでもかなり引き延ばしたほうだ。とつくにお前はポロポロだ》

「俺が……俺が弱いからか。クソ……なんで俺は肝心な所で……!」

そう言いながら無理やりにも立ち上がろうとする一誠。

その一誠に対し、左手の籠手に付いた宝形を光らせながらドライグは言う。

《……相棒。解除する瞬間、僅かだが力を宝玉に移した》

「っ!……ドライグ」

《だが、それは一時的なものだ。残念ながら、これと十字架だけでは勝てないだろう》

「……そうだな……でも、それでも俺は……!」

そう言つて立ち上がりながら血だらけの状態の一誠は展開されている『赤龍帝の籠手』をライザーに向けて言う。

「絶対に……諦めねえ!」

そんな姿を見たライザーは、血が混じった唾を吐き捨てながら言う。

「……フンッ! いい加減楽にしてやる。この一撃で!」

そう言いながら、右手に炎を収束させて凝縮するように魔力で固める。

すると、拳が橙色に光りながらも高熱を帯び、周囲に陽炎が出来る。

「最悪死ぬかもしれないが、それ位の覚悟はあるのだろうか?……受け取るがいい、赤

龍帝!!」

そう言つて構えているライザーに対して、一誠はブツブツと呟きながら懐から何かを

取り出す。

「……カイトさんが……言つてたな……」

「……大事なものが傷ついたり、泣かせた奴には……絶対に負けるな」つてな。……

そういえばあの時……」

懐から取り出した物は、液体の入った瓶だ。

それは先ほど、アーシアから受け取った物で、それを左手で……割る。

「俺が倒れてた時……部長、泣いてたな」

《Transfer!》

「難しい事はわかんないし、まだ俺は強くない。……けど、せめてこれだけは！」

割れた瓶から液体……聖水が流れ、籠手に掛かる。

すると宝玉にオーラが集まっていき、虹色に輝きだす。

「この言葉は……絶対に守る！」

そう言つて一誠はライザーに向かって走り出す。

それと同時にライザーも走り出し、徐々に近づいてき……遂に。

「うおおおおおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオ！」

終わりを迎えた……

「……ようやく終わった？」

その声と共にその空間にいる者達が声を発した人物に顔を向ける。

「そのようだね。．．．さて、改めて確認だが、この後始まる非公式戦のルールを説明しよう」

そうやって話し始めた赤髪．．．いや紅髪の男性は二人の人物に目を向けながら話す。

「現在、ライザー君とリアスの試合が終わり、新たにフィールドを形成中でね。それが終わり次第、私の『女王』の審判の下で行われる。．．．ここまでで異論はないかい？」

紅髪の男性がそう言うと、二人は頷く。

「よろしい．．．．それでルールなのだが、先程バルバトスの要求通り．．．．

カイト・バルバトスからは『王』である君一人に対して、クダル・グシオンからは駒すべて．．．と言うルールだが、間違いないかね二人とも？」

そうやって話しかけた二人の人物．．．．緑髪のオールバックのクダル・グシオンと呼んだ男性とカイトにサーゼクスは訪ねた。

「問題ね．．．．問題ありません、魔王様」

「．．．．．」

クダルの方は少し口調が変わったりしたが普通に了承する。しかし、カイトは無反応の状態である。

「カイト君?どうかしたのかい?」

「……………」

サーゼクスが訪ねてもカイトは一向に反応せず、横を向きながら壁をジーと見ている。

「おい!何とか言えよお前!」

「もしかしてビビってんのお?」

「ハハッ!これは勝利の対価はこつちのもんだな!」

そう言いながらカイトに対して侮蔑な視線を向けるクダル自身とその眷属たち。

しかし、サーゼクスは静かに待ち続けた。

「……………よし」

「ああ?何がよしだよ?さつきからキメやがって!」

クダルの眷属の一人がそう言ってカイトの肩を掴もうとする。

しかし……………その手は掴まず視界が回転する。

「……………へ?ツグペ!」

『!?!』

掴もうとした一人がその手を逆にカイトに掴まれ、一瞬にして体を一回転に回されて背中から地面に倒れた。

「なっ!?! テエえ!」

「何しやがんだ?」

クダルの眷属たちがそれぞれ反応するがその前に倒れている眷属の一人が悲鳴を上げる。

「クツソ! 何が・・・ぎゃああああああああ!!!」

「・・・なにこれ?」

カイトは今も掴んでいる手をそのまま力を入れる。

握られている手はミシツミシツ!と音を立てながらクダルの眷属が悲鳴を上げているが、それでもカイトから冷たい声を発せ。

「・・・この手は・・・なに?」

「がああああああああ!!!?!」

「お、おいお前! 俺の眷属に何しやがる!」

「コイツ! やってやる!!」

「コノオ!」

段々と握る力が強くなる。

が。そのまま潰す勢いで握っている為、クダルとその眷属達も臨戦態勢に入る……だが。

「止めたまえ諸君」

『ツ!?!』

「……ん?」

その一言でその場が止まる。

「カイト君。その手を放して貰ってもいいかい?一応ゲーム前の戦闘はルール上ダメだからね」

「……あつ、そっか」

サーゼクスの言葉に理解したのかカイトは握っている手を放す。

「よろしい。……それとクダル君とその眷属もそうだが、私が此処にいる以上余り挑発的な行為は控えなさい。場合によってはゲーム前に不戦敗にする事もあるのだから」

「し、しかしあれは此奴が「言い訳はいらんよ?クダル・グシオン」っ……はい」「よし。それでは改めて各々準備室に向かってくれたまえ」

そう言ったサーゼクスの発言に従ってクダルとその眷属（一人手を抑えて辛そうにしながら）はその場を後にする。

カイトもそれに従って立ち去ろうとするがサーゼクスから「待ちたまえ」と言われる。

「全く君は……ゲームをする前にルール違反しないでくれたまえ……」

「……ん？ああ、あれ？ちよつと反射的に動いちゃった」

「ハハハッ、やはり君はいつも通りだね。……それで？何を見てたんだい？」

サーゼクスは先程のカイトの反応の無さに対して問う。

「……ああ、ちよつと確認してただけ」

「確認？ああ、この後提示するクダル・グシオンの不正証拠かな？」

「……いや。それはもう済ませてる」

「じゃあ何を？」

そう言って訪ねてきたサーゼクスに対して、カイトは再び自身の控室に向けて歩みながら言う。

「……何って……」

「……あのバカがちゃんと勝ったか確認しただけだよ」

そう言つてカイトはその場を後にする。

《ライザー様のリザインを確認。リアス・グレモリーの勝利です》